

侯伯行列中の武士

の場合には教會に於て禮拜を勤むる時、戸或は殿堂の入口に之を懸けて打つなり。

鳴海—岡崎—赤坂—吉田市

一六四六年一月二十四日使節は宮を出發し、鳴海(Maromi)の大村及池鯉鮒(Simoni)を経て岡崎に達せり。此處は美しき建物多く、堅城を以て固め、敵の突然の襲撃に對して防禦の手段を備へたり。

此地に通ずるには長百八十八歩の橋あり。蘭人は之によりて貨物を渡せり。彼等は此地にて食事をなし、午後はヒンツアラ(Finzara 藤川?)を経て赤坂(Accasacci)に進めり。此に至るまでの路は頗る快く、或場所には數個の小川あり、又或地には上り易き阪路及快き谷ありて、何れも樹木の蔭多かりき。

彼等は赤坂に一宿し、一月二十五日御油(Coo)の大村を経て長き木橋を渡り、面白き位置に在る吉田(Josinda)に達せり。周囲の山は快き木蔭を以て被はれ、路には行樹栽ゑられ、其頂は相合し、進路を一の人工的東屋みなせり。旅行者は之によりて太陽の熱を防ぐのみならず、亦雨をも防ぐべし。

二川—白須賀—新居

十時頃一行は二川(Rigawa)に達せり。彼等は此處にてブンギエン(Bungien)卿の兵士に逢へり。通譯の語る所によれば、兵士は江戸に住する日本のエムペロルの委任によりて來りし者にして、此行大阪に屬する城及土地を占領せんことをなす。第一列に續くは卿其人にして輿に乘れり。彼の次は彈藥及家具なり。歩騎兵之を護衛す、彼等は能く教練せられたる良馬に乗り、弓矢、槍、大小二口の刀及匕首を携へ、兜を被り、蠟塗の革の長靴を穿てり。歩兵も騎兵も秩序正しく進行して其訓練の佳良なるを示せり。彼等は半時間大なる隊をなして傍を進みしにも拘らず、音を立つることなく、何等の聲をも出さざりき。

十一時頃使節等は山を下りて瀨海の白須賀(Shisuka)の村に入れり。右側は海に洗はれ、左は木を以て被はれたる高き山に接せり。白須賀を發して新居(Niue)に達せり。此地に於ては海は一リーグ半の入江をなす。然れども水淺くて貨物を運ぶに困難せり。舟屢膠沙せしが爲なり。

舞坂—濱名—見付

此入江の對岸海角の上に舞坂村(Misaka)あり。此地より兩側樹木を以て蔽はれたる道路に沿ひて、夕方濱名(Funama)に達せり。

日出前此村を離れてテルイ(Teru)河を渡り、見付(Mizuki)を訪へり。巧に作られたる市にして好き城壘を以て固められたり。此處より袋井(Fucare)に達して中食し、進みて掛川(Kakigawa)を経て日阪(Nisaka)に達せり。日阪に近くコナイ(Cona)山あり、長さ一リーグ半なり。此山を越ゆる道は兩側に樹木ありて愉快なりき。

高山上の僧院 日本の一大學 僧は外出せず 毎年一僧失はる

崇拜佛の爲にする自殺

此山嶺より峻しき坂路を見たり。此を行けば、左側に多くの塔及二重の屋根を以て飾られたる豪華の建物ありて、鬱蒼たる樹杪の上に聳えたり。

日本の通譯語りて曰く、是れ日本に於ける最も主要なる大學の一にして、最も見識ある學僧の住處なり。彼はここより決して外出せずして、絶えず青年の教育に従事す。毎年時を定めて各地より僧侶來り、宗教及哲學上の事項に關して論議す。此論争は頗る奇なるものなり。何となれば其群集即ち僧侶の一人突然失はれて(彼等の言ふ所を信ずれば)、其後決して彼の消息を知る者無きに至る(この屢々なり)。

日本の通譯は其失はれたる僧の如何になるかを問はれし時答へて曰く、惡魔之を取去るなり。然れども或人々は阿彌陀又は釋迦に犠牲となるなり云へり。蓋し阿彌陀及釋迦は自殺者を愛すこの考より自然此かる機會に於て進みて身を果す者もあるなるべし。

彼等が神を見んじ焦慮して狂信的執心に襲はれたる數日後、其居處の如何に拘らず、慈善を乞ひて彼方此方を往來し、乞得たるものは之を廣き袖に入れ、彼等が速に往きて奉仕せんことを神々に人々の要望する所を傳へんことを説き廻り、其後磨ぎすましたる鎌を取る。此は彼等の言に隨へば、永遠の福地に赴くべき未開の路を開かんが爲なり。次で彼等は豫て其爲に設けたる船に入り、頸、腕、肩、胴及脚に大なる石を結付け、船底の栓を抜きて水中に跳込み、或は船と共に沈む。其時友人等は従ひ行きて此恐るべき光景を見届けたる後、船中に火を投じて之を燒却し、後日濱れたる俗事に使用すること無からしむ。

自溺者に對する尊敬

神父ロドウィック・フロヌスは語る、彼は都に赴く途中ホレ(Fore)村に近きヘウ(Heu)島に來りし時、此處にて六人の男子と二人の女子とは斯くの如くにして水中に溺れしが、人々は彼等の大善業及敬虔なる捨身を記念する爲に岸に近く堂を建てたり。堂内の壁には割りたる竹を周圍に掛け、之に詩を挟めり。詩は阿彌陀の神を訪はんが爲に水に赴きし憐むべき失望者の宗教的大度を賞揚せるものなり。

此地は旅行家其他の人々が日々訪問する處にして、彼等は此等赴水の聖人に敬意を拂はんきて來るなり。尙師は吾人に告げて云く、一日兄弟ロドウィック・アルメイダ(Ameida)と共に此地を過ぎ、數人の老婦人が禮拜を終へて出來たる

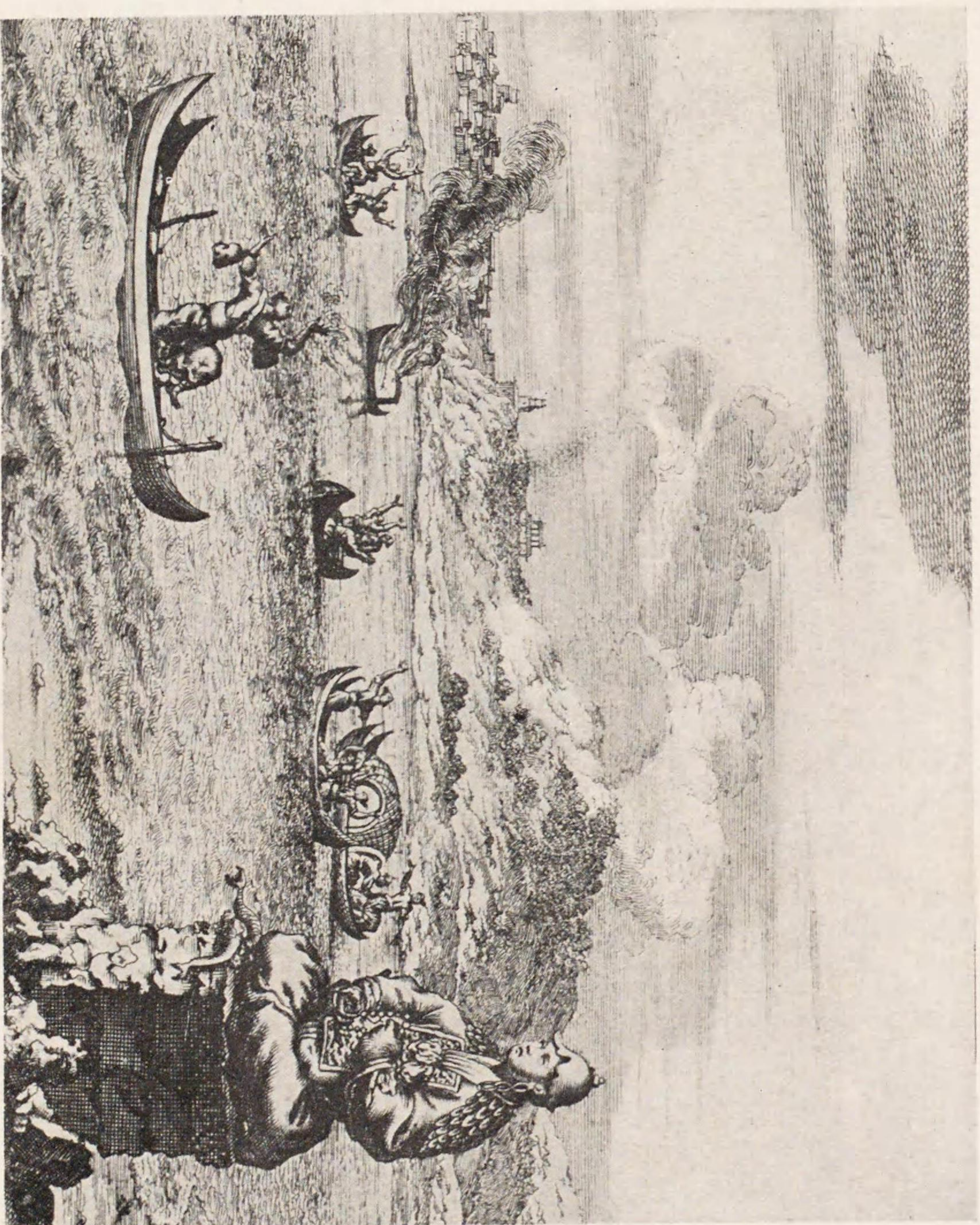
に逢へり。凡て手に念珠を持てり。彼等は祈禱を低く唱へ、念珠を以て之を數ふるもの如くなりしが、己等を見て甚しく罵り(彼等は衣服によりて外人なることを認め得べかりしかども)、單に見物の爲に此處に入りて、相當の禮拜を爲さざる瀆神的不敬漢なり云へり云々。

自溺する迄の行動

又ガスベル・ヴィレラは(Crisper Villela)一五六二年の日附を以て堺より發せる書簡中に、多くの自殺者を見たるところを語る次の如し。

日本人は狂信的執心に打たれて此苦患の谷より救はれんよし、且彼等が現世の行爲に對して永久の報償も永久の幸福も與ふる神の住する海底乃至地下の樂土に移住することを欲するや、先づ彼は壇上に立ちて現世の短くして不確なる快樂を非難せる説教をなし、現世の歡樂は最も善きものも雖も、常に悲哀を混ぜること、此短き不安全なる命は屢々突然に何等の警告もなく奪去らるること、之を與へし者によりて其心の儘に奪ひ去られんよりは、我から此世を辭するの優れることを述べ。此は彼等の常に主張する所にして、彼等に同情する者は誰彼もなく彼等を憐みて喜捨をなし、常に彼等の周圍に集りて聽聞することを絶たず。最後の日は凡てのこゝを終結する爲に從來の説教を反覆し、之を終ふれば甘美なる飲料を飲むこゝ一杯、仍りて心氣を爽快にしたる後、最上の晴衣を着け、廣き袖に石を入れ、首には重き鐵塊を垂れて船に入る。船中には鋭利なる鎌ありて、吾人の既に説きたるが如く、幸福に赴く道路の荆棘を伐り開くの用に供す。

予は(ヴィレラ尙曰く)七人の伴侶を有する者を見たり。彼等は悉く身を海に投ぜしが、結婚の時と同様なる喜を以てせるを見て感に堪へざりき。



迷信者の投身

山伏、悪魔と語る 不可思議の行爲

又日本人は巫術及魔術を好めり。此術に長ぜりを稱する主なるものを山伏 (Yamabusen) と云へり。「圓き谷の土」に
いふ意味にして、彼等は悪魔と親密なることを信ぜり。

此等の魔術家は熱心及敬虔の好評を買はんが爲に二日、時には三日三夜目を閉づることなく、食事も取らず。彼等
は此間に不可思議の行爲をなすが如し。即ち彼等の魔術を用ひて巧に死人を墓より取去る。而して如何にして之を爲
すや又何時之を運びたるかは何人も知らず。尙彼等は多數協同して死人を起たしむることありと云ふ。即ち彼等の前
に強直になりて横臥せる死人に對して呪文を唱ふるに、死人は蘇生して起上ることは是れなり。彼等は三月間の鍛錬、
斷食、不眠によりて自己の修養を完うすれば、彼等は最も親しき知友を招きて此目的の爲に作れる船に乗り、一同歡
喜して身を海中に投ず。

日本人の死を怖れざる所以

凡ての恐怖及死の苦痛を輕んずる風を勸むること、彼等の宗教の如きはなし。若し斯くの如き恐怖に畏縮する者あれ
ば、之を卑劣漢として共に語るに足らずとす。蓋し彼等の信ずる所にては死は幸福に達する確なる道なり。此説は古
くより日本に受入れられ居たるが、他の地にも多く、殊にゴール、英國、獨逸等に於て然りとす。死を怖れざる人々
の靈魂は公共の善の爲又は神の爲に自己を捧ぐるものにして、死すれば直に樂園に移さることを信ぜしなり。

*

*

*

*

*

*

*

僧の失踪

日本の通譯がコナイ山の城中に毎年佛僧の消失する事に關して語りしことは既に記ししが、同様のことは他の集合處

にもありて、或ものは其場より消失し、或ものは他處に奪去らる。如何にして又如何なる方法によるかは吾人之を知らず。

ヴィレラは前に擧げたる書簡中に云へり。此小説即ち或魔物が人體を運去るこいふことは、日本人の中には事實として信ぜらる。されども此くの如きは常に悪き徵候と看做さる。彼云く、彼と同時にサッキ(Sacki)市に一僧ありて、不徳の生活を送りて富み居りしが、年七十にして死の床に横はりし時、彼は死の事を聞くに堪へざりしが、一日白晝凡ての友人の座に滿てる中にて俄に奪去られ、後復び聞く所無かりきこ。

金谷—大井川

和蘭の使節は僧侶の宮殿を去りて、金谷(Canai)に向ひて輿馬をやれり。彼等は其夜此地に上り、翌朝路は凍り居りしが、旅行を續けて、程無く急流大井河(Oyogawa)に達し、容易に之を渡りたり。久しく雨なかりしが故なり。雨季には水高く流れ強く、之を渡るこ甚だ困難なりきぞ。

蘭使幕府の鷹匠に遭ふ 島田より府中 府中の荒廢

對岸に達するや、彼等はエムペロルの鷹匠三人が獵をなし居たるを見たり。使節の輿はエムペロルに對する敬意より地に下され、騎馬者は下乗し、一行は鷹匠の通過したるまで全く停止せり。それより島田(Simanda)、藤枝(Forisjeda)及岡部(Oambe)を經、峻しき坂路を上下して、ミリケ(Mirice 鞠子)に達せり。

更に進みて彼等は駿河(Sumaga)府中の意に來れり。大なる市なれども荒れたり。そは一六二九年に戴冠せしエムペロル當將軍様(Toxogunsama)の死後、住民は他の商業地に赴きて此地を捨てしが故なり。

エムペロルは其同胞に對して不満あり、彼をして腹を切らしめたり。此残酷なる處刑は次の如くに行はれぬ。



武人割腹の様態

割腹の方法

罪人は殿堂の前の廣場に胴以上を裸體にして東洋風に座し、彼の後には喪心せし時の用にミテ興奮劑を持てる一人及精神上の慰安を與へ葬儀の世話をなす六人の僧立ち、彼の前には此残酷なる役目を爲すべき者刀を持ちて座し、兩側には等しき距離に於て彼の親友及近親十二人立ち、兩側には多數の見物人ありき。

此くの如き酷刑は屢々何等の原因も無き多くの人に課せらる。罪人に多少の關係ある者同一の刑罰を受くべきものと判斷せられてなり。

カイロンの貴族處刑談

フランシス・カイロンは彼が江戸にありし際に起りたる一事件を語りて曰く、エムペロルの一領地を支配せる貴族あり、其借地人に課するにエムペロルの命令せしより以上の借地料を以てしたり。此方法によりて彼は自己を富ませしが、人民は其負擔に堪ふる能はず、團結して内閣に至りて領主を訴へしかば、内閣は之を調査して其罪あることを知るや、該貴族は家族と共に切腹して自ら死刑に就かしむることに定めたり。彼に一人の同胞ありて肥後の王に仕へたり。肥後は江戸を距るこゝ西方二百四十七リーグなり。又其處より遠きこゝ三十哩なる薩摩に一人の伯父あり。第二子は江戸より東に距るこゝ百十リーグに住してマッサマ(Massama)の王に事へ、第三子はインカノ(Inquano)のエムペロルの城に在り、末子は大阪の富裕なる商人の女と婚せり。兄弟二人エムペロルの近衛たり。凡て此等の人々は彼等の兄弟又は父の罪の爲に同一の日時に切腹すべきことなれり。

處刑者の爲すべきことは次の如し。第一、死の使者が悲報を最も遠き親戚に傳ふべき時日を計算し、之を最長時間にして、その以外には執行猶豫を許さず。最も近き者も最も遠き者も同日に正午を期して嚴命に従ひ、各自己の残酷な

る破壊者なる。

然れども大阪の商人は自殺をなさざりき。大なる恐怖に打たれし彼は其報知を聞くや直ちに死せしを以てなり。彼の唯一の子なる女子は罰せられざりしかども、自殺せんを欲し、自ら食を断ちて第十一日に死せり。然れども此等の人々に關係ある婦人が如何にして此數家族の破壊中に身を脱せしかは彼之を語らず。

ヴィレラの處刑談

カスペル・ヴィレラは一五五七年十月十三日附を以て平戸より發したる書簡中に、此刑罰の方法に關して云へり。王が此處刑を或人に課する時は、使を彼に遣はして死すべき日を通告す。罰せられたる人は決して逃亡せんを圖り、又は逃避することなし。彼は國王の命令に隨ひて自決すること許容せられたしを望み、其情願の許さるる時は、彼は無上の榮譽を被りたりとなす。指定の時に至れば、彼は最上の晴衣を着て腹を割く。然れども若し王が普通の處刑によりて死を命ずる時は、受刑者は防禦の態度を取りて、小兒、友人、僕婢と共に家を護り、之に對して王の官吏は有力なる隊を以て豫期せられたる時に來り、攻撃戦闘を初め、先づ矢を放つ。それより近づきて槍を以て接戦し、次で劍を以て迫り、遂に(王の兵は常に猛勢なるが故に)其家に入りて彼及全家族を殘殺す。其處に居らざるか又は之に與らざる親族等は凡て烙印を附せらる。

此嚴律は高きも低きも例外無く、貴族も農夫も市民も軍人も一樣に容赦無し。他の犯罪を偽證する者或は官吏の前に於て詐偽の露れたる者は刑を加へらる。エムペロルに對して叛逆の言をなしたりして有罪となりたる者のみは八丈島(Faisinchina)に追放せらる。

八丈島の記載

八丈島は周圍一リーグ許の小島にして、江戸より大洋の入口の方へ東十四リーグの處に在り。其懸崖をなせる四周は險阻にして、海は深し。此處に碇泊せんせば錨綱を要す。天候靜にして波起らざる時は、小舟に乗りて險を冒す。而して船の岩に近づく時、彼等の中最も大膽にして達者なる者繩を以て胴を縛し、船より跳りて懸崖を攀ち、起重機或は其目的の爲に作られたる同種の機關の在る頂上に匍上り、此機關によりて船を水上數尋の上まで釣上ぐ。此くて船は中途に懸りて恰も安全なる碇泊をなせが如く、波又は天候の爲に打たること無し。若し斯くせざれば舟は忽ち激浪荒天の爲に近づき難き海岸に於て破碎せらるべし。此装置の發明無かりし以前には舟の難破せるもの少からざりしなり。

此小地積は不毛にして耕作に適せず、唯多少の桑を生ずるのみ。

貴族の流謫

此地に追放せられたる貴族は歸還又は減刑の望も無く、憐むべき状態の生活をなす。此島の四方には堅固なる塔ありて兵士は此處に警戒をなす。風及天候の佳き時は、此等の兵士は一箇月毎に交替して、長く留まらず。是れ勤務久しき間に王の囚人を見親しみ、或は賄賂其他に誘はれ、少くも其脱走を默過するの虞あればなり。此等の囚人は王なりて美食を得ず、唯少量の米、木の根、野生の草、其他若干の不味なる食物のみを與へられ、彼等自ら之を調理す。彼等の困難を一層大ならしむるものは悪しき飲料不健康なる水となり。彼等の家は唯憐むべき陋屋にして、風雨を凌ぐにも足らぬ程なり。又彼等は苦しき勞作を課せられ、年々多くの絹を紡織せざるべからず。其絹も彼等の養蠶によりて作れるものなり。

駿府は元エムペロルの宮廷所在地

蘭國使節は長く駿河に止らざりき。此地は元日本のエムペロール、後には其同胞が宮廷を有せし處なるが、其同胞の切腹せし後には宮廷を移轉せり。是れ此市の荒廢に歸せし原因にして、住民の多くは他の地に走れり。市の一側に大なる城あり、其廢墟は以前の壯大偉麗を偲ばしむ。

江尻なる前蘭使の會宿旅亭

駿河を去りて江尻(Seai)村に進み、其地に一宿せり。

此地にて彼等は一老人を見たり。其語る所によれば、彼等の到着より三十年前に使節ヤコブ・スベックス其家に止宿せしことありきなり。スベックスはエムペロール御所様に多くの物品を献上し、日本との貿易を和蘭人に許すに就きて彼と條約を結びし後、旅行する途次此村を過ぎたるなり。

都より駿府及江戸に至るスベックスの旅行

使節スベックスは一六一一年八月十日都に入り、エムペロールの馬十頭及地方官板倉フロイモン殿(Itakara Froymondo)よりの贈品を受け、それより騎馬にてセリーグ來り、進みて草津に一泊し、翌日はスチハマ(Susihama 土山)にて晝食し、暮にはセキノソ(Sekinoso 關)に到着せり。翌日同地を發し、四日市(Okeiz)に進み、宮を洗ふ内海を渡り、日没に垂んごする頃(此日は炎熱甚しきに苦しみ、一行中之が爲に途上に死せしもの一人を出せり)彼等は鳴海に入りて彼を葬り、赤坂(Occosacca)を経て吉田に進み、藤枝(Fusigeda)及鞠子(Merico)に休憩し、夕方駿河に着せり。

駿府にて蘭使の到着を報告す

使節スベックス及ペーテル・セゲルソーンは到着後直にエムペロールの内閣に通知せり。内閣の首班はコセキドン(Cosequidome)及イコト・シーサブロドン(Ikoto Siosabrandonne)なりしが、彼等は成るべく速にエムペロールに謁見を許されたしを請へり。其回答は遙なる國より困難なる路を経て來りしを歓迎すといひ、又彼等の到着はエムペロールにも頗る嘉させ給ふべければ、翌朝までには謁見の儀取計ふべしきなり。コセキ殿は此を實行して、蘭人を城中に案内したれども、エムペロールは總督より一重大事件の報告を受けて之が調査中なるを以て謁見を許し難しき事にて、彼等はその閑暇なるを待たざるべからざりき。

西使のエムペロール面前に於ける行動

此く徒然なりし間に蘭使は西班牙使節の事業に關して多少領解する所ありき。該使節は彼等の來れるに先ち其國より派遣せられしものなり。初め彼は先づ自身に、後には書面を以て、エムペロールの内閣員の首班コセキ殿に具申せり。既にしてエムペロールに謁見を許さるるや恭しく彼の献上品を彼の足臺近く玉座の上に捧げたり。其品は黄金の織物十枚、黄金の皿及懷中時計なりき。エムペロールは之を受納せり。然れども、使節(エムペロールは彼の言に對して一語も對へず)は退出すべしと命ぜられたり。彼は華美なる行列を以て城中に參入し、使節自身は美服を着、頸には黄金の鎖を懸け居たり。彼のエムペロールに對する用務は、三年前媽港に於て日本人を死刑に處したる罪を謝し、長崎に於て西班牙船の燒かれしことにつきて訴へんが爲なりき。此燒棄の爲に十萬デユカット以上を失ひしが、其損失は全く其地に在りしエムペロールの官吏の過失なりといふに在り。之に對して閣員コセキ殿の答に曰く、西班牙の船長及役員は媽港に在るエムペロールの臣民の殘殺を承認せず、或は其賠償に關する回答を與へざりき。是れ彼等はなし得る時も正義公道を顧みざりしことを明證するものにして、彼等は其時に爲しし如く今後も亦爲し得る時には彼等の前に在る萬般の事件を暴力によりて處置せんとするものなり。而して船長の驕傲不遜なる回答は凡ての國民の公法に反し、

エムペロルの要求を輕侮するものなれば、少しも容赦するを得ず、エムペロルをして報復手段によりて甘心するの外無きに至らしめたり。故に正義の劍の達せざる處には、彼は火を以て検査をなし、彼等の船を焼きたるなりと答へたり。

西使の失錯

此使命を齎しし西人は多くの過失をなせり。第一、エムペロルを訪ふに先ちて江戸に在る若き君主を訪ひ、次に駿河に入りて四十人の銃卒を率ゐ、西班牙の國旗を翻し、銃を放ち、喇叭を吹き、各街の端に於て太鼓を打ちしことなり。エムペロルとの對話中にも不遜の言辭を以て四事を申出でたり。曰く、第一、カスチル人はエムペロルの何れの港灣に於ても彼等の習慣に従ひて自由を享有すべきこと。第二、帝國の凡ての海港に於て貿易すること。第三、エムペロルは彼の領内に於ける蘭人の商業を嚴禁すべきこと。此目的を果す爲には西班牙王は彼の有力なる艦隊を以て援助に當るべく、斯くして彼等を帝國領内より驅逐すべきこと。最後にカスチル人は貿易するの自由を有し、如何なる市又は市場にも出入自由にして、彼等の物品を賣り、又此國の物品を買ふを得ること。是れ前に言へる西班牙の大使が先づ口頭を以て次に書面を以て提議せし條項にして、彼の使命をエムペロルに傳ふる前に駿河に待つこと五日なりき。然れども彼が立去る前には、國務大臣コセキ殿に贈呈せし獻品は返却せられたり。

スペックス等謁見の日取 閣老への贈遺

使節スペックス及セゲルソンが數時間城中に待つ間に、コセキ殿はエムペロルが他の事件につきて多忙なる爲に謁見の叶はざることを傳へ、明日は許可せらるるやうに盡力すべしと云へり。是に於て當日は残る時間を出納長官オホト・ショーサブロン(Ohoto Sionsabrone) (前にイコト氏ある同人家)との對面に費したり。此人は細心にして親

しみ易く且愛想ある話し振の人にして尊敬せられ居たり。蘭使は緋色の織物、美なる緞子、各種の裂地、外に精巧なる壘、騎銃、角製彈藥入を彼に呈したるに、彼は之を受けて懇款親切を示し、何事にも彼の力の及ぶことは助力すべしと言出でたり。此は近頃聞く所によれば(彼は云へり)西班牙王と蘭合同國との間に十二年間の平和條約締結せられたるが、其以前即ち兩國交戦中には西班牙の船は日本に適當なる貨物を満載したるが、今は蘭人の之に代らんことは彼の希望する所なりと云へり。使節は尙國務大臣の首席コセキ殿をも訪ひて前記に劣らぬ獻品をなししが、彼は穩に之を辭し、且彼等が長途の倦怠多き旅行に此等の品を携へ來りしは容易ならぬ事ならん云へり。

大臣コセキ殿との問答

エムペロルに對する用向の如何を問はれたる彼等は答へて曰く、彼等の船が長く日本より離れ居たること、及エムペロルの書簡に對する回答も亦遅引せしことは、切にエムペロルの宥恕を請はんこととする所なり。コセキ殿は此答に動かされしと思しく、彼は自ら此趣をエムペロルに言上すべく、エムペロルも必ず満足せらるるならん云ひしかば、使節は少しも之を疑はずと答へたり。コセキ殿は又其他の用向の何なるかを問へり。使節は之に對してエムペロルより二通の特許狀を賜はりたき由を述べしが、此は蘭船が今後エムペロルの保護の下に日本の港灣に於て自由に貿易を行ふの免許を與へられたること、又彼等は平戸に於て監督者無しに貨物を揚陸し、又常にエムペロルの用品となるべき珍しき品を残して商品を商人に示さんことを請ふの意なり。コセキ殿は凡て之に對して贊意を表し、エムペロルが彼等の願意を聽許せんことを疑はずと云へり。最後に彼は合同蘭國の國情に關して語る所ありて使節を分れしが、其際午後には彼等をエムペロルに謁見せしむべしと約束せり。それより彼等を街上に案内し、爾時ウィリアム・アダムスといふ者、和蘭東印度會社の代表者として駿河に住し居たるが茲に在りしを呼び、謝意を表して贈品を使節に返還せ

しめたり。曰く、外人の贈遺を受くるは彼の習慣にあらず。彼は亦西班牙及葡萄牙の使節の贈品及外國の商人より提出せられたる物を悉く辭したり。尙曰く、使節スペックス及セゲルソーンは彼等の好意を疑ふを要せず。贈品を受收するも返却するも何等の差違なし。之を受けざるは唯彼の習慣なり。ウィリアム・アダムスは之に答へて、此は獻品といふものにはあらず、和蘭古來の習慣にして、彼が彼等に示したる大なる恩典に報うるまでのものなれば、恭しく其受納を請へり。是に於て彼は再び彼等を家に招きて之を請け、此は從來曾て爲さざりし事にして且全く彼の本性に反對の行爲なり云へり。

スペックス等獻品を携へてエムペロルに謁す

午後コセキ殿の約束の如く彼等はエムペロルに謁見を許されたり。彼等は卓上に下記の獻品を置き。緋色の織物數枚、黒フランネル、緋色のカーファイ (Kette)、吳羅、金を加工したる繻子、美なる緞子、ニューレンブルグ絨緞、精巧なる燭、鉛數ポンド、長八呎の佛國製フュージ (Fuesse)、鋼二百片、馬上銃二挺、之に伴ふ角製の彈藥入、象牙五本是れなり。

エムペロル、スペックス等と語る

彼等がエムペロルの前に禮をなしたる後、エムペロルは彼等を歓迎するこゝを陳べ、彼等の國人の兵士にしてモラッコ島に在るもの幾何あるか。蘭人はボルネオと通商するか。最良の樟腦が其處に得らるるか。如何にして之を探るか。最良のオーラ (Ara) 及カランバ (Calamba) は何處に發見せらるるか。香木は和蘭にも生ずるか。如何なる種類最も高價なるかを問ひたり。

此等の下問にエムペロルは通譯を経てそれぞれの答を得たり。斯くて使節はコセキ殿ミシヨーサブロ殿に導かれて退出せしが、兩人は使節が皇帝より示されたる異常の名譽と友誼につきて賀辭を述べ、斯くの如きこゝは三萬デユカットの獻上品をなせる日本諸王中の最も大なるものにも未だ嘗て示されたるこゝ無く、西葡兩國の使節は皇帝の一語を發するを聞かすして遣歸せられたり云へり。ウィリアム・アダムスは召還されしが、彼はエムペロルが獻品を見るに忙しきを見たり。エムペロルは蘭人が技術及武器に優れたるを稱賛せり。使節は談判全部を日本語に反譯して、簡條書を保護者コセキ殿に委託せり。是れ彼等が江戸より歸るや否や速に退去し得んが爲、又一には江戸に往きてエムペロルの長子たる若き君主を(曩に西班牙の使節の爲したる如く)訪問すべきこゝを勸告せられたればなり。

スペックス江戸に向ひて出發す

彼等は一六一一年八月十八日を以て出發するこゝに、コセキ殿はエムペロルより發せる旅行免狀、馬十頭、及旅行中の凡ての必要品類を供給すべきこゝを凡ての臣民に令せる官文書を彼等に贈り、且當時江戸の君主に事へ居れる彼の子息に宛てたる書翰をも托したり。然るに其旅行の初日には大雷雨ありしかば、少し早く前進を切上げて江尻に宿泊するこゝになれり。是れ即ち三十八年の後一六四九年十二月二十七日フリシウス及ブロークホルストが宿泊せしこゝ同處同家なり。翌日出發、風強くして寒かりしが、興津、小き森、由井を経て多くの河を渡りたり。由井よりは道は山に近き入江の岸に沿ひしが、或場處にては一方は懸崖、一方は絶壁にして廣き二呎を越えざる嶮しき岩路の上を行くに、海は常に激浪鞆を打寄せ居れり。之を越えたる後も路は悪しく、鹽の穴多く、一層危険なるものなり。是れ此國の習慣に従ひて掘りたるものにして、此地方に最も多かりき。

憐むべき癩病患者の記載

或地に於ては市邑の背面なる路の兩側に散布せる小屋ありて、葦を編みて作り、木板を打着けて屋根せり。其中には癩病患者を收容せるが、憐れむべき状態にありて、其家具云へば一個の袋又は籠にして、往々之に加ふるに一の木塊を以てす。即ち小枕にして是れ彼等に取りての寝具なり。戸の前には鈴の代りに古き鉢を吊り、旅行者の過ぐる時は之を鳴らして喜捨を乞ふ。其喜捨の少き日は非常の饑餓に迫る。市邑其他人の多く至る所には近づくことを許されざればなり。之を犯せば殺さる。蓋し癩の病たる治し難くして而も傳染し易し。斯の如くにして彼等は社會より捨てられて、憐むべく賤しむべき生活を送れり。

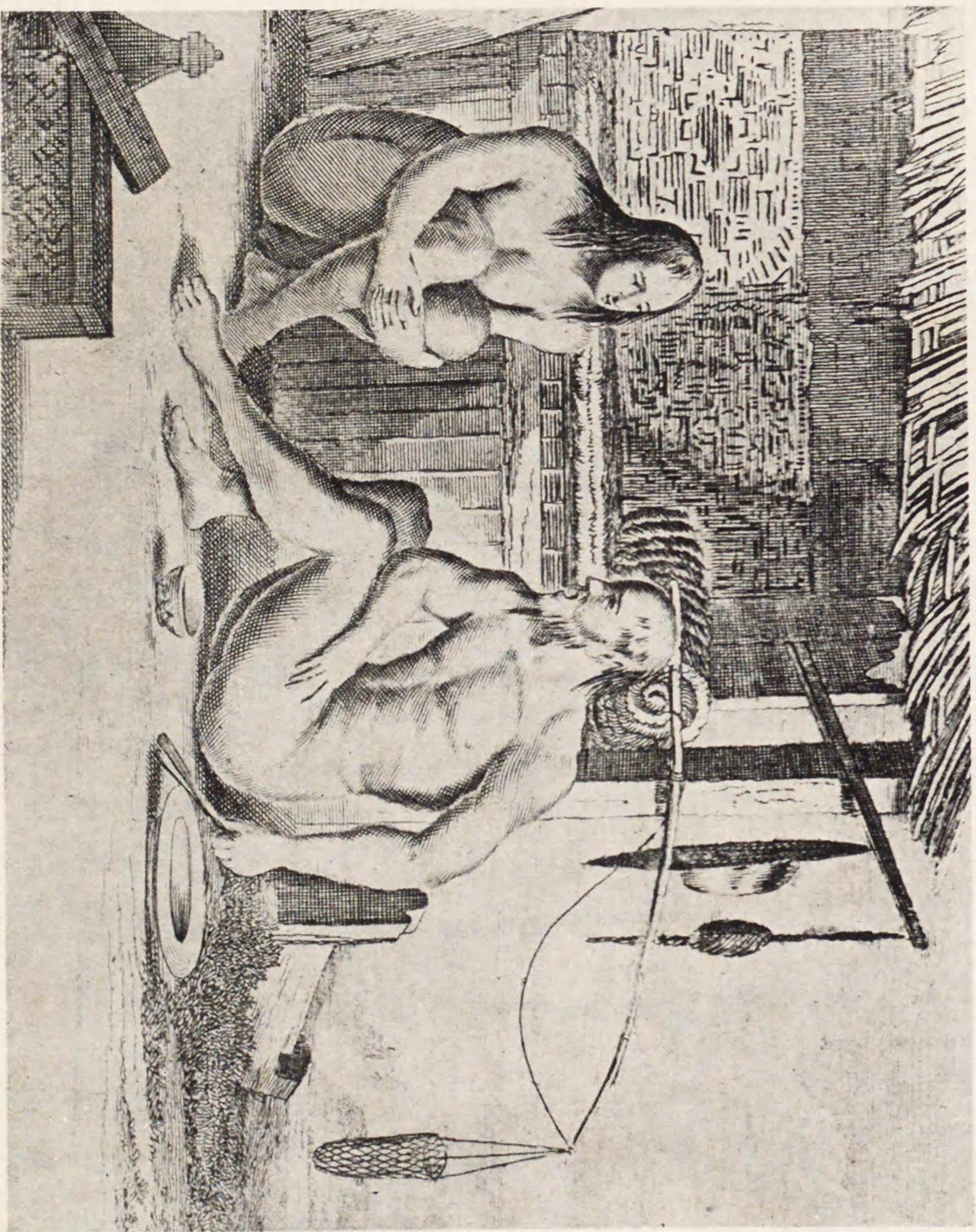
北部の諸國よりも東部諸國には此病多く行はれ居るが如し。

* * * * *

富士山 山伏の修行

由井より蒲原を経て富士川の急流に達せり。

此處に彼等は富士山を見たり。此處にて馬鞍を卸し、貨物を小舟に移ししが、此河を越ゆるには多くの時間を費し、吉原(Jusiwara)に達せし時は既に正午なりき。此地にて中食をなせる時、彼等は住民に就きて聞けるやうは、彼等が途中にて見たる富士山は頂高くして、三十リーグの距離に於て之を見るこゝを得べし。其頂は常に雪を以て被はる。山伏と稱する山僧は一年一回其山に登るこゝなるが、頂上に達するに八時間を要す。往々三十人程にて一隊をなし、六十日間滞在し、斷食其他の方法を以て修業をなす。而して彼等が斯く忌はしき敬神に身を苦しむる間に、彼等の言ふ所によれば、彼等の神にして又主人なる恐るべき惡魔現る。其後四時間を経て喜びて下山す。彼等は斯くして驚くべき功績を挙げ得たりと想像するなり。後直に山伏の階級に進めらる。此階級を表する者は頸の廻りに懸けたる白き結



癩病者

節及頭の頂のみを蔽へる小き黒帽にして、頭髮は下に縮れ込めり。彼等は此くの如き人目に立つ姿して帝國を漂浪し、手に銅盤を持ち、之を鳴して彼等の到着を知らしむ。各地に於て勤行をなせるが、其は盜品を發見する爲に魔法を修するこゝなり。其方法次の如し。

山伏贓品を發見する方法

彼等は一少年をして、露地上に足を十字に組み坐せしむ。次に彼等の主人たる黒き神即ち惡魔を喚出すに狂へるが如き低語、雷の如き大音の呪語、及恐るべき祈禱を以て、惡魔が此小兒に憑りて託宣の如くに語る答を此少年より得んこゝを乞ふ。暫くありて少年は口角泡を吹き、眼を睜り、頸を身體を厭はしき態度に振るこゝ瘡癩の發作の如し。此かる徴候によりて少年に降神せるこゝを知るや、失はれたる貨物の何處に在るか、失はれしか、盜まれしか、何方へ行きしか、何處に見出さるべきかを問ふ。少年は即座に立ちて答へ、其如何になり行きしか、如何にすれば見出さるべきかに關して語る。

山伏病人を見舞ふ

此等の山伏の外に尙他の山僧ありて、人家の少き市邑に来る。其勤は人々の招に應じて病人を見舞ふこゝにして、晝夜其病床を離れず、何人にも解し難き不思議なる低聲の呪文を唱ふ。抑宗教に關する凡ての語は特別の言語を有し、又文書として他の文書よりも一層難解の文字を用ふるこゝなり。

* * * * *

或山伏につきての怪事

ヘンドリック・ハゲナール (Hendrick Hagenauer) が云ふ蘭人の談に、其日本に滞在中、一病人ありて山伏を迎へしに、彼

は習慣に従ひ獨り低語し又讀經せしが、斯く熱心に祈禱する間に彼及列座の人々は一人も語らず唇をも動かさざるに、何處よりこも知らず次の如く云ふを聞けり。「何故に汝は我を苦しむるか。我は病人に此病氣を持來れる者に非ず。唯汝の敵より此病氣を持ちて送られたる使者たるのみ。先づ彼を緩和し満足せしめよ。然る後は彼を苦しむるこゝ無かるべし」。

山伏が宗教上の事柄につきて特殊の言語を用ひ、普通の人をして了解せざらしむるは、古代のケルチック民族より來れるものなり。

* * * * *

ハルボレ坊主の記載

森に屬する日本人即ち森林僧も亦大なる隊をなして全國を漂浪す。此をハルボレボンジ(Harbole-Bonzi)と稱す。彼等は和蘭使節の後を追ひて喜捨を乞へり。彼等は概して森林内及地下の暗き隠場に住す。故に生長し過ぎたる頭髮は肩に垂れ、鬚はもつれ合ひて繽紛たれば、初て見る人は一驚を吃すべし。帽子は葦を編みて作れるものにして、頂には黒馬の尾の總を附す。胴には綿を入れたる帯を捲き、上衣も綿衣にて袖は短し。下衣即ち胴衣は鹿皮なり。十條の糸を以て袋を帯に懸く。左手には大なる杖を持つ。我國の枸杞の如き實を生ずる木セタン(Satan)を切りて作れるものなり。靴は革紐を以て踵の廻りに之を結び、靴底には四本の釘を打込み。其釘の頭は廣くして多數者一時に歩行する時は騎馬隊の如き音をなす。年三十に至れば魔術を學ぶ。

尙使節はゲンゲ(Gengges)と稱せらるる手品使の魔術家即ち賣卜者に逢へり。彼等は盜賊及贓品を發見す云ふ。其住家は山上の小舎なり。彼等は顔面のみにては甲乙を識別すること難し。日光、寒氣、霜雪、風雨に暴露し、甚だしく日に焦けたればなり。常に履物を用ふるこゝ無く跣足なり。結婚は自身の派及ゲンゲの家族の一人を娶る場合には之を禁止せず。

魔術師に關する神父フロスの談

此等の魔術家に關して神父ロドヴィック・フロスが一五六五年二月二十六日附の書中に書きたるこゝを此處に引用す。但し之を信するこゝ否は讀者の選ぶに任す。曰くゲンゲは頭上に一角を有す。彼等の主人たる惡魔は嶮岨なる山に登るこゝを命じて一定の時刻に之を豫期す。彼等群をなして其地に至れば、惡魔は約の如く正午又は夕方に見る。惡魔はゲンゲの群中を彼方此方幾度も通過する程に、ゲンゲは直に此誘惑者に隨ひて火の中にも硫黄の中にも行かんこの熱狂せる願望を起す。やがて魔の消ゆるや、彼等は其後を追ひ、險阻なる懸崖より眞逆様に墜ちて自己を滅す。

一老人あり、魅入られて惡魔の迹を追はんこ熱狂したるが、子息は百方之を中止せしめんこ勸告願る努めたり。然れども父は之を聽かず。其志す方に行きたれば、子息も彼共に行きたり、かくて兩人も或山の頂に上りしに、靈鬼は貴人の如く美服して現れたるが、父は之に對して恭敬跪拜せり。然るに子息は弓を引き靈鬼を射たるに、突然消滅して負傷したる狐ミなれり。而も走り去りたれば、草を汚せる血の痕をつけて行きしに、懸崖の端に至りて消えたり。其處より俯瞰せしに死人の骨多數なりき。

* * * * *

蘭使の前途 罹災後の三島

蘭使フリシウス及びブロークホルストは良き食事を取り、山伏ミ稱せらるる日本の僧の話を聞きて興を催し、其地を

發して砂路に沿ひ、ハリ(Harri)原を通過せり。普通の道路は埃多きを以て海に洗はれたる牧場に入り、之を越えて沼津に云へる大なる村に達し、尙進みて箱根の山麓に在る三島に着きたり。此處に達するまで路の兩側に樹木ありて頗る快し。此市は八箇月以前火災の難に逢ひ、其後再建せられたるものにして、使節は一衣此地に止れり。

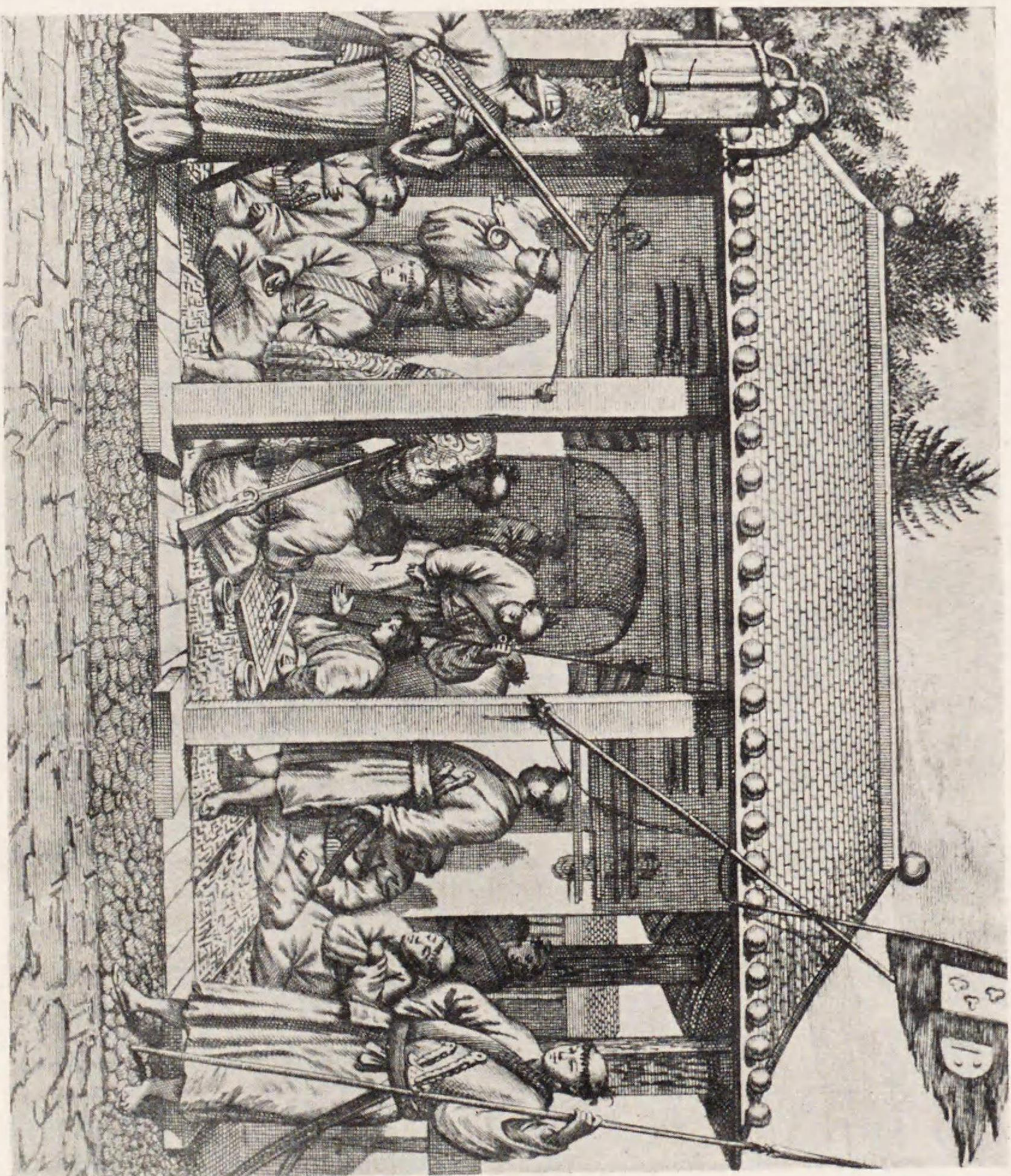
蘭使馬を徴集す 箱根村關守の記載

翌朝人々は數頭の馬をかり集め、蘭人及其一行をして箱根山を越えしめんす。是まで乗り來れる馬は疲勞して石多き阪路を越ゆるに適せざるを以てなり。準備も成りたれば七時頃山に登れり。數村を経て多少の困難危険を履み、午刻箱根に着せり。此地舟楫に堪ふる河に近く、而も山上に在りて山又山に圍まる。河は魚無く、深さは七八十尋、或場所にては九十乃至百尋に及ぶ。

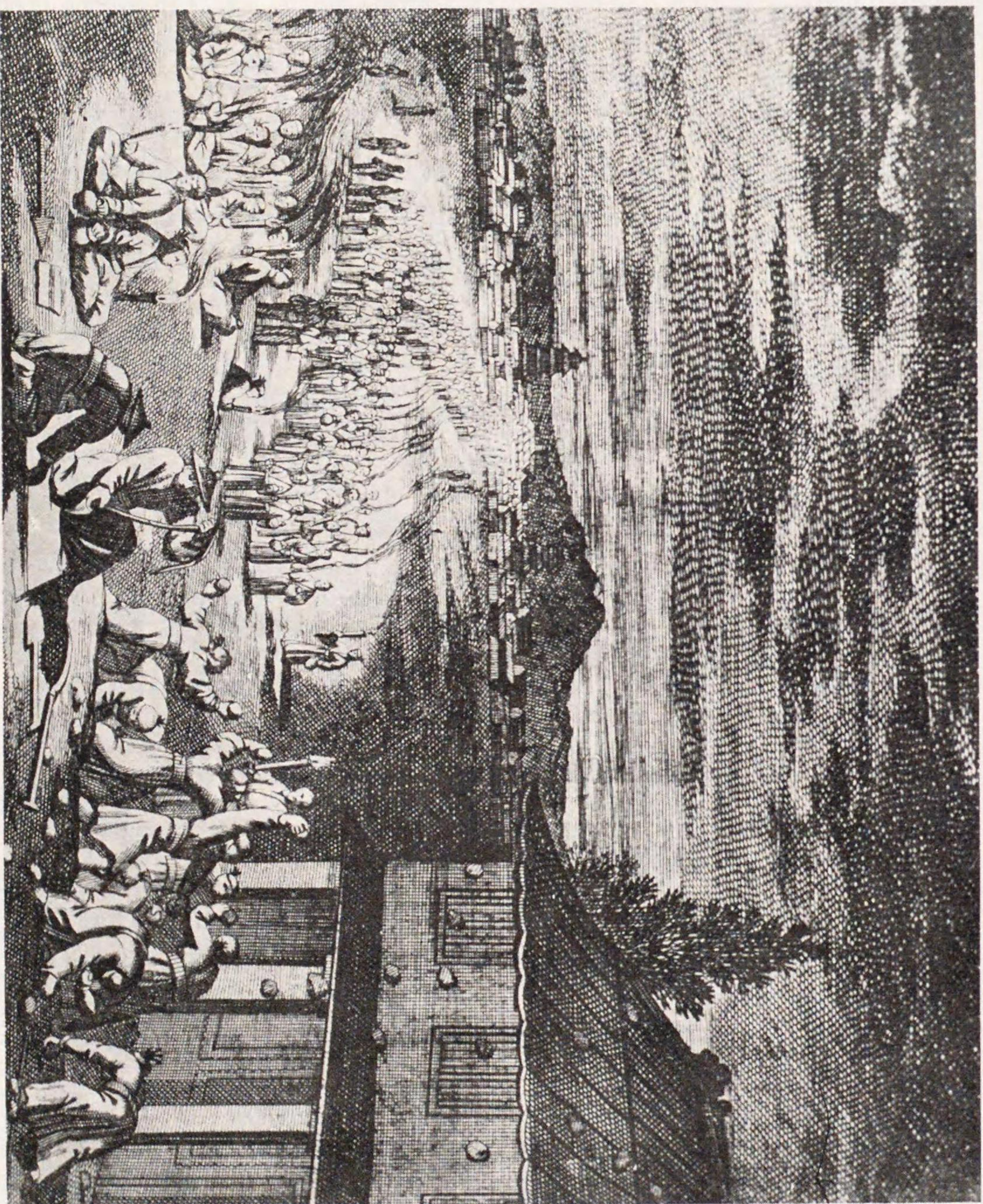
中食の後村端に在る關門を過ぐ。此門は壘寨を以て固む。此處にて凡ての旅行者は輿に乗る者も馬に騎る者も日本の貴族以外は皆停めらる。門の兩側に警衛所ありて四室を有す。其室は方形にして開放せり。壁には武器を掛く、銃、劍なり。兵士は足を交叉して地に坐せり。彼等は常に勝負事をなして遊ぶ。我がドラフトに似たるものにして時間ミ研究ミを要するものなり。彼等は前記の警衛所内に於て此遊戯をなして多くの時を費す。或は喫煙し、槍を遣ひ、劍を撃ち、又は射的をなす。警衛所の一端には大なる燈籠を懸く。硝子又は角の代りに美しく畫きたる布を用ふ。他端にはエムペロルの紋章及城主の紋章を畫ける旗あり。兩側に番兵立つ。一人は銃、一人は鎗を持てり。

死者の爲に求むる奇券

箱根村の在る河岸に沿ひて日本僧の殿堂三箇あり。此處には人々各地より群參し、少額の金三ヘンス許りを拂ひて通券を買ひ、之を河の近くにある石の上に挟む。彼等の想像する所にては、死したる友人の靈魂此通券により此河の水を



箱根の關守



葬送の列及喪家に投石の光景

飲む爲に自由に出入するを得こ。

膳部等を携へて死者の靈を弔ふ所以

彼等は八月中の二日を死者の靈の追憶に費す。其行事次の如し。暮方彼等は巧に描かれたる多數の松明を點火し、之を携へて(或ものは熱心より或ものは見物人として)町村を行く。夜に入りて市を出づ。市外にて死者の靈に出逢ふを確信すればなり。爰にて人々は何物を見ずとも、皆高聲に叫びて曰く、好來。汝は長き間何處に在りしぞ、何處に在りしぞ。坐して休息せよ。斯くの如き旅行には必ず疲勞せるならんこ。斯く言ひて米、果物、其他の食料品を以て輕き食事を調ふ。下流民は湯を持來る。恰も小宴に侍するものの如く一時間ばかり其處に居りし後、饗膳の粗末なりしこを謝し、我等は先づ行きて汝の宿泊準備をなし、汝の到來に快き設をなすべしと言ひて、死者の靈を家に招待す。それより二日を過ぐれば松明を携へて野外に出づ。死者の靈途上に躡轉せざるやうにミ路を照すの用なり。斯くして野外に嚮導し終れば、凡て家に歸る。其時各自の家殊に屋背の頂に向ひて石を投ず。靈魂の家に止り隠れたるを逐はんが爲なり。若し二日を過ぎてても止る時は凶徴とす。彼等は靈魂につきては頗る注意し、若し後に残りて獨り行かば、容易に樂園に至るの路に迷ひ、暴風の爲に滅されんこを憂ふと云ふ。

極樂に至る道程

死者を饗應する無意味の行事の外に、彼等は極樂までの距離を精確に百十萬リードとシ、氣體たる靈魂は此長途を三年を以て終ふとす。故に彼等は二日を選びて彼等に食事を齎し、家にて饗應し、斯くして休息を得て能く旅行を果さしめんとす。同時に亦彼等は墓所を掃除す。其時は佛僧も之に助力し、其努力に對して十分の償を受く。如何に貧困なる者も死せる友人親戚の墓を掃除する僧に支拂ふ料の金を儲へんこ努めざるは無し。

蘭使嶮路に遭ふ 小田原に入る 小田原の地震

使節は箱根を去りて間もなく嶮阻嶮嶮なる一山に逢着せり。辛うじて頂に達したるが、下山には更に大なる危険を冒したり。路は二呎に過ぎずして岩石多く、一方に嶮しき山聳え、一方に懸崖在り。腦の弱き人は眩暈を感じるの虞無くして之を俯瞰すを得ず。現に一行中の一人も下方を見たるが爲に突然眩暈を起して鞍上に倒れ、馬より落ちしかども、手綱を確き握り居りしを以て馬に引揚げられ、よりて僅に惨死を免れしが、間もなく快氣して平常に復したり。一行は夕方小田原に着せり。此市は莊麗なる町にして、一方には豪華なる宮殿あり、處々に尖塔ある石壁を以て圍まれたるが、其塔は遠くより望むべし。此地に住める日本人の語る所によれば、數年前該地方に大震災ありて、人民は家屋、塔、寺院を失ひし外に、堅固なる城をも喪ひたり。土地は恐るべき裂目を生じ、今の新城の所在に建ち居りし舊城砦及其所在の丘陵も陥没したりと。

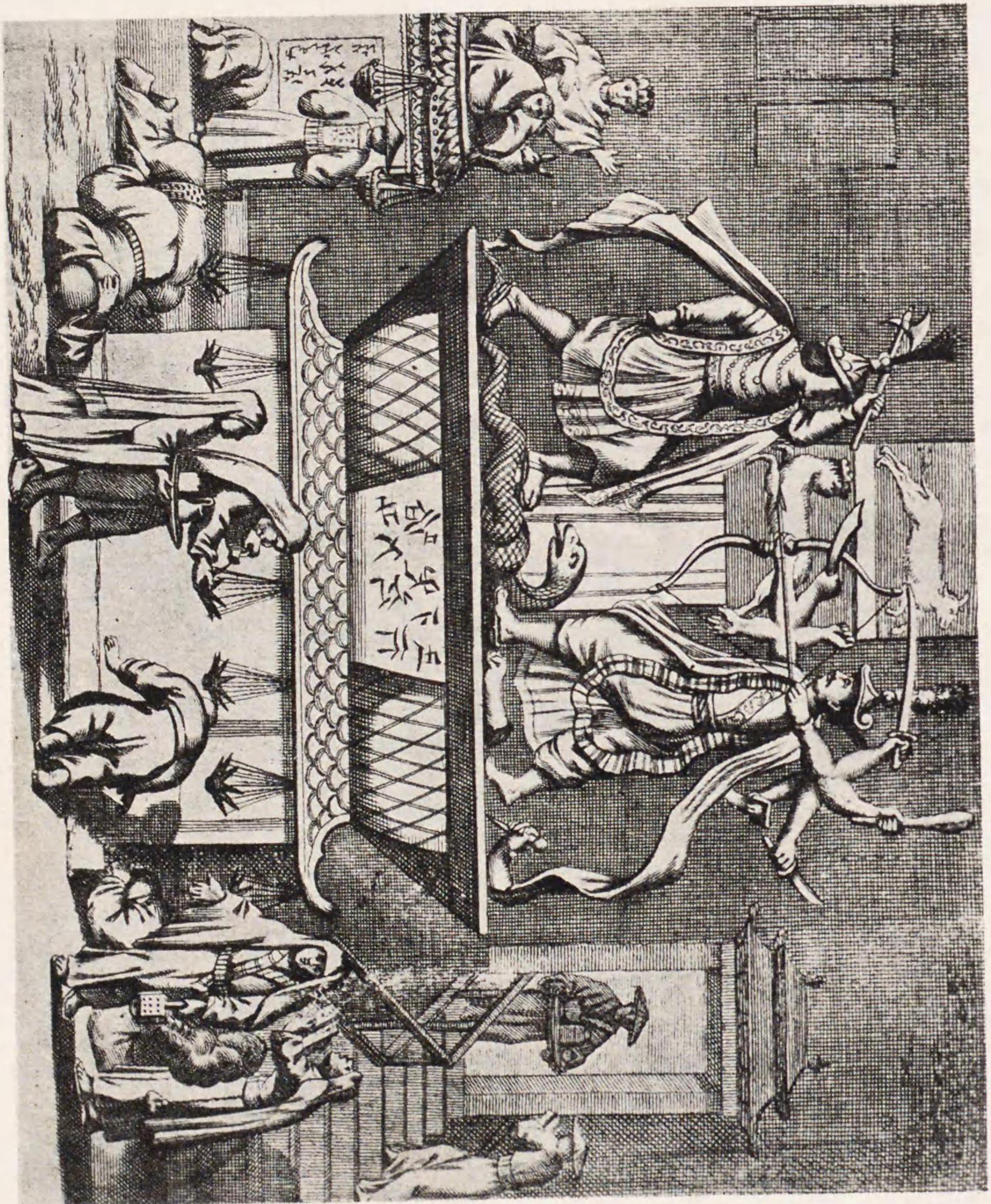
箱根の麓には元美麗の一市ありしが、一朝震災の爲に大にして深き湖水こなれり。一行は其側を通過したり。日本人は地震を以て海の猛獸尾を以て海岸を打ち、之が爲に近傍の地動くと思へり。

* * * * *

前進の路

蘭使は小田原に一宿して、舊城の沈没後新城の建ちし地を見、次で旅行を續けたり。時に十月三十日なり。多くの河を渡り、多くの村を經、ヘド(Hedo)、大磯(Osa)を過ぎ、馬入河(Banuew)、相模川(Sanamicauwa)の諸川を渡り、平塚(Fraski)、馬入(Banio)、田村(Tama)、藤澤(Hovissauwa)等の美しき村々を通過したり。

トランガの殿堂



トランガの武神像

此路上には注意に値するものを見ざりしが、ただ一の大なる殿堂ありき。彼等の神の一なるトランガ (Toranga) に捧げられたるものなり。屋背の四隅には四頭の大牛實物大に彫刻せられ、巧に鍍金を施され居れり。屋背は四方に壁よりも突出するこゝ六呎ばかり。殿堂の形は方形なり。各隅に四體の像あり、彼等の古代英雄を描けるものなり。此等の英雄の行爲は貧民が街道を歌ひありくものなり。其上には編みたる葦の窓あり。上の部分は屋背に、下は畫像の處に定着せらる。白堊の壁殿堂の間にあり、石壁を以て圍まる。石壁は胸壁の如く、白堊を塗れり。内部には前面に近く一佛僧の家を連結す。其圓頂塔は外觀上殿堂の尖塔の如し。

トランガの偶像

内部にはトランガの偶像あり。是れ以前は朝鮮 (Corea) の大獵夫にして、概ね平壤 (Pianan) に住し居りし者なり。數世紀前支那の王ヒアオウス (Hiaovus) 朝鮮島の半を占領せしが、此朝鮮は未だ韃靼人の殘虐を味はず、又サンダラチャ (Sandaracha) の掠奪を聞きたるこゝ非ざりしなり。然らざれば日本人の戰神たるトランガは長く惱める苦痛より朝鮮を救ひ出ししならん。トランガは朝鮮に於て爲すべき事無きを以て日本に渡りしが、此時叛亂者起りたりと聞くや、彼は直に武器を執りて當時遼東 (Leaoung) を稱せられたる朝鮮より援軍を送らんせり。

各地方は彼に兵士を供給せり。殊に平壤を都會とせしるキルクス省より強健なる兵士を出して之を日本に送り、其他ホアンチアイ (Hanchai) 等七地方よりも亦彼の爲に大兵を集めたり。彼は之をヤナム (Yanam) に集中して戰場に送り、勝利を得て、叛亂者及之に與せし七王を殺したり。此事蹟を示す爲に偶像トランガは九腕ある人形を畫し、

此九腕は各武器を執る。劍、棒、七首、刀、戰斧、弓矢、是なり、右足は火を吐ける銅龍の胴を、左足は其尾を踏めり。此戰へる二像の間の稍後方にトランガの紋章を刻せる壁上に白き牡牛見ゆ。數個の日本文字ありて、下には白鹿

あり。其頭は冠を戴ける人頭なり。白牛と白鹿とは兩つながら朝鮮人(Corae)の崇敬するものたり。凡て此等の像は巧に彫刻せる立派なる香案の上に据ゑられ、下には數個の方形の座席あり。此トランガは日本最初のエムペロルの一人とせらる。彼は數個の王國を武力もて征服し、時の進むに従ひて日本人之を神祇の中に登録したるものなり。

* * * * *

蘭使途に貴婦人に逢ふ

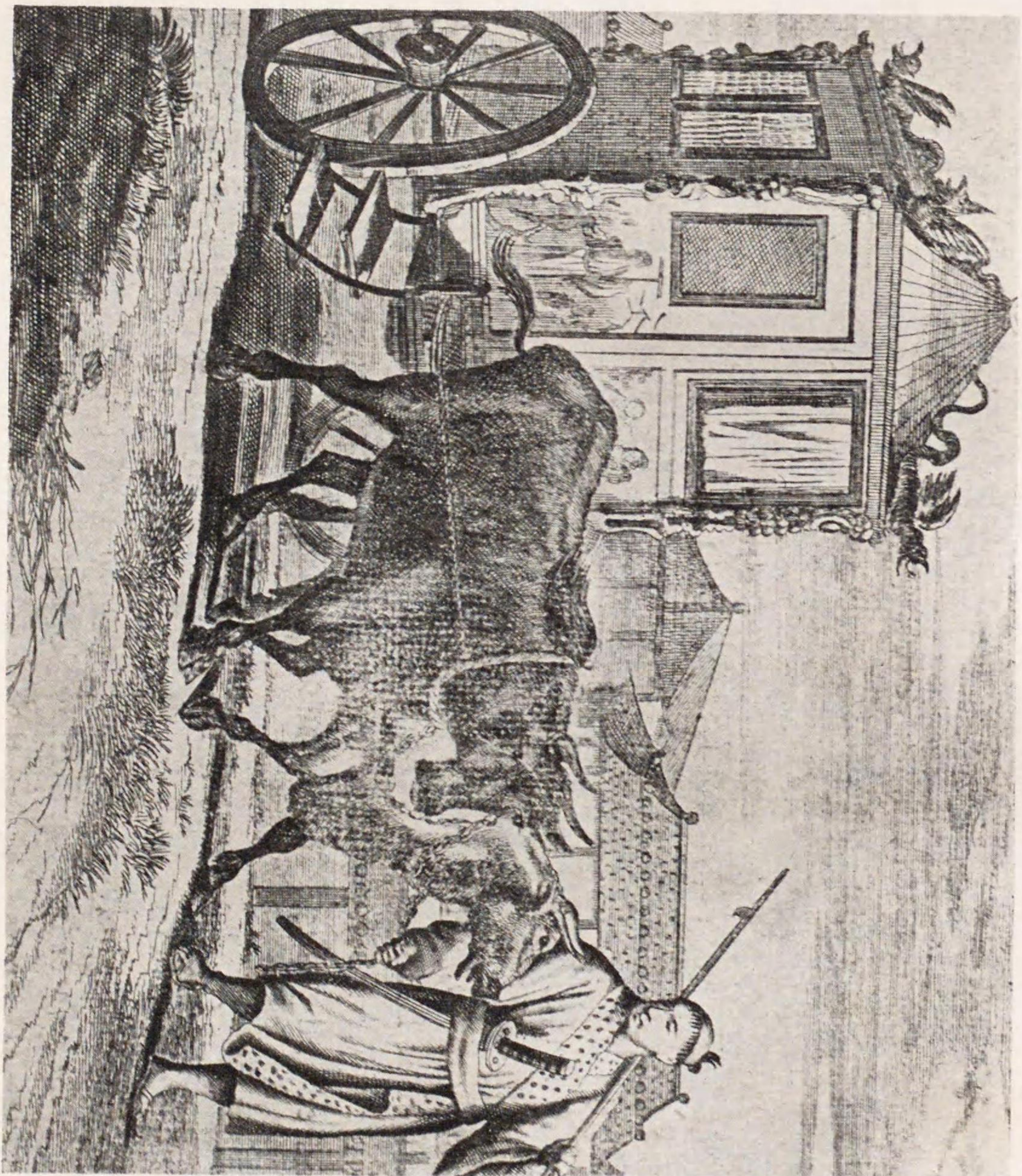
使節はトランガの殿堂を去り、旅行を繼續して藤澤より戸塚(Tokusa)及び程谷(Indase)を経て、神奈川(Camagawa)に達して一泊せり。翌朝は頗る寒かりしが、海岸に沿ひて騎馬にて進みたり。午刻エムペロルの姪にして都に旅行する貴婦人に逢へり。都にてはダイロの近親と結婚せんとするなり。其扈從者の衣服は華美にして、數人は華麗なる馬に騎れり。鞍は黄金の刺繡を施し、手綱は眞珠、金剛石を以て飾れり。他の侍臣は美しき職服を着て徒歩せり。其護衛兵は弓箭を帶び、或ものは槍又は銃を携へたり。

日本の牛車の記載

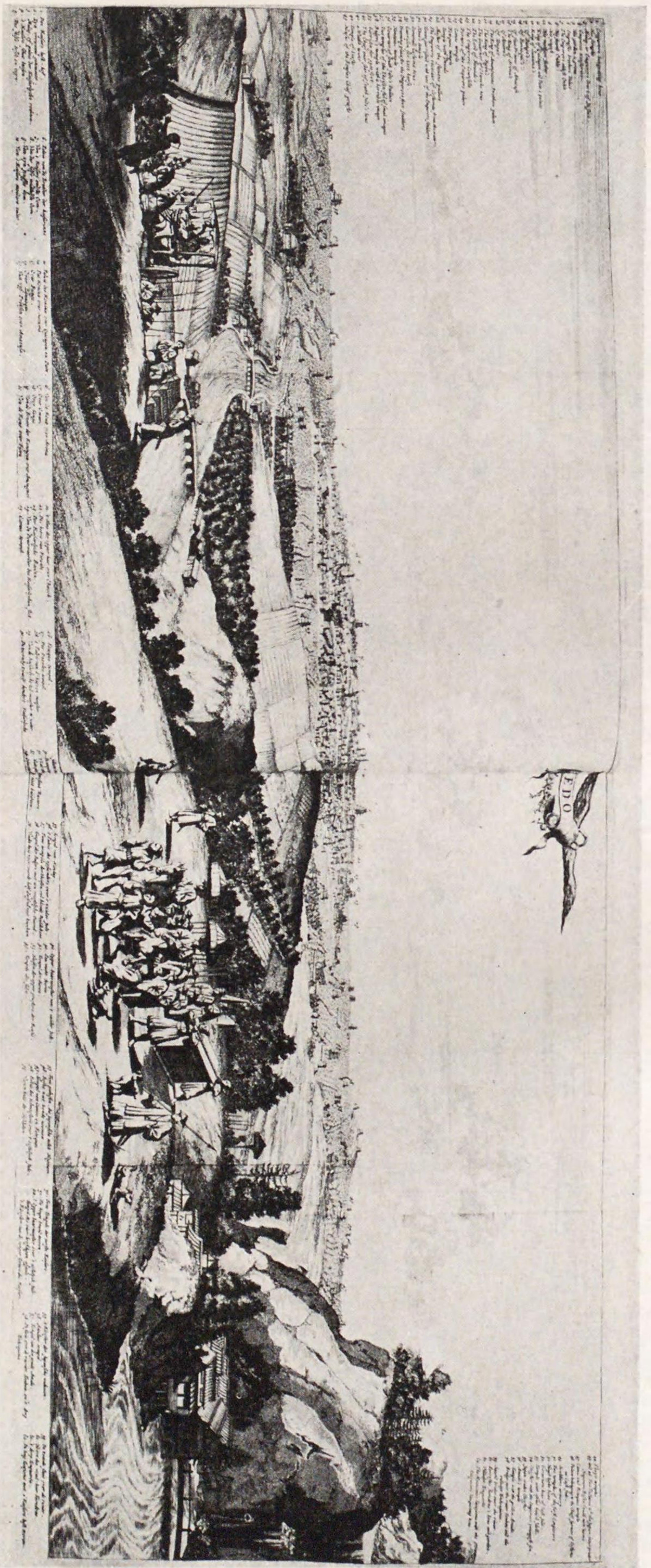
男子の外に侍女の隨行少からず。侍女は鍍金せる鎖を以て僕の導ける牛及馬の牽引せる車に乗れり。車には二輪あり、輪に近く乗車の爲に作れる梯子の如き階段あり。我國の車は四角なれども、彼等の車は八角なり。車の各隅の上は臥龍を以て飾れり。車の外部は數枚の板より成りて巧に塗られ、鍍金せられ、梓は美麗なる彫刻を施し、鐵板には畫を描けり。此豪華なる一行は、停止して見物し居たる蘭人の前を過ぐるに三時間以上を費したり。

長崎江戸間の道程

それより川崎村を品川市に達し、終に十月末日帝都江戸に入れり。大阪を發せしより長くして怠屈なる旅行なりき。



將軍の姫を載せたる牛車



市 戸 江

長崎より江戸まで實に三百四十五リーグ、長崎より大阪まで二百二十リーグ、大阪より江戸まで百三十五リーグを隔つ。

* * * * *

蘭使の江戸着 江戸市の記載

大使の江戸に着するや、和蘭東印度會社の代理人の住宅に入り、人を遣して總奉行シキングゴ殿(Sickinggodonne)及式部長サブロイサイモン殿(Sabroiseimononne)に到着を通告せり。都に入りて旅舎まで少くも四リーグなるが、其經る所の街路は兩側に人家櫛比し、之を隔別するものは五十三の門なり。此門は毎夜閉ざさるるものにて、百八十歩毎に立てり。

此市は北緯三十五度三十八分に在りて南海の入江に近し。其前には砂堤及砂洲ありて、小船にあらざれば近づくべからず。水深は此地は浅けれども、鰈、魴、比目魚、モロコ、鰻、優等の牡蠣等を多量に産す。然れども高價を以てするにあらざれば購ふを得ず。其他凡ての食料も高價なり。市は廣くして人口多し。

江戸の家作り 奇なる門 街衢

家は大概粘土を以て作り、外部は板を以て被ひ、是によりて雨を防ぐ。無數の小建物以外に貴族の大屋ありて市を粧飾せり。此等の大建築は凡て數個の莊麗なる入口を有し、其中一は殊に美麗にして他に優れり。此門は平常は開かず、唯エムペロルの爲に開くのみ。貴族の邸宅を建つるや、必ず特殊の門を作る。此門は板を以て蔽ひ、巧に彫刻を施し、鍍金し、印度風に漆を塗り、然る後其上を密蔽して何にも見るべからざらしむ。但一年の或月に於てエムペロル其新建物に於ける饗宴に臨むの沙汰ある時は、此美麗なる門を開く。而してエムペロルの外何人も出入すべからず。之を

終ふれば再び閉鎖す。エムペロルの一たび在りし場處を踐むの榮譽ある者無ければなり。エムペロルは唯一回訪問をなすのみなり。

市は關東の州内に在り。日本の他の市の如く周壁無し。街は一般に長く、各街六十間の長さあり。即ち百五十歩なり。街端に門あり、夜間は閉鎖して警戒す。即ち一種の番所にして、中に二人の警吏ありて、附近の秩序を整理し、一週間毎に市の警衛長に事故の報告をなす。此くの如く街ミ街ミを分つの制度は、大なる市に施さるのみならず、小き町村に於ても行はる。

住民は課税せられず

凡ての市民は租税を拂はず、唯地主に對して若干金を地代として拂ふのみ。家は大抵木造なり。之が爲に江戸及他の凡ての場所は火災多く、屢々全市の焼拂はるるこゝあれども、之を再建するには同じ材料を用ふるを常とす。各街に大なる石造の倉庫ありて、火災の時には凡ての貴重品を此に納れて保存す。人々は凡て最下の室に住す。階上は家財を納るるだけの大きに過ぎず。

愛宕山 エムペロルの殿堂

海上より江戸に來れば、タカヤマ(Tacajama 愛宕山?)と稱する山、市の左側に立てり。其樹蔭多き頂は雲表に聳ゆ。此山より凡ての市の河川出で、多くの家の側を過ぎ、木橋の下を流れて海に注ぐ。此岩山の上にエムペロルの最も主要なる塔立つ。其麓に美しき殿堂ありて、エムペロルに捧げらる。此理由より此に入る者は何人も死に處せらる。唯エムペロル、其近親及僧侶の長のみ堂内に入るを得。

トンカルバ村 利根川

トンカルバ(Tonguarba)村は山の右側の快き森の中に在り。稍東に當りてアルギルハム(Algitham)市は多くの高き杉を以て蔽はれ、之に附屬せる城は樹上のみより見ゆ。タカヤマ及トンカルバ間の半途ばかりに利根川流れ、江戸を通りて南海に注ぐ。市外に大なる石橋あり、前記の河に架し、九箇の穹窿を有す。此橋の近傍に關東の山林監守長ツウロ殿(Toerodono)の邸宅あり。

江戸の邸第及寺院

市に近く他の石橋あり、一方にトンクージャマ村(Tonkoujamma)を洗へる河に架せり。之に對して一貴族の城あり、大なる塔の如き四個の廻廊を有す。稍西には他の華麗なる建物あり、エムペロルの高官の一人に屬す。其正面の頂に方形の塔建てり。

市の上手の端、利根川に近き處に非常に高き望樓あり、高さ四百五十八呎半にして、千二百の兵士を以て護る。

此東側にエムペロルの倉庫ありて、其建物頗る大なり。西には彼等の偶像ホトケの殿堂及神(Camis)に捧げられたるもの列をなして立てり。市の中央には最も愉快なる饗宴場あり。此處にてエムペロル當將軍様(Chiongon Toxogunusama)は常に休養したり。

エムペロルの庭園

尙江戸の西方の觀光をなす者は先づ豊後王の宮殿を見るべし。之に連りてエムペロルの庭園あり、頗る快く喜ぶべきものなり。彼のセミラミスの花園にて世界の七奇觀に數へらるるものも之には遙に劣れりこ覺しく、自然に人工ミが相互に巧を競へるを見る。

之に近くエムペロルの閣員チーコウ(Chicow)及平戸の君主其他の邸第あり。

稍進めばエムペロルの厩を司れるウトラン殿(Trandon)の美邸あり。それより南に釋迦の殿堂あり。之に近く税關あり。次にエムペロルの元帥の大宅數個あり。更に離れて壁を繞らせる平地ありて、二千の馬匹を入るるを得。

三體の殿堂

他の殿堂の中に偶像三體(Xantay)に捧けたる甚だ美麗なる一字あり。上下三箇の屋背を有す。エムペロル信長三十王國を服従せしめ、此勝利によりて王冠を戴きし後、費用を厭はずして此堂を建て、以て名を不朽に傳へんごし、自ら生神として崇敬せられんごを欲したり。然れども一五八二年明智の爲に殺されたれば、彼の死ご共に彼を神として禮拜するの儀式も止み、その殿堂は三體に捧けられたり。

偶像充滿せる殿堂

これより遠からずして江戸市南部の奉行長の宅の傍を過ぐべし。前方は長く建てられ、中程には方形の塔を有する門あり。尙市内に進めば殆ど相接せるイコイセン(Ikosen)の二殿堂あり。小像を以て充滿せり。是に隣して僧侶に屬する堂宇尙二個あり、之をブルグル(Bururu)と稱す。其中には怖しき怪物の像一體あるのみ。

戍衛所 奉行長廳

此市には亦タカヤマの背後に他の美麗なる建物あり。タカヤマには堅固なる戍衛所ありて、三千五百の兵士居る。其一側に市の同方面の奉行長居り、毎週下僚より其受持區内の事故の報告を受く。

海陸ごもに遠くより望見すべき望樓ご戍衛所ご奉行長の政廳ごは大體三角形をなす。稍離れては各種の動物に捧けたる殿堂あり、高き二重の屋背を有す。其北方には大なる建物あり、佛僧の長三人住す。一列をなせる殿堂三棟あり。

カミ及ホトケの殿堂

最後にはカミ及ホトケに捧けられたる殿堂見ゆ。カミ及ホトケは特稱に非ずして一般の名なり。日本人は來世の幸福を祈る神をホトケと云ひ、變轉する幸福即ち健康、富、或は財産を繼ぐべき子孫に關して祈るものをカミと稱す。優等の神の名簿中には、多くの王公及エムペロルあり、其生前の偉大なる功業の爲に臣民より神として登錄せられ、死後禮拜せらるるごも、恰も希臘、羅馬に於けるが如し。

後宮

エムペロルの庭園の一侧に婦人を住ましむる後宮あり。三十の大なる部室に分つ。日本人は之をチャンドラン(Chandran)と稱す。海岸に近くキクゲウ(Oukougen)及伊達の諸王に屬する宮殿あり。其背後には薩摩王の宮殿あり。

御臺

然れごも市の最美觀として他に超ゆるは、御臺(Mitay)と稱せらるるエムペロルの配偶の莊麗なる宮殿にして、三層の樓を成す。

寶藏

御臺の宮殿の傍に大なる石造の家屋あり。此はエムペロルの無盡藏の寶庫にして、金銀山積して到底算數の能くする所にあらず、歐洲諸國王の富を合すごも遠く及ばざるべし。

エムペロルの三弟の第宅

ハイグレロダノ・カムマイコン(Phaiglerodano Cammangon)はエムペロルの兄弟にして、ヤマイステロ(Yamastero)の王なり。又莊麗の宮殿に住す。其近傍に彼の伯父に屬する三宮廷あり。第一は尾張(Oneway)、第二は水戸(Milio)、第三は紀伊(Cinocuni)の主なり。凡て公方様(Combosama)と云はるるエムペロル將軍様の弟にして、三宮殿は相近し。紀伊

王の宮殿最大にして美なり。上下二の屋背あり。將軍様はエムペロル内府様の子にして、一六一六年位を継ぎたり。

江戸に在る他の宮殿 燈臺

此地に近く亦美しき建物あり、山口(Amangau)王の二兄弟の所有なり。少し離れてタカタ(Tacata)王の宮廷あり、之に隣して讚岐(Sanaguq)、ハンガ(Hanga)、及大村の諸王の住居あり。市の中央に近く五宮殿あり。天草王住居す。尙進めば有馬王大なる宮廷を有す。二人のエムペロルの廟宇は頗る美なり。北端には燈臺あり、高さ五百九十四呎也。此より稍隔たりて寡婦の爲に作れる一尼院あり。之に近く市の東部の奉行長の住宅あり。其處より六街を進めば、四頭を有する偶像に捧げられたる殿堂あり。

阿彌陀の殿堂

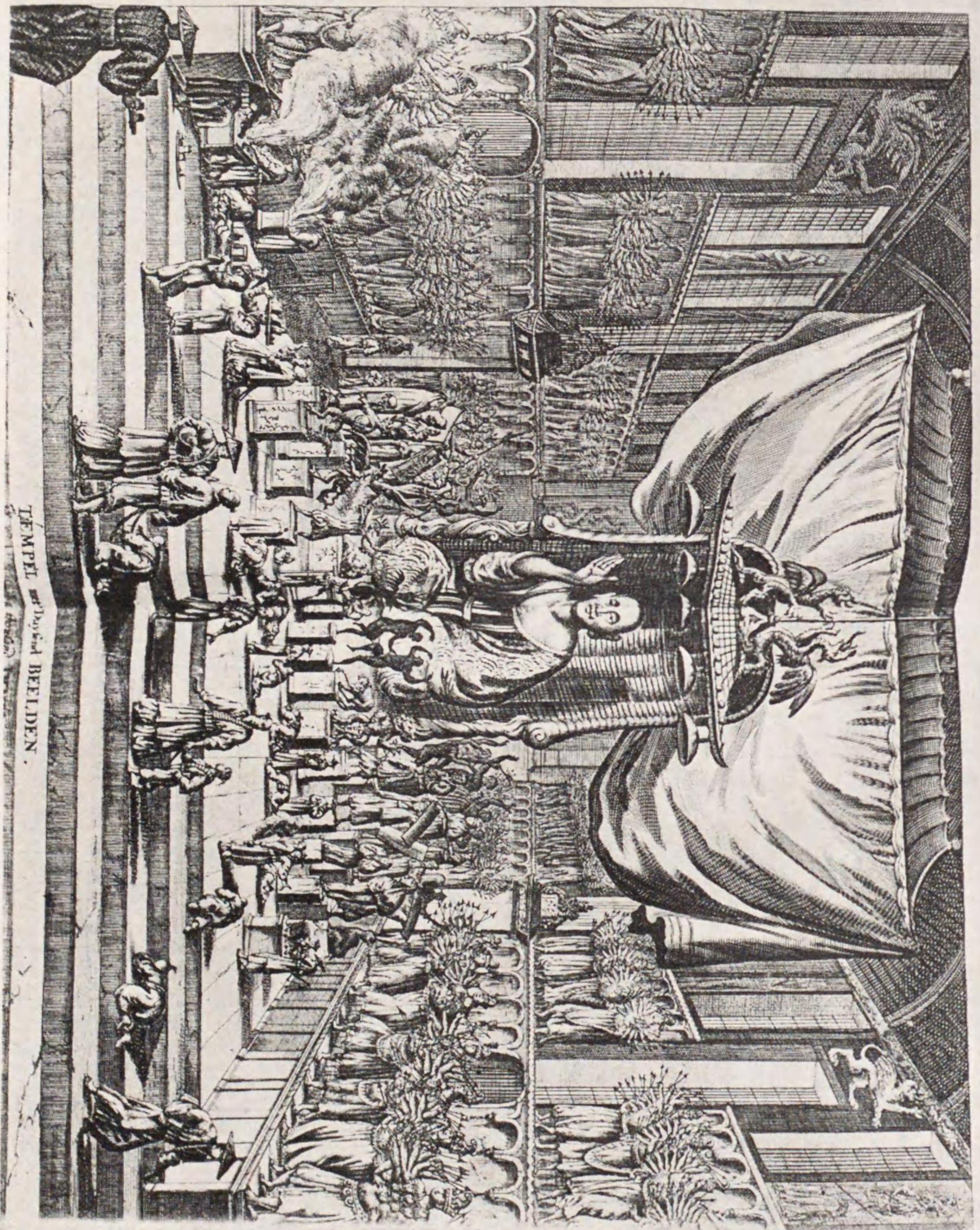
市の此端に於て最も注目すべきは、壯嚴なる僧院にして、高大、美共に驚嘆すべし。此學林にはエムペロルの第二子、第三子共に教育せられ、各種の學問及東洋學を受く。江戸の東端に二殿堂あり、共に阿彌陀に捧ぐ。一は單に阿彌陀ミいひ、一は黄金阿彌陀ミ稱して區別せらる。市の極端にトンケルバ村に對してエムペロルの税關あり、江戸の東部の税を集む。

黄金阿彌陀の記載

黄金阿彌陀の殿堂は市を粧飾するものなり。見るも恐しき偶像、香案の上に在り。香案は銀板を以て張る。其上に黄金の椀二個、一は偶像の前に、一は背後に在り。偶像は七頭を有する馬に誇り、其一頭はおの／＼十萬年を意味す。偶像自身の頭は犬の如く、長き耳あり。手には黄金の輪を持ち、其輪の中央を齒にて保てり。其上衣の裾は最も貴きものなり。胴より下は眞珠、金剛石、其他の寶石を以て飾れり。香案の下には日本文字を刻せるが、偶像の屬性を記せ



黄金阿彌陀の奇なる狗頭佛像



TEMPLE of Belus at BABELDEN.

千佛殿

る象形文字即ち祕密文字なり。此像は彼等の神の中最も主要なるものにして尊むべく、其名を唱ふる時は幸福なりとの意味を示せり。

* * * * *

阿彌陀像に種類多し

尙阿彌陀像には種類多し。圖の如く七頭を有する馬に乗れる犬頭の者もあれば、裸體の青年に似たる者もあり。後者は耳に孔あり、木にて刻せる大薔薇の上に座し、前は裂けて頂に二つの大なる釦ある奇帽を被り、柔和にして年若き人の容貌をなし、耳には大小二重の環をつけ、頸には巾を垂れ、胸は巧なる彫刻を施せる大なる卵形の板を以て蔽ひ、肩及背には奇麗に細工して繼合せたる羽毛の上衣を懸け、手には念珠を持ち、胸と腹とは非常に大にして、蒲團の上に座したり。其前には日本文字を刻せる方形の石あり。

又阿彌陀の近くに他の偶像を置く。三頭を有し、繼合せたる扁平の帽子を被り、頭は毛を生じ、頸の周圍には厚紙の帶あり。各側に四臂を有し、胸と腰には眞珠の帶を捲く。腹は光線を發するこゝ太陽の如く、胴には數個の文字を書きたり。壁には美しき日本の衣服を懸け、其前に多くの燈火を點せり。

千像の大殿堂

然れども江戸の阿彌陀の此二殿堂以外に、尙都を去るこゝ一リーグの地に最も有名なる禮拜堂あり。古のエムベロルの建設に係り、後に至りて擴張せしものなり。長さ四百二十呎に上り、二箇の大女關あり、中央には吊戸あり。此殿堂に入れば、先づ人の等身以上にして寧ろ巨人の如き像の臺座上に在るを見るべし。耳には孔あり、禿頭にして印度の波羅門教徒の如くに剃れり。此巨像の上に數個の杯懸れり。兩側には種々武装せる兵士、モリスコ舞踏者、異風

の妖術者、其他異類異形のもの立てり。風神、雷神も恐るべき姿を以て現されたり。階段を上るこゝ七級にして此禮拜堂に入れば、兩側に五百の偶像を壁に定着す。皆阿彌陀の子観音を現す。愛すべき容貌を有し、腕は三十、其中二本のみは普通の大きさをなし、他は皆甚だ小なり。毎手に矢を二本持ち、胸には七個の小さき顔面を刻せり。頭上には黄金の冠を戴き、金剛石の緒を用ふ。像の附屬品たる鎖、鈴、其外、像の全部までも黄金なれば、觀者の眼は此禮拜堂の燦爛たる有様に眩すべし。此處に日本の各地より參詣するもの多く、近傍なる諸他の殿堂への參拜を兼ね。

日本に於ける大學

此禮拜堂を距るこゝ二哩許りにして有名なる大學あり。一丘の下に建ち、數個の大講堂、學校、修道院に分れ、快き水流を以て圍まる。其近傍に多くの禮拜堂あり。其一に於ては惡魔の像ならんこゝ想はるる怖るべき像を禮拜す。丘頂には木造の殿堂三棟あり、太き柱を以て建てられ、地は磨きたる大理石を敷けり。

釋迦の大像

此等の殿堂の一に釋迦の大像を安置し、其西側には多數の小像あり。其背後には羊皮紙の一片懸れり。是に二千個の廣き印形を結付く。之に近く二歳の小兒の像四十個あり。殿堂の兩側には二個の恐るべき怪物ありて、大なる棍棒を握れり。此等の像も印形も凡て鍍金を施せり。

第二の殿堂は寧ろ集會堂なり。彼等は始業式、學生の進級式等を此堂内にて行へばなり。此儀式に精通せるもの講壇の中央に立ち、彼の頭上には小旗を懸く。卒業生は主席の博士に對し成績に従ひ彼を僧班に列せしめられんこゝを請願す。其後彼は進められたる地位に着席す。

豪猪を祭れる殿堂

此建物は豪猪に捧げらる。是れ學問の象徴なり。然れども之が爲に他の神の如くに像を作らず、唯死せる動物を大講堂の屋頭に置き、此に對して學生の學問技藝に長ぜんこゝを祈る。其時は眼を舉げて心を天に向くるが如くす。第三の殿堂は高さこゝ美に於て前二者を凌げり。

學徒の宮殿 日本の圖書館

此他學生が勉學し住居する建物數個あり。それには各圖書館の設あり。無數の書籍目錄を備へ、螺旋機を用ひ或は輪を轉すれば、所要の書自然に眼前に出来る。

日本に於ける多數の寺院

神の禮拜に捧げられたる堂宇の數多く且其廣大莊麗なるは、賞嘆に餘りあり。最も大なるものは勤行及儀式を行ふ爲に僧二十人を住せしめ、其次なるは十五人、其他は十人、最小は二人を住せしむ。

僧侶の寺院惡用

然れども宗教上の目的を以て形勝の地に建てられたる此等の建物も、中に住む僧侶の邪淫、貪婪によりて腐敗の學院となり、暴食、飲酒、淫蕩の學校となり、彼等の偶像の脚下に於て種々の不善を行ひ惡戯をなして憚る所無きに至れり。

* * * * *

蘭使引見の命下る

話は再び我が使節に立戻る。彼等は十一月末日にシキンゴ殿及サプロサイモン殿に到着を届け出で、それより東印度會社の代理人長の宅に止り、漸く翌月二十九日獻品を贈呈するこゝを聽され、翌朝を以てエムペロールに謁見すべき準

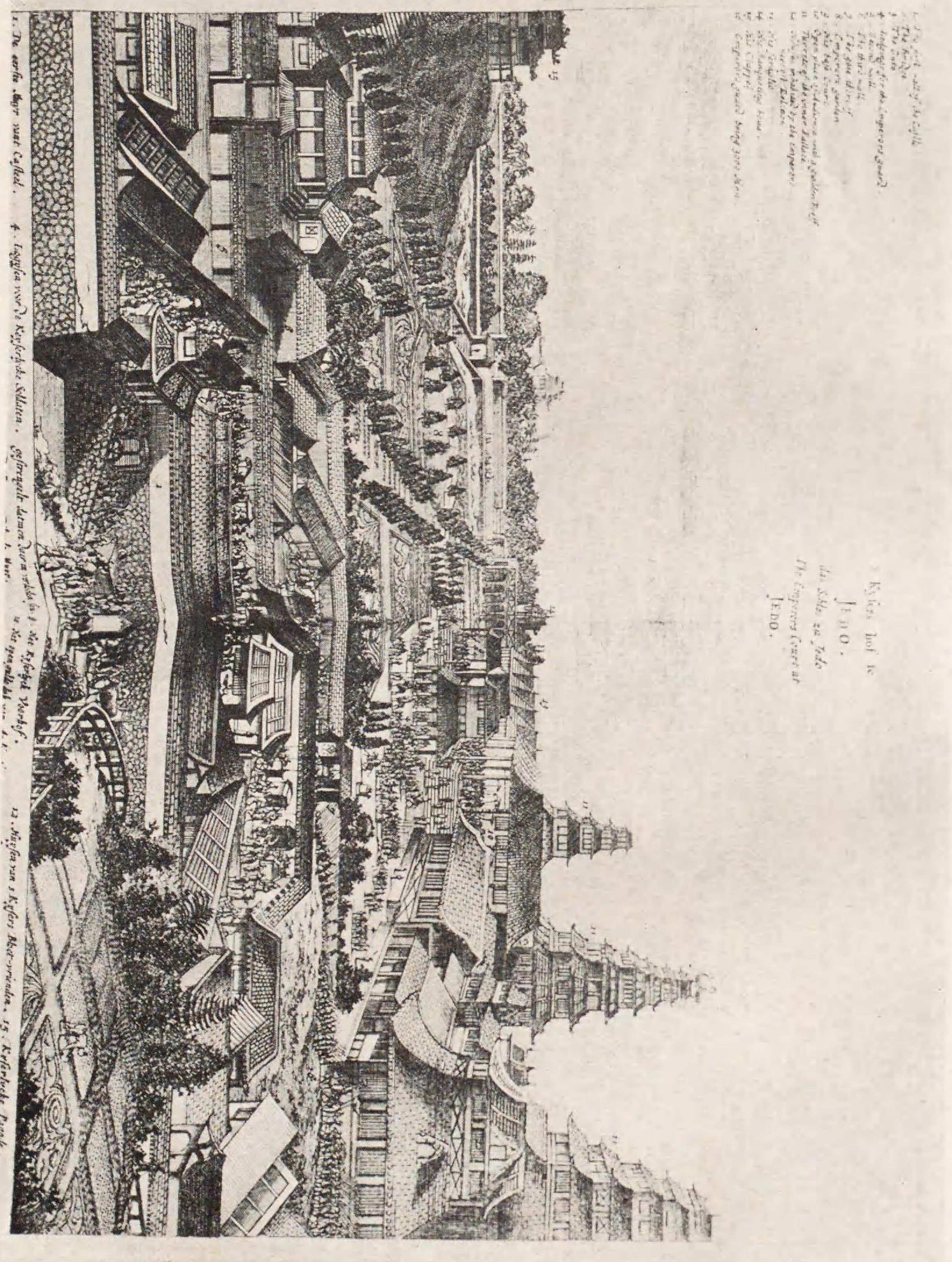
備を爲よみ命ぜられたり。是に於て日本人は風呂(Foo。錢湯)に行き身を清めたり。斯くせざればエムペロルの面前に出づべからざるを以てなり。

蘭使の失望 宮廷に入る 接待の様 退出

然るに蘭人は準備既に整ひ居りしにも拘らず、エムペロルの所勞の故を以て謁見は停められ、それより同月は病癒えず、使節は忍耐して待たざるべからざりき。四月六日に至りて翌朝内閣員及若き公子の前に獻品を持參すべしとの命令に接せり。エムペロルの病氣猶全く癒えざりしが故なり。かくて翌日午前九時頃使節は輿を以て宮中に運ばれ、從者は徒歩して從へり。彼等の通過せし街は人々夥しく群集せり。宮殿に來るや四階段を上り、廣き室に入れり。床は半ば磨かれ、半ば上品なる蓆を敷けり。此處には數人の貴族警衛せり。此室を過ぎて使節及隨員は多くの美麗なる室に案内せられしが、此等の室は各仕切を以て分たれたり。此處にて待つこゝ一時間半、初めにフリシウム次にブロークホルストの順にてエムペロルの内閣員四人に謁見を許されたり。此四人は委任を得てエムペロル其人を代表せるなり。使節は獻品を彼等の前に置き、後間もなくしてエムペロルの子息たる若き公子の前に置けり。授受を了へて暫く交話したる後、彼等は宿處に引取る許可を得たり。唯コルネリウス・メイ(Cornelius May)といへる商人及蘭の一鎊職は後に残りて、獻品中の銀製船を水に泛ぶる時に附屬の材料を如何に處置すべきかにつきて説明せり。之に要せし時間は一時間にして、彼等も亦宿處に歸れり。

江戸城の記載

エムペロルの宮殿は少からざる驚嘆に價す。最外部の壁の周圍には、宮殿を圍める壕より數呎を隔てて大なる柵あり。其間に廣き路ありて、人民及輿車の往來頻繁なり。壁は、凍石(フリーズ・ストーン)を以て作り、甚だ高くして厚く、



江戸城内

其頂には、狭間胸壁あり。最外部の壁は乾きたる廣塚を以て圍む。其上には數個の弓形を有する橋あり。門は繁く打込みたる釘を以て強くし。方形に作られ、二階をなす。各階には特殊の屋背ありて、壁の上に數呎突出せり。上方の方形の各側にはエムペロルの紋章ある長旗二旒を垂る。門は常に強力番兵を附す。外壁の内部の廻りには兵士の入るべき多數の小舎あり。此等の小屋は精確に一線をなして建てられ、第二壕に接す。第二壕は多くの入江を作れるが、その第二壁が處々にて突出して多くの塔ある胸壁をなせばなり。亦外壁に於けるが如く兵士を以て警固す。第二の門も亦警衛頗る嚴なり。此衛所は第三壕に接續す。第三壕には石橋を架し、其端に第三の門開けり。此門は更に豪華に作られたる石壁の間に在り。

此は尋常の直壁にあらず、寧ろ胸壁を謂ふべく、角面堡、外堡、各種の側堡塔及番所を有す。然れども、是等は均齊の形を成して互に相應じ、壁を謂はんよりも寧ろ城砦を稱すべし。第三門を入れれば廣き方形の地あり。此處に至れば前面に當りて遙にエムペロルの饗宴場あり。壯麗なる樓を有し、樹木及強壁を以て圍繞せり。左側は出入あれども、右側は平滑均齊にして、丘に沿ひて走る。丘上にはエムペロルの殿堂あり。第三門に近く多くの小中庭あり。第一のものは方形にして、其周圍に多くの美しき休憩所あり。二十八本の杉の柱を以て支へられ、下は開きて廊の如く、其室の上は屋背傾斜して斗出し、頂には第二階あり、四周に壁を有す。其四隅に他の屋背突出す。此庭に次いで第二の中庭あり。數個の休憩所は四本の圓柱に支へられて入口に面す。此等の後に他の新しき莊嚴なる建物ありて、壁を以て圍まる。

エムペロルの庭園

此等外部の中庭はエムペロルの庭園を望むを以て一層喜ぶべし。庭園は自然、技術、金錢の與へ得るものに缺くる所

なく、樹蔭に歩道あり、巧に區畫せられたる花床は丘陵に接せり。其丘巔は殿堂を以て飾られ、エムペロル毎日此殿堂に參詣す。

エムペロル最近親の邸第

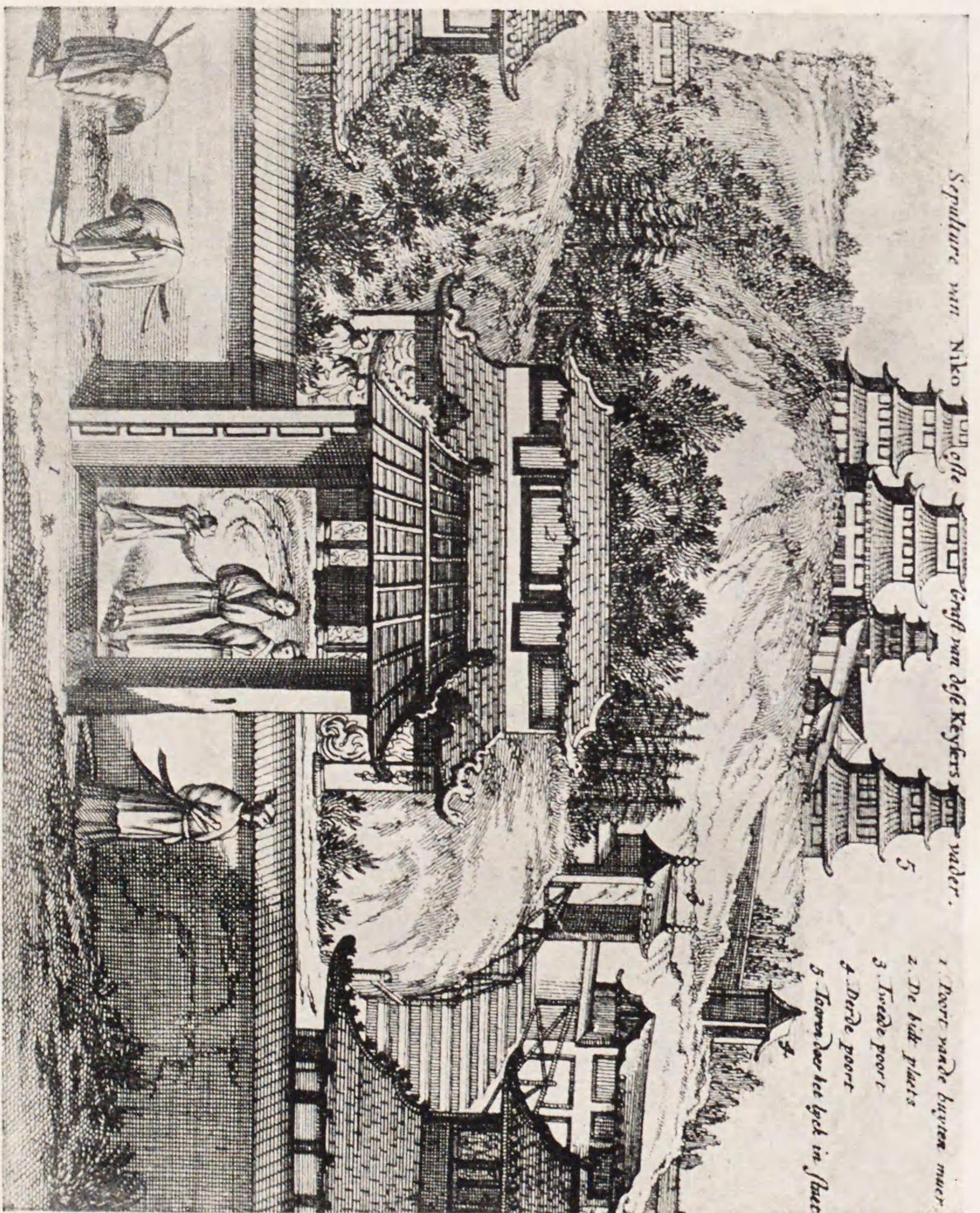
前記第三門の左には多數の美しき家あり。其最下の屋背の四隅は大なる黄金の球を以て飾らる。其上に數個の室及露臺あり、此處より前記の開きたる中庭と三箇の堡壘とを望むべし。此第一の宮殿と第三門の内門との間にエムペロルの衛兵三千人ありて、絶えず警戒す。此第一の宮殿と第二の宮殿とは互に連結す。第二の宮殿は第一のよりも頗る長けれども、高さはさ程にあらず。屋背は亦金球を以て飾らる。兩宮殿の間には塔の如き贅澤なる建物あり、凡て此等はエムペロルの近親の住する處なり。

エムペロルの住殿

此等の背後にエムペロルの最も壯麗宏大なる住居見ゆ。三個の高樓あり、各方形にして九層をなし、高く天空に聳ゆ。各層の屋背は甚しく突出し、爲に室を小ならしむる如く見ゆ。中央の塔最も大なり。其頂には二個の大なる海豚耀けるが、金板を以て蔽はれ、其尾を高く空中に上ぐ。之に相對して廣大なる堂あり、其圓柱は鍍金せらる。天井には巧なる彫刻を施して鍍金し、屋背も亦黄金の如く輝けり。エムペロル常に此處に座し、以て外臣又は王公の調を受く。此廣間の一方に宦仕婦人の室あり。

兩使再び宮廷に来る

フリシウス、ブロークホルスト二卿が四月七日閣員に謁見を終ふるや、彼等は宿處に歸り、翌日シキンゴ殿及サブロサイモン殿の命令により再び興にて宮殿に赴き、隨員は騎馬にて之に従へり。宮殿に入るや、前記の廣間に暫時止り、



日光の
前將軍墳墓

フリシウス先に、ブロークホルスト次に、順を以て閣員の前に出づることを許されしが、何等の待遇も無く、唯閣員よりエムペロルの返禮として蘭國の使節に與へられたる絹の衣服數領を賜はりしのみ。次で長崎に歸るここの免許あり。

蘭使贈品を携へて閣員を訪ふ エムペロルの大墳墓

彼等は江戸を出發するに先ち、(古き習慣に従ひ)エムペロルの内閣員數人を訪問し、各立派なる贈遺品を呈せり。斯くて四月十六日出發の準備全く整へり。彼等若しエムペロルに謁見の爲に此くの如く長く滞在せざりしならば、エムペロルの父の有名なる墳墓を訪ひ得べかりしならん。此は江戸を距るここの四日程の地の快き山上に在り。其麓は壁を以て繞らし、中央に大なる方形の門を有し、堅固なる戸あり。其兩側には壁に對して建てられたる二個の美しき禮拜堂あり。各二階造にて、其上階の端は黄金の球を以て飾らる。左側に廣き通路あり、砂石を敷き、兩側に柵あり。此路は四級の階段の一對に通ず。此處より第二門に上る。此門も亦鍍金の球を以て飾らる。此處に山は再び第二の壁を以て圍まる。其壁は左側は長き殿堂に境し、右側は快き樹木之を蔽へり。樹木より遠からざる距離に禮拜堂見ゆ。曲りたる路を過ぎて第三門なる。二個の石壁其兩翼をなす。それよりエムペロルの墳墓の存する山の背後の入口に達す。此墳墓は實に優麗なるものなり。四個の塔ありて天に聳え、其間に數個の壯麗なる建物ありて之を連續す。最高の塔の中にはエムペロルの遺骸を埋む。其前には四百五十箇の燈籠日夜點火せらる。

エムペロル毎年「父の墓」詣つ 銅燈臺

日本のエムペロルは死せる父に供物をなす爲に、貴族の大行列を以て毎年此處に來る。彼は先づ第一門の前の禮拜堂に於て長き祈禱をなす。此禮拜堂の内に銅製の燈臺あり。是れ東印度會社よりフランシス・カイロンの手を以て一六三六年五月三日日本エムペロルに獻呈せしものなり。三十の枝を有し、重量七百九十六封度あり。此外同時にカイロ

ンよりエムペロルに獻ぜしものには二箇の波斯大アルカチーヴ(Emme)、黒天蔦絨一反、烏銃十二挺、各種の裂地十
四片ありき。

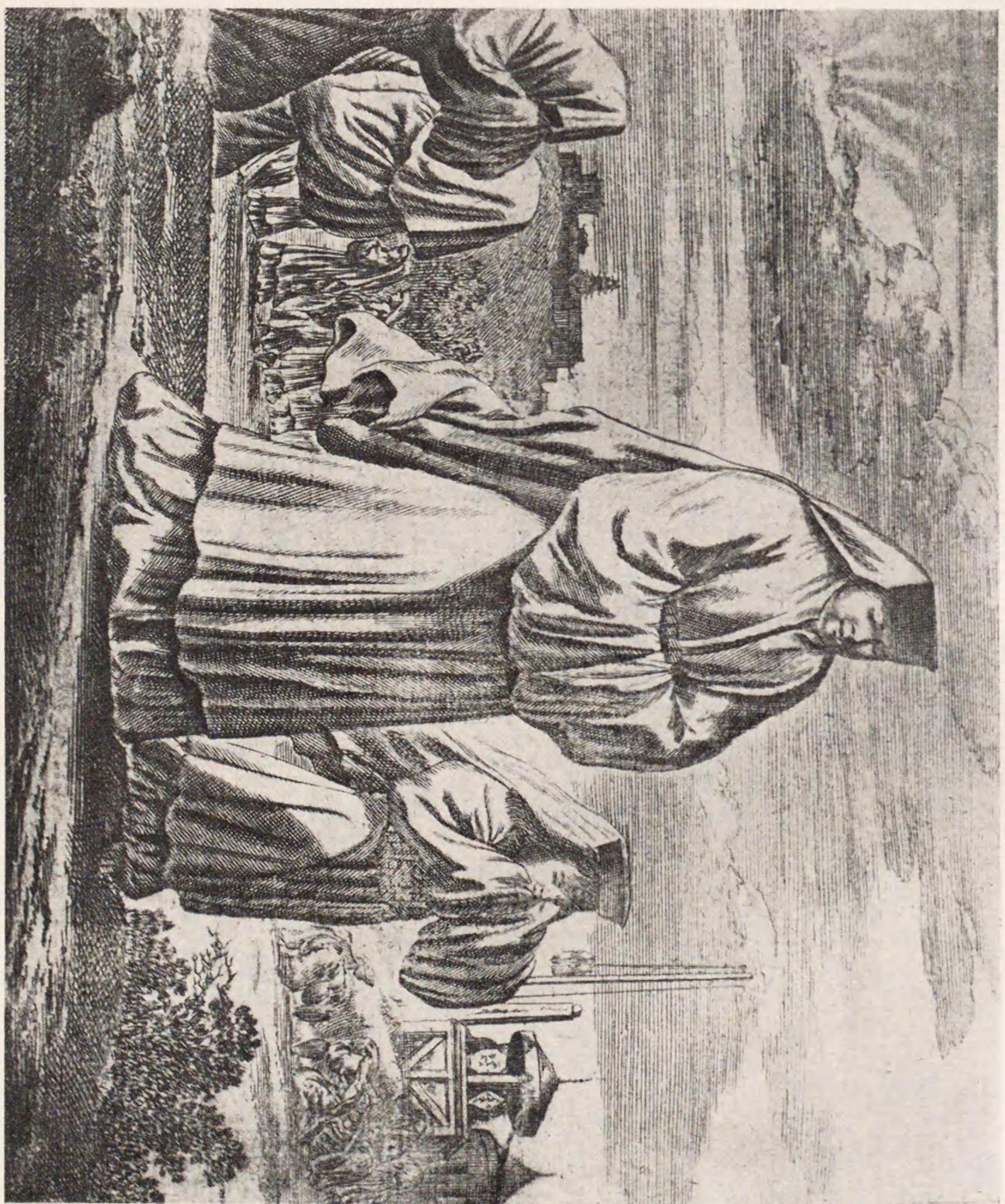
* * * * *

日本に於ける葬式の奇態

日本人は墳墓に費用を惜まずして名を永久に傳へんことを欲す。其貴族の葬儀は次の如し。家より死骸を運出さんとする
前一時間、死人の親族は通常の葬服なる白き絹衣を着て葬儀場に徒歩す。次に婦人之人に従ふ。既婚婦人も未婚婦人も
皆諸種の色の覆面をなす。大なる資産家は大抵彫刻したる杉材の棺臺にて運ばる。

死者に對する僧侶の儀式

著しき間隔を置きて主なる佛僧の一人従ふ。葬儀を行ふ僧なり。絹金こを以て輝ける大なる車に乗る。三十人許り
の僧車の周圍を走る。彼等は廣き縁の幅を被り、精巧なる麻布の白法衣の上に黒き上衣を著け、灰色の外衣を以て之
を覆ひ、各長き炬に點火して之を携ふ。炬火は松の枝を以て之を作る。彼等の言ふ所によれば、死人が道を踏迷はぬ
爲に之を照すなりと。此等三十人の外に又二百人の僧之に従ふ。彼等は死者が生前、最も崇拜せし神即ち偶像の名を
高聲に呼び、又銅盤を打ち、諸種の色紙製の造花を滿たせる大籃二個を運ぶ。此籃を長き棒の先に結び、歩行する時
其花の落散るやうに動かす。此は彼等の言ふ所によれば、死人の靈が既に永久の幸福の國に赴ける徴なりと。僧侶等
の後には八人の青年及若き僧二列をなして従ふ。彼等は旗の附きたる長き竿を持てり。旗には死者の崇信せし偶像の名
を書けり。彼等は又點火せる八個の提灯を持つ。提灯は角の代りに精巧の木綿を張れり。此提灯持の近くに灰色の衣
服を着けたる二人の青年ありて、松の炬火を持つ。市を出づるや之に點火す。此を以て死體を焼くべき火を點するな



葬禮

り。

次に死骸の前に多くの人歩む。凡て灰色の衣服を着け、頭は黒き光輝ある皮革製三角形の帽子を以て被ひ、其上に彼の偶像の名を書ける小き紙片を付す。それを愈々著しくなさんてか、一人之に従ひ、大なる文字を以て死者が尊崇したりし神の名を書ける枠を運ぶ。

死骸

次には死骸來る。四人の人棺臺の上に載せて之を擔ぐ。棺臺は美麗に飾られたる床を以て蔽ひ、其上に死體横はる。頭を前方に曲げ、手を組合せ、白衣を着け、その上に紙の上衣を置く。此紙衣には彼の信ぜる神に屬する神祕的信仰上の文言を書し、彼を救ふべき慈悲を垂れんことを祈る趣をも書けり。死骸の後に死者の子息、相應の服裝をなして従ふ。最少の子、又松の炬火を持てり。火葬堆に點火せんが爲なり。最後に普通の人の一群ありて、前者の如く黒き帽子を被る。

火葬の様

葬場に近づけば、人々環状をなして立つ。やがて僧は力を極めて銅盤及鐘鼓を打ちて噪音をなし、凡ての人は偶像の名を高聲に叫ぶ。此を繼續するこゝ一時間なり。其間に葬穴を準備す。穴は方形にして、周圍に柵を設け、蓆を吊る。東西南北に向ひて四個の入口あり。穴は帆布を以て蔽ふ。其各側に卓子ありて、諸種の果物を載す。卓子の傍には香の薫ぜる壺あり。一同圍まれたる場處に近づくと、死屍の上に長き繩を投げ、凡ての人は其繩に手を添へ、皆々偶像の名を呼ぶこゝ數回、又圍まれたる場處の周圍を歩するこゝ三回なり。

終に彼等は棺臺及床もろこもに、死骸を火葬堆の上に置く。此處に全葬列を嚮導せし僧進み出でて數言を低語す。其

意義は列席せる何人にも領解し得ず。而して彼は燃ゆる炬火を取りて死者の頭上を振るること三回、此圓形によりて死者の靈が決して初も無く又終も無きことを意味す。終りて彼は火を投ず。死者に最も近親の者二人、一人は棺臺の東に、一人は西に、禮式に従ひて立ち居れるが、此炬火を左右より同時に三回、死屍の上にさしかざし、次に之を火葬堆の上に投ず。同時他の人は香油を注げば、火俄に燃え上り、屍體は一瞬間に亡ぶ。

火葬の時の奇習

此間に子息及親戚は一個の卓子の方に歩み出で、壺の中に火ミ香ミを入れ、跪きて在天の死者を拜す。終れば僧は其任に従ひて報酬を受く。主座のものは少くも二十デユカットにして、其他は漸次に低下す。

友人及僧の退きし後、普通の人及び灰色の衣服を着けたる人々は、卓上に在る食物を以て火の周圍に歡樂す。翌日死者の子及友人は同處に赴き、鍍金の骨壺に灰、齒、及骨を納め、之を家に持歸り、家中の主なる一室に置く。

説教の反覆 盆の祭事

此處に多くの僧來り、葬式の説教を反覆す。第七日に彼等は訪問を初め、遺骨の入れる壺を地上に置く。他の人々は方形の石を置く。其石面には偶像の名を刻せり。此後子息は日々父の墓に行き、其上に花を投げ、熱き飲料を供へ、又食物の皿を置く。之によりて父の靈魂が元氣を附け得んが爲なり。

此葬儀は金力ある者には少くも三千デユカットを要し、普通の市民にも二三百デユカットを要す。此外に彼等は一年一回全市を通じて盆(Bonni)ミ稱する大なる祭事を行ふ。凡ての死せる知人の靈魂の爲にするものなり。此日各戸燈籠に火を點じ、凡ての人其親族の墓に詣り、市外に各種の食物を運ぶことは、既に記せるが如し。

丁憂中の日本人

日本人が死者の遺骨を葬りたる後如何なる舉動をなすか、之を觀察するは價值あることなす。彼等は二箇年嚴格に喪に服し、其間は凡ての快樂を禁斷す。衣服にも悲哀を示し、頭には帽子を戴く。其頂は平く、前は方形にして、後方は廣く擴がりて足まで垂れ、恰も覆面衣の如し。上衣は極めて廣く、胸を横ぎりて之を折る。手を袖の中に入れて悲哀の態度をなす。此上衣は縁を取り、又は刺繡を施すべからず。唯廣き帯を以て締む。上衣の下に袴現れ、袋の如く足の上に懸る。凡て彼等の衣服は褐色の麻布を以て作り、決して之を漂白することなし。

貧民の葬儀

貧民の葬儀は富者のそれとは比較すべくもあらず。僧は一人も従はず。僧の勢力に拂ふべき金を有せざればなり。僧は報酬無くしては一步も動かざるなり。故に貧民は唯死せる人の靈に食物を供することのみ力を注ぐ。此外に彼等は、大抵公にも私にも靈魂の不滅に反對せり。故に貧民の死體は(而して日本には其數夥し)夜間之を人目にかゝらぬ場處又は最近の塵芥捨場に投棄す。

蘭使江戸を退く

此使節一行は日光に參るべき機會を失ひ、一六五〇年四月十六日發足、江戸より長崎に歸らんとして、品川(Sinagawa)、六郷(Rokna)、川崎(Cawasacca)、神奈川(Cannazawa)、程ヶ谷(Fundaga)及戸塚(Moska)を経て、程遠からぬ處に有名なる猿の堂を見たり。

* * * * *

猿の殿堂

此堂は中央に高き木造の香案を具へ、其下方、人の身長の高さの處は方形にして、二箇の棚あり。此上に第二の

方形あり、下の方形より小なるこゝ三分の一なり。其頂上は廣くして、美麗なる線形を有し、此線形は各隅より突出す。香案の四面には巧なる彫刻あり。香案の低き方の方形に大銅盤あり。之に近く一僧立ち、銅盤を強く打ちて、噪音により参衆をして愈々敬虔の念を深くせしむ。参衆は膝を臂に前額を地に附けて俯伏す。殿堂の兩側に凹處多き壁あり、此處に多くの活ける猿座せり。日本人は此等の猿に對して祈禱をなす。壁の凹處の上は檐の如く突出す。然れども方形にして眞直なり、其頂には多くの猿種々の姿勢に彫刻せらる。或は長くなりて臥し、或は座し、或は直立せるもあり。壁に對して亦彫刻を施せる數個の方形の臺あり。此等の臺の間には數個の大なる凹處あり。この中に他の彫刻せられたる猿あり。彼の銅盤を叩く僧の次には數人の下級僧あり、主僧を助けて禮拜を爲さしむ。堂の他端には廣き棚の上に數個の猿の像あり。其前に諸種の食物を納れたる皿を供す。

* * * * *

使節は此殿堂を去り、江戸を出發してより第十一日の四月二十日日本商業市の最も主要なる都に來れり。

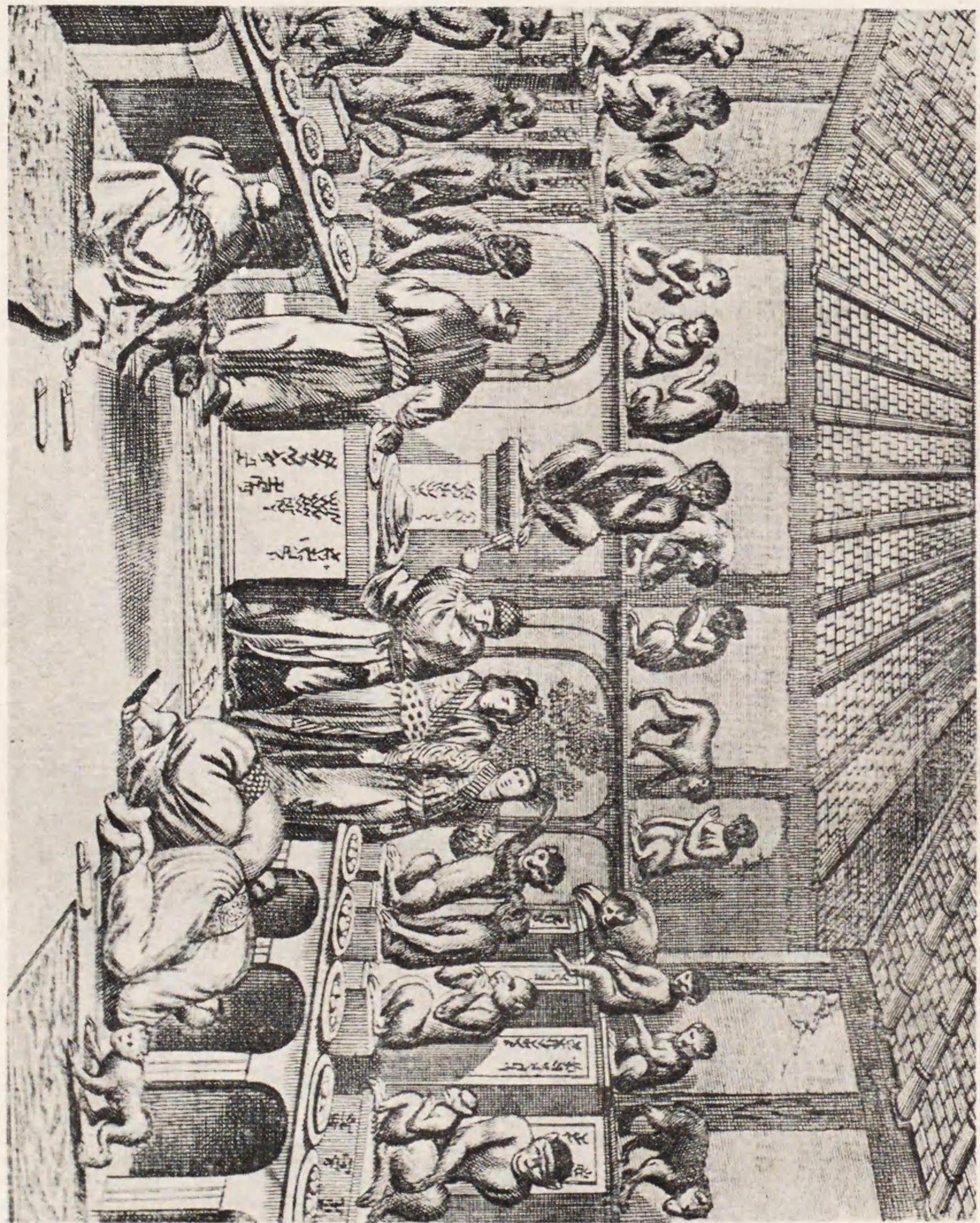
使節は四月三十日まで同地に滞在せり。一日彼等の宿せし家の主人及ボンヨイスの一人の誘引によりて市内の主なる建物を巡覽せり。彼等は數人の商人と共に興にて運ばれ、多くの堂塔の前に佇立して其美觀を嘆稱せし後音樂堂に伴はれ、亭主の饗應を受けて、薄暮家に歸れり。

公方の宮殿

彼等の見たる建物の中エムペロル公方の宮殿は其最良なるものなりき。

ロドウィック・フロユスも嘗て之を見て、歐洲にも印度にも斯くまで莊麗なるもの無しと云へり。

此宮殿の庭園は杉、糸杉、松、橙、其他多くの名も知らぬ樹木を以て圍まる。此等の樹木は秩序正しく栽ゑられ、多



猿の殿堂

くの美しき小林をなす。蓮、薔薇及他の花は花床を飾り、亦観者の眼を喜ばす。香こいひ、色こいひ、固より佳なれども、殊に栽ゑられたる方法の珍らしきが爲なり。

都の奉行の宮殿

都の奉行の宮殿は亦見るに價す。其私邸の後に庭園あり、樹木を以て巧に飾られたるのみならず、其中央には河ありて、岩石の間を約九千歩以上流れ居れり。此河の兩側には愛すべき樹木蔭をなし、中に小島散布し、石橋を以て互に連絡せり。

森林中の僧侶修道院

市より遠からざる處に快き森見ゆ。其蔭には廣大なる僧侶修道院五十棟を藏す。王室の青年は大抵此處に教育せられ、以て父母の教育の責任を軽くす。但し彼等は多額の入學料を拂ふ。學院は之を用ひて學校を擴張し、各競ひて廣大、光輝及便利を計らんす。ロドウィック・フロユス此中の一を見て語るや、下の如し。

予は近き頃基督教の信仰に入りたる者の案内を以て、漆塗の戸を通りて僧徒の修道院に入れり。前門の背後には開きたる中庭あり、黒き方形の石を鋪き、大なる廻廊にて圍み、下の壁も亦漆塗にて輝けり。此中庭につぎて立派なる庭園あり。技術と金錢とを惜まざるものにして、多くの小丘、磨きたる大理石を巧に繼合せて此中に作られ、其小丘の頂には木を栽ゑ、凡て石橋を以て相通す。地は粗なる光輝ある砂に小き黒色の介を混じたるものなり。其間に各種の花を植ゑ、一年中一日もして花無き日は無く、常住の春、永久の樂園茲に在りこ。

魔王の殿堂

此森の中に魔王の殿堂あり。其像は一見恐るべきものにて、左手には笏を握る、其兩側に二個の怖しき像立てり。左

なるは帳簿を持ち、人類の凡ての行爲を記録す。他の一人は前者の書きたるものを讀むが如し。壁には地獄に於ける諸種の苛責の圖を描けり。彼等は信ずらく、如何なる階級を問はず各種の人は其犯せる罪惡によりて此苛責を加へらるる。

此殿堂ほぎ多數の人の參詣するものは日本にも殆ど絶無なるべし。皆多額の金を持參して赦罪を買ふ。以て死後の罰を免れんことを祈るなり。

内裏の宮廷の正門

都にてはダイロの宮殿は最も莊麗燦爛たる偉觀にして、昔より高名の評ある他の建物に遙に超えたり。ダイロの出入する女關は莊麗なる正面をなし、其前に弓形の門あり。其屋背は壁より突出し、各隅に黄金の球ありて光輝を添ふ。之に近く各側に大なる廻廊あり。其廻廊には各四個の廣き區劃ありて、穹窿の天井を有す。各室には各側に九個の窓あり。此室は兵士の護衛所に宛てらる。最外面の壁には上下階の間に珍しき意匠の圖あり、印度風に漆を塗る。廻廊の屋背に隣してダイロの紋章をつけたる旗を樹つ。

防禦工事 内裏の乘輿

此宮全體の宮殿を圍める壁を連結せる壁には多くの砲臺及狹間胸壁あり。又内側に立てられたる多くの番所あり。さて又前記第一の門の内には廣大なる中庭ありて、砂石を鋪く。此處をダイロ通過の時は人々群集す。ダイロは輿に乗り、美服を着けたる人十四人之を昇く。其輿は長方形をなし、各隅より傾斜して、中央に於て小さき黄金のピラミッドを作る。四方に窓ありて、薄き絹を張る。内よりは之を通して思ふがままに外を見るを得べけれど、外部よりは内を見るべからず。此輿は長き棒の上に安んず。昇者は此棒を肩に載せて運び、其前には親衛兵進む。兩側には日本人

數千顔を伏せ、ダイロ通過の際は之を禮拜す。

内裏の大鹵簿

ダイロの輿の後には二頭の馬の牽引せる馬車従ふ。馬の頭は美しき羽毛を以て飾り、眞珠及金剛石を以て刺繡せる飾馬具を着け、二人の馬丁手綱を執りて之を牽く。馬と馬車との間に行く者二人、一人は大なる扇を持ち絶えず空気を動かして涼を送り、一人は大なる傘を持てり。

此馬車(内に内裏の配偶の座せる)に次ぎて、二十輛以上の馬車來る。各一輪車にして、同數の馬之を牽く。馬は手綱によりて牽かる。此中なるはダイロの嬪なり。絹窓を通して外を見るべく、馬車の隅々までも透明なるこみダイロの車に同じ。女官なご多數之に侍す。又ダイロの従者も從へり。凡て華麗なる服裝なれば頗る美觀たり。

前記の開きたる中庭の兩側には數個の宮殿あり。諸種の建築の風を採れり。皆華麗にして技藝の能を盡せるもの如し。若し新に之を建築せんせば、一エムペロールの收入以上の費を要するならん。

内裏の庖厨

背後にはダイロの庖厨あり。日に百種以上の食物を調理し、此處より後宮と庭園との間をダイロに運ぶ。庖厨は大にして、従事の官吏も多く、食卓費毎年黄金幾噸を要す。

爽快なる庭園

此等の背後に非常に快き庭園ありて、高き壁を以て圍まる。處々に廣き室を有する大塔數個あり。中に圓形の宮殿あり、高き樓閣を有し、最も觀者を喜ばす。樹は整然として列植せられ、花卉は數多の花床に植ゑらる。其自然、財力及技術の最善を併せたる様、古詩人の歌へるテッサリアの有名なる殿堂竝にアドニスの花園にも超越すべきかと思は

る。

内裏の宮廷

此等の豪華なる建物及愉快なる庭園の中にダイロの住殿あり。數個の屋背天に冲するの勢ありて、石壁を繞らし、飾るに多くの畫像を以てせり。入口は廣き銅の階段十五級なり。最下の兩側に同形の番所二個を設く。其番所は兩つながら方形にして、大なる戸及數個の廣き窓あり、壁は美しく彩られ居れり。屋背は壁の四方に於て突出し、上方に向ひて漸次に小くなり、鍍金の板金を以て蔽ひ、黄金の球を以て飾るこゝ例の如し。

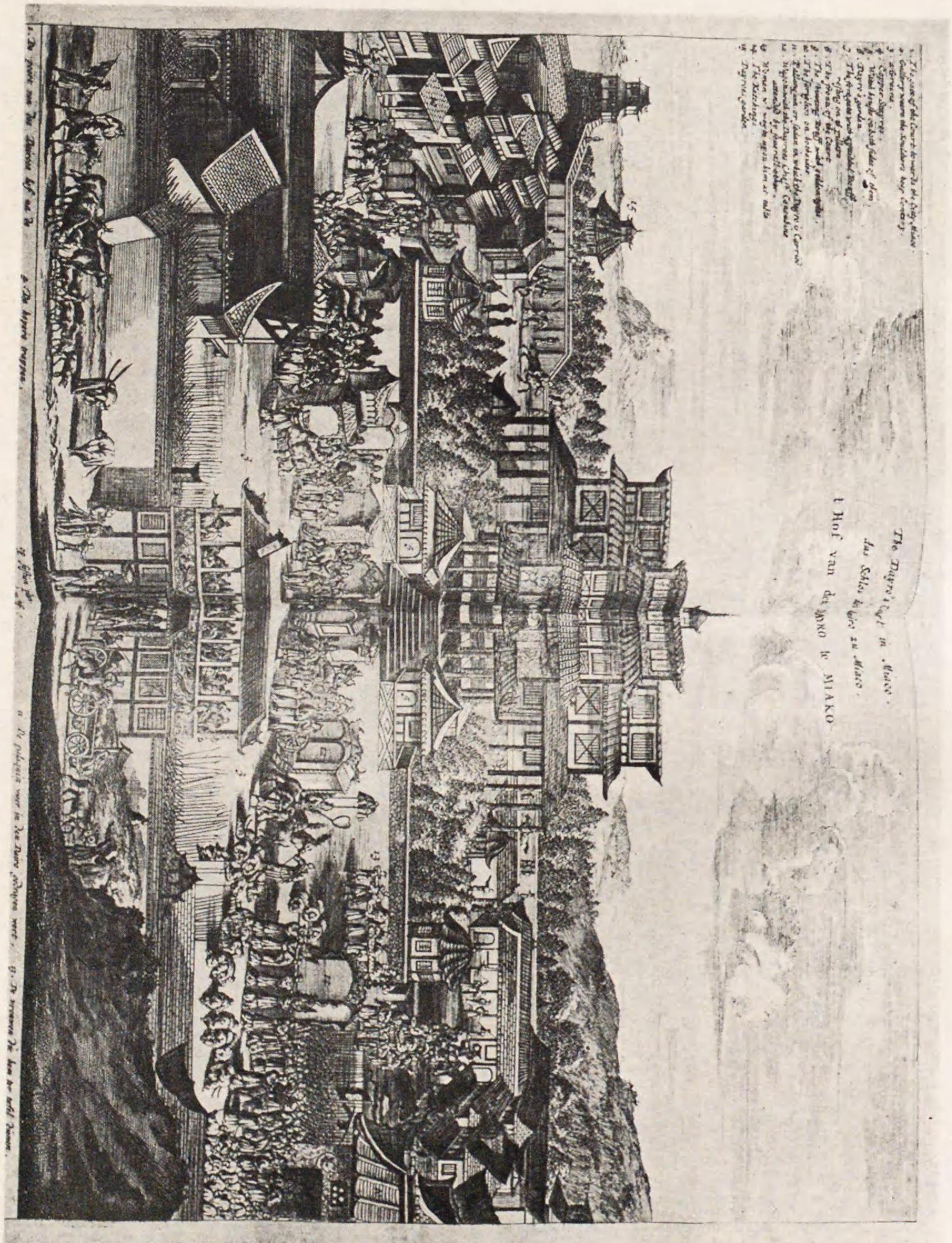
此番所に接してダイロの私園あり、特殊の壁を以て圍む。其隅に八角の饗宴室あり。此屋背は天蓋の如く、鋭き尖塔を以て終る。此庭園の快適なるこゝ言語に絶せり。

高價なる玄關

宮殿につきて記せば、前記銅の階段の最上部に玄關見ゆ。各側に八個の壯麗なる圓柱を以て支へ、黄金の板を以て蔽ひ、巧に彫刻せらる。中央の屋背は他のものよりも稍突出す。此中央部も亦模様を以て飾らる。穹窿は各隅に美しき鍍金を施し、頗る華麗なり。床は磨きたる大理石を以て被ひ、硝子の如くに輝けり。此玄關の後には高く廣き中堂見ゆ。其敷石の密なるこゝ觀者の眼を驚かす。

宮殿の前面

此に宮殿接続す。其破風は凡ての他の建物より多く突出す。其門は廣く、兩側に大なる方形の柱ありて、數個の像を刻す。門に連接せる壁には諸種の果實を刻し、鍍金の屋背を以て蔽へり。屋端は黄金の球を以て飾り、殊に各隅には二個の臥龍あり。第一の屋背の上に第二階あり。十六の柱の上に安んず。其床の上には廣間五室あり、各室の前面に



内裏の宮廷

五個の二重窓あり。其最上部は突出せる屋背の下に蔽はれ、其屋隅には總鍍金の臥龍あり。此上に第三階あり。其中
央には廣き高き窓あり、各側には尙一箇あり。中央の區別せらるるは頂の圓きこころなり。此階の屋背は方形の塔を以
て終る。此塔は又一の屋背を以て蔽はれ、其端は斗出し、精巧の細工を施さる。頂には鋭き尖塔あり。

黄金葺の屋背

又正面の左右兩側には美しく輝ける屋背あり。宮殿の前に黄金の板を以て蔽へる十本の大圓柱の上に作られたるもの
にして、此屋瓦は黄金の厚き板なり。此屋背は第二階の最下窓に接續せり。

内裏の廣堂

此等の金屋の後にダイロ住居の稍低き廣堂あり。其壯麗なる様筆紙に上すべからず。窓は最も精巧なる絹を以て蔽ひ、
壁は印度風に漆し、床は大理石を鋪き、其上に蓆を敷く。高價なるこ共に亦精巧なるものなり。
此廣間の上なる第二階に又同様の作方なる數室あり。屋背は正面に出づるもの如くには遠く突出せず。窓は無裝飾
なるが如し。其左右には最低の屋背多くの金球を以て飾らる。上階は他よりも低く、平板なる屋背を以て被はれ、多
くの大にして便宜なる室を有す。

エムペロルの内裏訪問

日本のエムペロルは百十六リーグの路を六年毎に都に來りて、ダイロに敬意を表す。其通過に先ちて道路の修繕等萬
端の準備をなして、大君主及其一行の爲に差支へ無きやうにすべきことを各地方に布達す。皇帝を迎接すべき處とし
て二十八個處を指定し、内二十個處の城なるは安全を期してなり。

和蘭東印度會社より日本エムペロルに派遣せられたるコンラート・クラメル (Conraeth Cranner) は一六二六年エムペロ

ルの都に上りし時恰も同地に在りしが其記す所下の如し。

エムペロルは都のダイロを訪問せんて大行列の準備に忙しかりしにも拘らず、和蘭の使節には公の謁見を許可せられたり。之に反して暹羅及葡國の使節は拒絶せられ、此恩典に浴する能はざりき。是に於てクラメル卿はエムペロル及首班の閣員に數回の訪問をなしたる後、出發の許可を得、平戸に歸らんこせしに、恰も同島の君主カクシモン殿 (Cacuyndononne) エムペロルの宮廷に仕へ居りしが、止りてエムペロルのダイロに朝覲する壯大なる行列及儀式を見んこを勸告せられしを以て、其言に従へり。

此くて使節クラメルは夕方一行全部を率ゐてエムペロルの宮殿に近き或人の家に赴けり。爰はエムペロル及ダイロが翌日通過すべき途に當りたれば、其處に立ちて之を見んが爲に借入れたるなり。十月二十日の事なりしが、其從員が借賃につきて談判し居る間に、群集は既に場處を得んが爲に殺到し來り、時を経るに隨ひて益々多數となり、使節は到底宿處に歸り難し見れば、終夜此處に止れり。翌朝早く街路は無數の人を以て填りたり。エムペロルミダイロミの兩宮廷間の街上には白き砂を布き、兩側には柵を作り、エムペロル及ダイロの兵士警戒せり。兵士は白き衣服を着、黒蠟を塗れる冠物を被り、各二口の刀及長柄 (Fangane) を稱する槍を以て武装せり。此等の警戒者は群集の間を往來して車馬の通過すべき路を掃除するに忙し。人々は二日前より國內の津々浦々より集り來りて樓敷に上り、終夜寒天の下に在りて、翌日エムペロルの通過を見んこ待てり。凡ての窓及屋背は巾を以て被はれ、見物人を以て充滿せり。

エムペロル内裏參訪の時の偉大なる儀式

翌日拂曉行列は動き始めたり。第一に通過せしは多くの乗物を運べるエムペロル及ダイロの僕隸にして、ダイロの紋章を打てる方形の蠟塗の箱に入れたる贈品をエムペロルの宮殿に運べるなり。警固の人之に添へり。此後には四十六個の白木の輿來れり。高さ一尋ばかりの銅板を嵌込み、巧に色されるものなり。是れダイロの諸嬪御に附屬せる官女を運ぶものにして、毎箇四人を以て昇けり。其通過し終るや、黒塗鍍金せる二十一の輿之に従へり。亦四人肩にて之を昇けり。此等の官女は艶裝して威儀端然と座したり。之に次ぎて二十七の大なる輿來れり。昇者合せて百八人なり。之に従へる使丁は白き制服を着て、同數なり。此等の輿は鍍金の戸及窓を有して、見る目も美しく、ダイロの宮廷に屬せる貴族を載す。各輿前には丈高き青年あり、黄金の刺繡を施せる白絹の傘を持てり。

内裏の貴族の服装 裝飾せる馬

其次には騎馬隊來れり。馬上の貴族二十四人より成る。頭上には黒き羽毛飾を有する小き黒蠟塗の帽を着け、上衣の袖は廣し。股引は最良の縞子を用ひ、長く狭く、各種の色をなし、金銀の華美なる刺繡をなせり。脇には鍍金せる劍及弓矢を懸け、腰には針細工の巾を纏ひ、其總を附けたる縁飾は馬の兩側に懸れり。靴は黒色にして金の横線を繞せり。彼等は勇ましく良馬に跨りたるが、其馬は小頭、短耳、瘡せられきも引締りたる體を有し、其最も劣等の者も歐洲の誇りとする肥大にして勇氣ある馬に越ゆるが如く見えたり。鞍は全部鍍金し或は鼠塗にして、座は金銀の刺繡をなし、或は虎皮を擴けたり。鬘は絹、金、銀の紐を以て組めるここ我が國のその如し。腰及臀に附せる飾物は總の付きたる深紅の網細工にして、風につれて動搖せり。額には黄金の角あり、我が描ける一角獸の如し。靴は鐵を用ひずして編みたる絹を用ひ、蹺音を立てざらしむ。馬一頭に二人の馬丁を附す。麻布の大傘のトを赤き布もて被ひ、其周圍に絹の縁を取りたるを前に運びて、馬體を被ふの用に供せり。尙馬に附せる八人の扈從ありて、凡て揃の白衣を着し、刀二口を横へたり。斯くの如き供廻りにてダイロの宮殿よりエムペロルの宮殿まで秩序を亂さず進行せり。

盛装せる馬車

其次には三輛の立派なる馬車續けり。赤き絹の網を被へる二頭の黒牛之を牽き、揃の白衣を着けたる歩者四人之を導けり。此等の馬車は高さ各四尋、長さ二尋、幅一尋なり。蠟畫を以て飾り、金を以て瑤瑤の彩色を施せり。各側に三個の窓、前方には二個ありて、立派なる帷を垂る。後方の入口は王公の宮殿の如くに開き、各側に上るべき階段を備ふ。窓は下方に於て黒蠟を以て隈取らる。車輪の圓形部には鍍金し、輻は巧に曲けられ、又金及青貝を鏤め、其動く時は日光を反射して鏡の如く、新奇にして且壯麗なる觀を呈せり。

此等の馬車寧ろ塔と謂ふべきものはダイロの主なる嬪御を載せたるものにして、一輛七萬テールを算せらる。扈從の人々は白衣を着け、其人員多數に上れり。各鍍金の足臺及蠟塗上履一足を携へたり。

此扈從の外に特に三人の主嬪及二十三箇の輿に乗りて從へる貴婦人の一列あり。其輿は白木造りに銅の板金を嵌めたり。貴婦人一人ごごに傘一本、二人の扈從、輿を運ぶ倔強の男四人あり。

内裏の廷臣

此等が過ぎ終れば第二の騎馬隊現る。ダイロの主要なる紳士にして、騎馬姿勇ましく、全身武装せり。馬は美に於て前者と争ふに足る。二騎つつ相並びて進み、從士、奴僕、僮及槍兵を合せて大なる行列をなせり。

贈呈品

次は贈呈品にして、地方の貴族數人正装して之を運べり。第一は二口の鍍金の刀にして、櫛頭、柄、櫛、全部黄金を以て作れり。次に彼等の間に甚だ重ぜらるる巧妙なる鳥銃一挺、次に日本に於ては珍品たる日時計の黄金及眞珠を以て飾れるもの一個、次に黄金の燭臺二臺、次に黒檀の大柱二本、次に同樹を以て作り四隅に黄金を嵌めたる方形の卓子

三脚、次に机三脚、次に黄金製の大皿二面に一對の蠟塗の靴を添へたり。

老若エムペロルの馬車

第二の騎馬隊過ぐれば、更に二輛の馬車來れり。同様の大きなれども、華麗に於ては前者に優れり。頂上にエムペロルの紋章黄金の板に鑄込まれ、周圍に飾文あり。

第一の車にはエムペロル左大臣源秀忠座し、他の車には世子即ち右大臣源家光座せり。八十人の王侯二列をなし、徒歩して車前に進めり。凡て武勇の人にして、劍及短槍を以て武装せり。是れエムペロルの親兵にして、日本人は之をサブライミ稱せり。エムペロルの車前に八人進めるが、黒檀の杖及鋼鐵の官杖を以て路を掃へり。美しき装具を着けたる良馬二頭、馬車の前に牽かれ、其周りに八人の射手ありて、槍及弓矢を持てり。

エムペロルの扈從

次にエムペロルの兄弟及日本の諸王公及貴族、騎馬にて秩序整然として從へり。其數百六十四人あり。前者の如き衣服にて、武装も同様なれども、門地と資格とによりて稍華麗なり。此等大官の主なるものは尾張守様、紀伊大納言様、水戸中納言様などにして、皆エムペロルの弟なり。次には松平ツイケスノカミ様 (Matsudeyro Thuyquesnocammi Sanma) (ランガ (Langa) 大侯)、松平陸奥様 (薩摩侯)、松平ヨシ殿 (Matsudeyro Jondonne)、松平下野殿、松平近衛中將、最後には駿河の大納言守様 (エムペロルの長子) なり。此等十卿はエムペロルの車の直後に騎馬にて從ひ、各從臣、扈從、槍兵を伴へり。

他の諸卿は二人づつ並びて隨へるが、首席の者は左側に在り。日本にては左を尙めばなり。エムペロルの閣員の主席たる大炊殿 (Quway domne) 及其子雅樂殿 (Wouta-domne) は指定せられたる先頭なり。白衣を着けたるもの四百人之に從

次に六輛の新しき車來り。其大さは前者の半にも及ばず、一頭の牛之を牽きたれども、美麗なるを失はず。是には地位低きエムペロルの妾姫座せり。乗馬隊六十八人之に従ひ、多くの従僕を伴へり。尙一輛の車あり。ダイロの祕書長の乗れるものにして、貴紳三十七人乗馬にて之に従へり。次には輿にてダイロの大官數人を運ぶ。其中十五臺は象牙を嵌めたる黒檀を以て作り、十三臺は黒蠟及黄金を以て耀き、又十八臺は黒蠟を塗りて凡て鏡の如く光れり。其次に四十六の鍍金せる車 (caroches) に乗れる人々其従者と共に輿に従へり。其後に無言劇の如く假装したるもの五十四人來り。是れダイロの樂隊にして、諸種の樂器を鳴らせり。笛、小鼓、鑼鼓、鈴及其他我等の知らざる有絃樂器若干あり。

内裏の乘輿

此等の愉快なる青年に次ぎて、ダイロ其人來り、大なる方形の建物の中に座せるが、其建物は四隅に引戸即ち窓を装置せり。頂上には鍍金の球ありて、其上には翼を張りたる金鷄を載せたり。この移動する家屋は高さ九尺にして、各側ともに彫刻模様を以て飾り、四隅は純金の板金を打ち、其屋背は天を摸して日月星辰を圖せり。エムペロルの貴族五十人、長き白衣及蠟塗の冠を着け、長き棒を以て支へたる此移動宮殿を運べり。貴紳四十人、古代の希臘、羅馬の如き服裝をなし、歐風の胄及石突に鍍金したる槍を以て武裝せるもの、片手には矢を插みたる楯を持ち、各傘をさしかけられて歩行せり。是れダイロの親兵なり。其後には又蠟塗の箱十三箇あり、轎夫之を運べり。最後に六人づつ列を作りて秩序正しく進行せる白衣の人四百あり。此を行列の最終とす。

内裏通去後の大混亂

ダイロの行列の通過し終るまでには夕方となりぬ。各種の人は無數に群集し、棧敷も家屋も觀衆を以て充滿したるが、今しも一時に街上に雪崩れ出づるや、爰に混雜を生じ、爲に死者を出したり。多數の人は前後より推されて倒され、起つ能はずして他の蹂躪するに儘せられ、叫喚の聲凄まじし。騎馬の人は無理に群集を分けて道を開き、兩側の人を踐倒して流血街上に淋漓たり。此騷擾中に竊盜及剽賊あり。刀を揮ひて道を開き、財囊を切取り、抵抗する者あれば之を殺したり。之が爲に亦多くの死者を出したが、後より來る者は之を知らず死屍を踐みて其上を行けり。此くても後より推し來る者愈々多く、折重なりて倒れ、人の山を築ける處も少からず。上に在るものは幸なれど、下なるものは到底起つべき期無し。騒がしき音は終夜引續きしが、終に亂暴は頂點に達し、身分ある人にして群集の中を脱する能はず、又は殆ど其家に入らんとして、兇漢に襲はれて凌辱を受け、又殺害せられしもあり。多數の例の中、平戸侯の顧問は其僕に持たせたる貴重品の箱を奪はれしが、賊に抗して奮闘せる間に目前其箱を取去られしこなきもあり。

蘭使の脱厄

使節コンラド・クラメールは棧敷より此くの如き亂暴狼籍の行はるるを目撃し、終夜其處に止るここの不安全にして、翌朝までには自身並に一行も失はるるならんと思ひたれば、險を冒して群集の中に入りしが、路上人々に推されて恰も負はれたるが如く、足の地につくこゝに殆ど無かりき。幸にも神恩にて一同さしたる損傷無く旅館に引揚げたり。

内裏の受饗

ダイロに諸妻は三日三夜エムペロルの宮殿に滞在し、エムペロル兄弟及諸王公に冊かれたり。ダイロに進めし膳部は毎食百四十種に及び、王侯大官其給仕に従ひたり。

饗宴終りて、年少のエムペロルはダイロに次の品を献上せり。即ち銀三千枚（一枚は四テール三マース）、黄金の板を以て蔽へる美麗なる卓子二脚、日本の外套二百着、細工を施せる繻子三百片、生絹一萬二千ポンド、カロンバック (calombac) の一大片、麝香の入れる大銀壺五個、鞍鐙を皆具せる良馬十頭なり。然れども老エムペロルの献上品は遙に少し。斯くの如くにして凱旋行列の榮光は終りたり。

日本人は都をカブコマ (Cabucoma) と稱し、上下二區に分てり。下京はツツミ (Tuzumi) の岩まで擴がり、家並も宜しく、其一列は一屋の如く見ゆ。長さは少くも三哩あり。

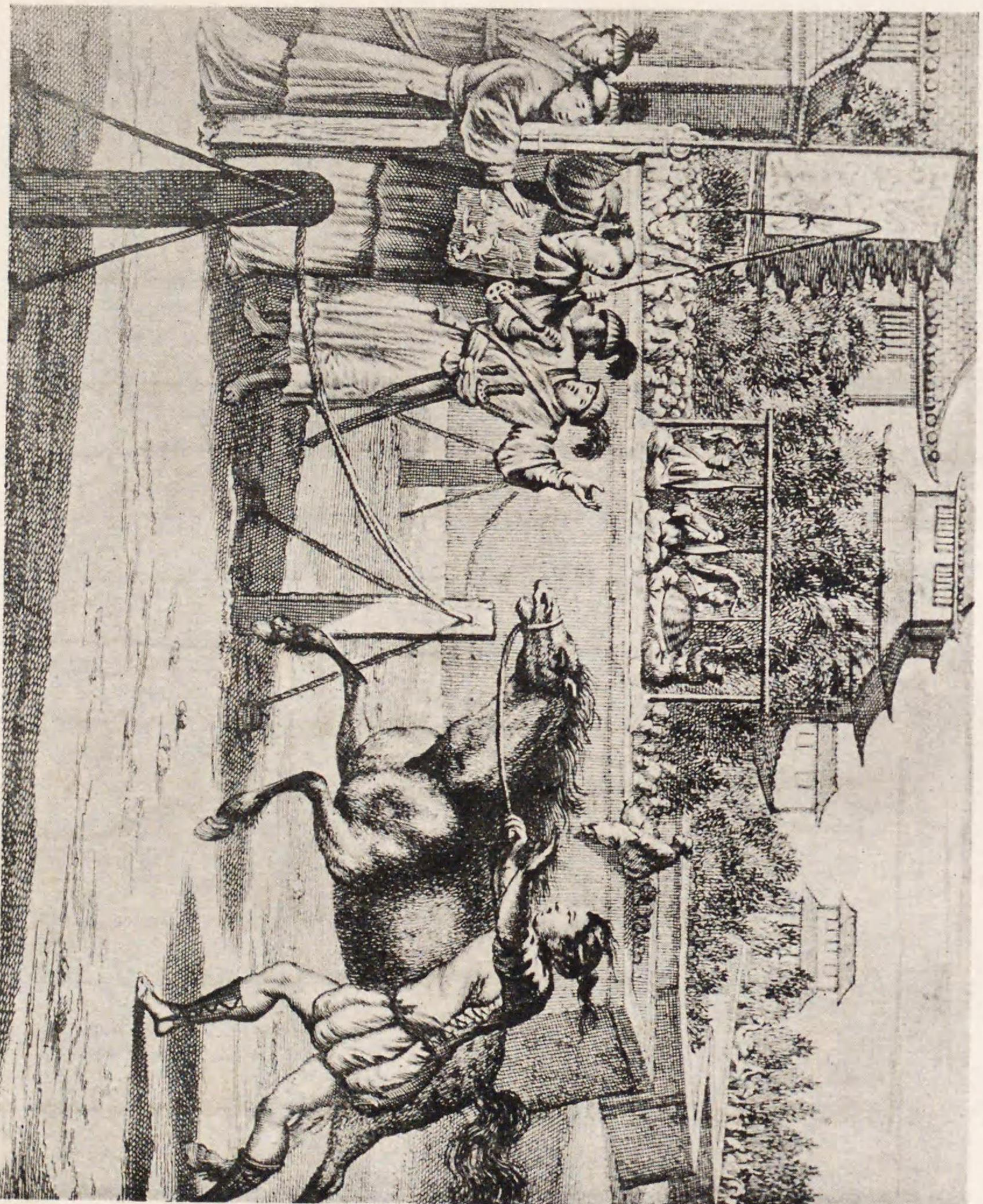
太閤様の美殿

ダイロの居處は上京に在り。此處に亦エムペロル太閤様が一五八六年に建てし瑰麗燦爛の美を極めたる宮殿もあり。周圍に千枚の蓆を懸けたるが、其蓆は金を以て加工せる精巧なる鍛子を以て縁を取れるものなり。或室の壁は全部金板を以て張詰めたるもあり。宮殿の大部分は珍しき木と高價なる大理石とを以て作られたり。宮殿の前には廣き中庭あり。此處にはエムペロルの劇場ありて、悲劇及喜劇演ぜらる。

日本人は演劇に得意

演劇は日本人の甚だ得意とする所なり。彼等の言ふが如く、此國は良詩人に乏しからず、其題目は神或は道德に關し、脚色も甚だよく出來居れり。喜劇は勸善懲惡主義にして、悲劇は古の高僧又は英雄の偉大にして而も不幸なる行爲を仕組む。舞臺は場面の變るゝ共に異なる背景を以て飾る。幕間には樂人の合奏あり、各種の樂器を以て古代の希臘、羅馬人の如く唱歌し且奏樂す。然れども此劇場以外には演劇を観する處無し。

人馬の競走



人馬の競走技

大閣様の此宮殿の前に人馬の競争をなすべき空地あり。壁の周りには數千の見物人立ち、稍高き地に柵を作りて數人の鼓手、足を交叉して座す。柵の上には銅の鑼鼓及銅盤あり。其二三は地上にも在り。力を籠めて之を打つ。其騒しく鋭きこゝ人耳を聳すべし。此競技場の端に二本の強き柱ありて、其一方より他方に太き繩を渡したり。此背後に稍隔りて四角の杭あり、其上には竿頭に結びたる旗翻れり。一人左手を以て柱を抱き、右手は第二人の胸を指す。後者は頸より胸にかけて方形の板を懸く。其板には怪獸を描けり。同人は又右手を杭頂の上に置き、左手を我が刀の上に支ふ。彼の次に第三者あり。横に向きて立つ、彼は右手に節繁き長鞭を持ち、競争者に合圖をなす。此三人の背後に羽毛飾を附けたる黒帽を戴ける人々立てり。是れ審判者なり。此競争の賞品は大抵銀張の木履に固着せる蠟塗の長靴二足さす。走るものは薄き絹衣を着く。胴までは縁を取り、袖は臂に達す。袴は廣く、上腿の中程にて之を締めた。脚には絹の半長靴を穿てり。準備成れば鼓手は合圖の鼓を打つ。競争者は人馬ともに出發す。人は馬を保つに一筋の延されたる手綱を以てす。彼は全速力を以て走る。此時馬を手綱にて牽き又停むべからず。此くて到着點即ち前記の柱及繩に近づくや、馬も人も一齊に之を跳越えざるべからず。兩者ともに之を巧に爲したる者は賞品を受く。若し失敗すれば、勝利の榮譽を失ふのみならず、亦宮中の寵遇をも失ふ。

内裏に對する崇敬 内亂の慘害の甚しき所以

ダイロは日本の唯一、眞正、合法的の世嗣なり。往古は國人の尊敬を受けて、神に崇められたる程なり。此尊敬により彼は一五五〇年まで長く日本を平穩無事に統治し居たり。ダイロの統治間は日本は内亂の辛苦を嘗めざりき。然るに其位を退くや、内亂倏ちに起りて其慘害は他國に比類を見ざる程なりき。勝利者は戰敗者を待遇するこゝ残酷にして、之を殲滅するに當りて嬰兒をも假借せず、都市村落を破壊燒盡す。或地は今日までも當時の破壊のままに存し、

五十年以上日本を棄したる内亂の暴威を證明せり。
其起源に溯らん、さしも神聖させられたるダイロは、百十八年前に二子ありて、第二子は古代の法律に従ひ、元帥として不逞の徒を討伐するの任に當りたり。兄はダイロの崩後は之を繼承すべきなれども、其生存中は何等の權力をも有せず。母后は兄弟兩人に對する愛情よりダイロを説きて、統帥權を三年毎に交替して兄弟に分擔せしめんせり。然るに弟は任を兄に譲るべき時期となりても之を譲るを欲せず、陰に日本の諸王公を語らひて自ら助け、父をすら恐れざるまでに至れり。是に於て父は他の將軍を選び、背叛の子を服従せしむるのみならず、之を殺すこゝをも委任し、直に叛軍を平定せり。

内裏に對する謀叛

是れダイロに對して行ひたる最初の謀叛なり。然れども戦争は王子の死を以て熄止せざりき。勝利を得たる將軍はダイロの崩後自ら日本のエムペロルミなれり。

若きダイロは之に抗し、公方ミ稱する將軍を擧げ、新帝を破りて之を殺せり。

此新勝の將軍は前者の覆轍に鑑みず、又帝位を覬覦せり。

是より残酷なる戦争續き、國は國ミ、市は市ミ戦ふのみならず、小村落に至るまで互に相争ひ、其敗者を取扱ふこゝも残忍にして、市邑の灰燼ミなれるもの到る處に生じたり。

三好殿、公方に叛く 公方の死

新公方は終に勝利を獲て、自らエムペロルの位に上りたり。されども在位は短き間なりき。彼が自ら最も安泰なりき

考へ、謀叛なきは夢想せざりし時、彼の腹心ミ信じたる三好殿は奈良侯彈正殿(Dajonono. 松永久秀)ミ通じて謀叛し、二萬の軍を率ゐて都に近づけり。其後直に三好殿はエムペロルより受けたる恩寵を謝する爲なりミ號して、有力なる親兵を率ゐて都に入れり。而して何等の騷擾無くして窃にエムペロルの生命を奪はんミの目的を以て、都に近き一僧院の饗宴に招待し、彼の無道なる計畫を實行せんミせり。然れどもエムペロルたる公方は陰謀を覺りて脱走の準備をなししに、途にして二三の閣員之を制止して引返さしめたり。彼等は此事より起るべき危険を覺らず、ただエムペロルが臣下より脱走せんミするは卑劣なりミ謂へり。

然るに其中三好殿は軍を率ゐて都に入り、宮殿に迫りしが、彼は敵對行爲に出づるに先ち、彼の妨害ミなるべき貴族の首を送らんミを公方に要求し、然る上は直に和を講じて軍を京外に退くべしミ云へり。使者は三好殿の除かんミ欲する貴族の名を記したる書面を持來れり。此を受取る爲に公方より遣はされし老宮内官は、之を手にするや否や引裂き、公方の面前に立歸りて、腹を切りて公方の足下に倒れたり。

此時同様に自殺するもの尙六人あり。かの老宮内官の子は父の血に塗れたるを見るや、俄に敵人の中に走り入り、數人を殺傷して、其身も亦殺されたり。

此間に三好殿は宮殿の四處に火を放ちしかば、公方は燒かれて亡びんよりは寧ろ劍にて死せんミて、母の止むるを肯かず、二百の兵を率ゐて力戦せしものち、重傷を被るこゝミ三箇處にして死せり。従士も奮闘して敵を殺ししかき、終に皆命を致せり。

最も注目すべきは未だ成人の域に入らざる一少年の行爲ミす。彼は敵兵數人を殺傷して一軍を驚かしし後、エムペロルの死骸の處に赴き、悲哀に堪へず次の語にて衷情を語れり。曰く、我君は憎むべき叛逆者に弑せられぬ。予は何し

て生存すべき。予は予の名譽、主君の愛、予の忠節の爲に爲し得る限りを仕遂けたり。此言終るや、劍を棄てて短劍を執り、自ら咽喉を切りしが、其致命傷たるにも拘らず、死を早めんが爲に更に自ら心臓を刺したり。

三好殿公方に代る 大虐殺

敵は宮殿の兵火に罹らざる部分を占領し、エムペロルの母及數人の娘を見て皆之を殘殺せり。唯二人のみは哀叫命を乞ひしを以て、之を赦して牢獄に投じたり。敵は次で財寶を奪へり。門閥高き女官等は燒残りたる一室に脱れしが、高聲の悲鳴によりて發見せられ、或は衣服を奪はれ、或は暴行を加へられ、其他は屠殺せられ、涕淚、幼齡、美貌、其他女性に存する何ものも其主を救ふ能はざりき。或は敵の暴手に落ちんよりは、こて自ら火焰に投ぜしもあり。公方の妻は二三の従者と共に脱れて僧院に入りしが、後發覺して亦殺されたり。

此くて宮殿は全く破壊せられ、許多の什寶類も燒失せり。三好殿は彼に抵抗して勇敢に戦ひ爲に味方の兵を失ふこと多かりし二百人を火に投ぜしめ、宮殿と共に灰になしたり。時に僧侶は勝利者に乞ひてエムペロル公方を其寺内に葬れり。

公方の寵臣の奇行

フロクスは日本の一島カンガ(Canga)より一五六年付を以て書きたる書簡中に云へり。エムペロルの寵を受け居りし一人、彼の不幸を聞き、倉皇都に行きて公方の宮殿の在りし地を見るや、主君を殺害し宮殿を破壊せしかの無慈悲なる叛逆者を罵詈呪詛したる後、エムペロルの葬られたる處に至り切腹して墓上に倒れ、他界に於ける永久の幸福中に彼と共に存せんことを望めり。

公方の姉妹の自殺 幼弟の脱走

公方の遺族としては唯二人の姉妹と二人の息女と生存せり。姉妹は尼になりて寺院に入り、僧侶の救護下に在りしが、猶甚しく迫害せられしかば、失望の極自殺せり。二女子は一市民の許に存在せり。

此外には弟あり、カナドノ・オヤカタ(Canadonus Vajakata)と稱せしが、僧になり居りしを以て殘酷なる殺人者の手を脱したり。然れども彼等殺人者は彼が事を起さんことを恐れて幽屏せしに、彼は脱して和田殿に奔れり。そは既に説けるが如し。

和田殿及信長、エムペロルの幼弟を援く

和田殿は近隣の諸王公、殊に信長を動かし、御館をば公方の後を繼ぐべき最近親として援助せしめ、以てエムペロルの弑逆者に對抗せしめたり。

此重大企畫は首尾克く成功せり。信長は六萬二千の兵を戰場に送りて功を收め、御館は其望を達して全日本の主要なる支配者となりたり。

信長和田殿間の不和 親交復舊

叛逆者の平定後、死せる公方の弟は公方となり、和田殿は軍隊の大部を率ゐて堺に赴き、信長は御館と共に都に上れり。和田殿が堺に在る間、ロドヴィック・フロクスと相交通し、彼の爲に新エムペロル及信長に請ひて曩に追放せられたるエスイト教徒の再び自由に都に還り得るの承認を得たり。然れども此事件は後に至りて和田殿の爲に不利益を來せり。和田殿は有名なる僧ニチオジネス(Nichionnes)とフロクスとの間に日本の宗教及兵法に關する公の討論を行ふことを命じたるに、ニチオジネスは靈魂の不滅に關して議論屈し、面目を失ひたれば、其席に於ては陽に忍耐したれども、陰に和田殿に復讐せんことを伺ふ折しも、和田殿は病に罹りしを以て、此機會を利用し、かの僧は信長に謁し

和田殿を讒訴せり。此目的の爲に彼は數名の證人を作り、此等を腐敗せしめて自己の言を確證せしめたり。信長は此讒訴を信じて舊友を憎むに至り、和田殿の病の恢復するを待ちて之を宮中より逐ひ、歳入二萬デユカットを減せり。和田殿は一年間彼方此方を漂浪して僧侶等の侮蔑を受けしが、終にエムペロル及信長に調すること許され、辯疏の結果故の待遇に復せしのみならず、曩に奪はれたる歳入二萬デユカットの外に一萬デユカットを加賜せられたり。

和田殿池田城主と戦ふ

されど和田殿が此歳入を享受せしは短く、池田(Ikenada)の城主との間に事を生じて戦死せり。

信長エムペロル間の不和 信長都を荒掠す、上京の火災

此間にエムペロルと信長とは不和となり。信長は常に己が功に誇り、我無かりせばエムペロルも位に登ることを得ざりしならん云ひ、エムペロルは亦其驕慢に堪へ得ず、又事毎に信長の干渉を受くることを嫌へり。此不平は終に破裂し、エムペロルは兵士を招集して信長に對抗せんせり。彼は事の速に決定すべきを思ひ、殊に信長が當時尾張に在りしを好機とせり。然るに信長はエムペロルの開戦準備を聞くや、之に匹敵する程の大軍を集め、直に都に向ひて進發せり。彼は口に謙辭を以て平和を請ひ協商の條件を提供しながら、エムペロルの領地在々處々を劍火もて破壊し、短き間に數百の村落及多數の市を灰燼に歸したり。エムペロルは信長の提言を御け、専ら豫て約束せし軍隊の力に信賴せしかば、信長は益々激怒し、終に都を荒掠して之を占領し、婦女小兒までも赦すこと無からんことを決心せり。彼の第一の復讐は貴族の多く住せる上京に加へられんことを。貴族等は信長の怒を和けて劫掠を停められんが爲に巨額の金を

提供せり。然れども信長は之を御け、下京には暴行すべからざることを軍中に嚴令したれども、上京は亂暴勝手たるべきことを宣せり。

然るに信長の軍未だ都に近づかざるに、多くの隠謀者ありて火を市内の各地に放ち、信長の來るに先ち、恣に劫掠して自ら富まんこし、此くて一夜の中に上京の三分の一を灰燼とせり。信長は習日入來りて殘部を破壊せり。

此兵燹により少くも家屋八千、僧院二十亡び、有名なる阿彌陀及釋迦の殿堂二字及他の小堂八十字焼失せり。

僧侶の焼死

此等の堂宇中に偶像ダルブド(Dalbud)を祀れる一殿堂再建の爲に都にて勸財せし僧侶五十人、該堂に集りて難を避け居りしが、悉く火中に死したり。

イズムの奇像

下京は此破壊を免れたり。信長は犯す者は死に處すべしとて之を禁じたれば、一兵も敢て入るもの無かりしなり。されど上京の一角の火の下京に近づくと、下京なるイズム(Izum)の殿堂の守僧其偶像につきて懸念し初めたり。此偶像は死者の靈を刑罰の場に案内し、此處にて火の爲に清淨にせられたる後、其靈を阿彌陀の準備せる幸福の地に伴ふを以て職させるものなり。此像は見るから恐しき姿し、右手には三叉を持ち、さて憂慮焦心せる僧は此像に向ひて火災が此殿堂に及ぶべきか、若し及べば他に移轉すべきかを答へんことを乞ひしが、像の動かざる容貌によりて移さるることを肯ずるものご想ひ、俄に其準備をなし、盛儀を以て上京の一部火災より遠き處に移したり。信長は上京の各地を焼きたる後、イズムをも焼き拂へり。其殿堂は下京に在りて神の加護無かりしかば、信長の容赦せしによりて火災を免れたり。

エムペロル信長に攻圍せらる 媾和

エムペロルは高塔に上りて恐るべき殘虐を見しが、尙新銳の兵の來援すべきことを豫期し、之によりて復讐せんことを決心し居たり。然るに未だ何等の援助も來らざるに、信長の兵公方の第を圍むことを急なりしを以て、終に平和條件に聽くことになれり。信長は公方の位を其正當に屬すべきダイロに返還すべしと威嚇したり。

終に媾和條約は調印せられしに、エムペロルの權力と名譽とは尠からざる毀損を受けた。双方より身分ある人を出して質し、以て此條約を確定したれども、エムペロルは約束の援兵の來るや、倏ち之を破棄したり。

信長自らエムペロルとなる

然れども此援軍の來りしは偶々エムペロルの破滅の因みなれり。信長は平和條約の破棄を憤り、全軍を率ゐて都に入りて新來の軍を破り、エムペロルを捕へ、自らエムペロルの尊位に上れり。此戰勝の爲に信長は三十王國を得たり。時に一五七二年なり。

然れども信長が公方の地に上るや、以前のエムペロルよりも寧ろ一層大なる困難に遭へり。初め彼を好しめて彼の爲に力を致しし者も、彼が戴冠式にてなしし、人民を保護し、慈愛ある父母たらんことを誓言を守らず、妄に人民の膏血を絞る、専制權力によりて虐政を施し、己が意思を法律となし、又自ら神ならんことをするの野心あるを見て、彼を嫌忌するに至りたり。彼が自像に王冠を戴かしめしことは既に記したるが如し。

僧侶殺戮の爲に民望を失ふ

人民の中に最も憤れるは僧なり。僧は彼の爲に甚しく惱まされたればなり。其中主なる二例を下に擧ぐべし。

奇異なる殿堂及修道院

都の東二リーグに當りて高き斷崖を有する比叡山(Frenojama)あり。八百年以前に日本の王が此地に三千八百の殿堂を建て、各堂に僧の住むべき修道院を附設したり。彼等は専念に神に仕へ、學に勤め得る爲に、農夫及家畜を其地より退去せしめ、如何なる音響も心を亂さざらんことを欲したり。此比叡山の麓に二村を建て、上下の坂本(Sacomotum)と稱し、僧侶は此村より日々食料を運びたり。彼等は近江の王國の歳入の三分の一を經費とすることを許されぬ。此等の建物は漸く壯麗を増し、又エムペロルの親族の一人少くも王子一人は此處に在り、是によりて僧院は有名となり、種々の重大事件は此等の僧によりて決定せられたり。宗教に關する討論も此大學に行はれ、又凡ての學者も此處にて修業するに至れり。

僧侶の暴行 信長の攻伐 僧侶鑿殺せらる

然れども時の移るに従ひ、殊に戰爭の爲に、山上の殿堂の數は八百に減ぜり。僧の生活も放縱を極め横暴となり、屢々經卷を擲ちて武器を執れり。終に彼等は一五三五年には日本人の神として尊崇するダイロをも意せずして都を襲ひ、全市を一炬に附したるこゝあり。彼等は火災を脱せる者を殺せしのみならず、力無き嬰兒にも及べり。

此蠻行は長く復讐せられざりしが、三十六年を経て十分なる報償を得たり。信長は越前(Zechen)王との間に大戰爭起るや、僧は越前王に兵糧其他の必需品を供給し、信長に對しては其通路を杜ぎしかば、信長は之を憎みて復讐せんことを。彼は之が爲に尾張に歸り、彼が此國に王たるの故を以て、領内の僧を悉く其住處より逐ひ、見出し得る限り磔刑に處せり。

然れども未だ満足するに至らず、新に兵を擧げて比叡山の方に行進せり。僧は抵抗する力無く、和議を講ぜんが爲に巨額の金を提供したれども、信長は彼等に對して憤怒甚しく、之を受けずして進軍を續けたり。是に於て僧は同山の神

聖なるこゝ竝に多年汚されざりし神の威徳を尊崇すべきことを説きたれど、信長は僧の金を提供せんことを嘲罵し、又彼は多くの無道を働き來れる輩の崇拜する神を恐れず、一層大なる力の助によりて彼等と交渉すべしと答へたれば、僧も今は止むを得ず力の及ぶ限り抵抗せんことを決せり。

此の山頂に阿彌陀の子観音に捧けたる殿堂あり。此像は三十の腕及手を有し、各二本の矢を握れり。顔は美しき青年にして、胸上に七個の面あり。金冠を頂き、之に眞珠、金剛石、其他の寶石を鑲めたり。

國人の各地より参詣する者多し。此像を禮すれば幸福なる長き生活を與ふと信ずればなり。

毎年一回祭事あり。其日参詣者の多きこと言ふもおろかなり。

大阪にも観音の像あれど、日本人は同一の神を同形に作らぬ習慣ありて、容貌全く之を異れり。

扱僧侶の防禦陣地は此観音堂に近き山頂なるが、此地に兵を執り得るものを集中し、全力を擧げて防戦の用意せり。信長は上下の坂本村を焼きて敵の糧道を絶ち、炎滔天を焦すの勢なりし時、彼は先づ下路を塞ぎて僧の逃れ得ざるやうにし、次で攻撃に着手せり。僧は暫く防禦したれども、終に力屈して陣地を敵に奪はれたり。是に於て信長の軍は洪水の如く迅速に斬入りしかば、劍を脱れし僧は殿堂内に焼かれ、山の谷陰なごに隠れたる者は搜し出されて屠られぬ。然れども此殺戮は未だ信長を甘心せしめず、後間も無く四百の殿堂、修道院、大學ももに焦土となれり。時に一五七一年なり。

新教派の叛立

之を終へたる後、信長は都の方に進み、此市を越えて十五哩に在る有名の僧タキエノ・ウェビサミ殿 (Takiyano Vebis-amidono) を襲へり。彼は釋迦の爲に新教派を建て、之が爲に妻を捨て、習慣に従ひて髪を剃り、四百人の學生を有



三十一 觀音像

し。其教育の爲に自己の資を捨てて壯大なる大學を建て、人民の間に敬愛せられ居たり。彼は之を誇りて御館の前に於て信長を罵り、彼は高きを望めども頓ては腐れたる梨の如く落つべし云へり。信長は之を忿りて叡山征定の歸途之を襲ひたるなり。エムペロルは之を止めんことを説きたれども、肯かすして彼及其一族を屠殺し、修道院を破壊し、彼の妻子を追放したり。されど信長は未だ此を以て満足せざりき。

有名なるハクサンギン學校

彼は有名なる學校ハクサンギン(Facsangin)に注目し居れり。是れ佛僧の司る所に係り、六百年間平和に所有せるものなり。此學校には多くの修道院附屬し、住院者千人に及べり。信長何かの口實を構へて之を破壊せんを欲せしが、終に之を見出したるなり。

信長ハクサンギンを攻め住僧を殺す

或時賊ありて尾張を劫掠し、其捕獲物をハクサンギン僧に持ち行きしことあり。彼は此機會を捉へたり。彼は差當りて従事せること無く、エムペロルとの間も平和なる時なりしかば、彼の腹愈には適當なる時なりを考へたり。是に於て突然ハクサンギンを襲ひ、佛僧を殺し、火を放ちて建物の大半を焼きたり。時は一五七三年にして彼がエムペロルとなりしと同年なり。

斯くの如き信長の行爲は、其エムペロルとなりし時、僧侶の反對を買ひたる所以なるが、中にも甲斐國(Cai no chuno)の王信玄は最も激昂したり。信玄は父を逐ひ、兄を幽し、自ら王位に登りたるものにして、正當なる權利を缺けるが故に、彼の地位を強固にすべき方法を採用したり。即ち彼は法衣を以て王衣とし、彼の笏を神聖化し、頭及髻を剃りて僧籍に入り、凡ての儀式及宗教上の勤を行ひ、常に六百の僧を随へたり。此評判は諸地方に弘まり、日本人は王が

僧となりて勤行し、而も一日三回に及べるを見るや、彼こそは動搖せる教會を再建し、衰微せる教法を古代の隆盛に復すべき人なれし信じ、各地より彼の宮殿に集り來る者多かりしが、彼は聲言して比叡山の殿堂寺院を復興し、有名なる觀音の殿堂をも再建せん云へり。

此等の約束及美しき口實は俗耳に入り易かりき。彼は又祖先が日本に殖民せし以來困りて以て平和に暮したりし其純粹の古き宗教を力説確立して、かの釋迦其人にも超越せんこと誇り居れり。

彼の事業は準備せられ、彼の基礎は固められたり。彼の賞嘆者は各地に於て自己及城砦を提供し、彼の指揮に従ひて生命財産をも抛たん云へり。彼は俄に有力となりて、恰もエムペロルの如き觀あり。信長は彼の勢力の日に増大するを見、又信玄自身よりの書簡によりて少からず心を動かせり。彼は其書に自署してタインヂノ・タスサモン・信玄(ainino Taxuxamon Xinguen) 云へり。諸王の王、凡ての宗教の管長信玄の義なり。信長は此書に答へ、署名してダインキン・テンノマウオン・信長(Dainquin Tennomavon Nobunanga) 云へり。魔の大指揮者、漂浪せる靈の總大將信長の義なり。

明智 羽柴

信玄の外には武人たる明智あり。又信長の將軍の中には首位の指揮者羽柴あり。

羽柴の名は信長が彼に與へたるものにて、それは彼が山口王に對してエムペロルの有力なる軍隊を率ゐて進發せし時のことなり。其時彼は新しき名を與へんことを信長に請ひしかば、信長は之を聽し、從來藤吉郎(Togukino) 稱せしを改めて羽柴と稱せしめたり。森の上に飛べよ云ふ義にして、是によりて彼の成功を祈りたるなり。彼が對抗せんことする山口王は名を毛利殿といひ、其初の綴は即ち森の義にして、終の綴は君の義なり。即ち信長は新將軍が敵に勝ちて

森の上を鳥の如く飛ばんことを欲せしなり。

羽柴藤吉郎の生立 盜賊の嫌疑を被る 自ら無罪を證す 奉行

職となる 將軍となる

此羽柴、前名藤吉郎は極めて低き家より出でたる人にして、農家の僕なりき。彼は附近の山より木を切出して家に運ぶを業とし居りしが、山は嶮岨にして石多かりしかば、艱苦多かりき。主人は日々多量の燃料を費したが、或時通常使用するより以上を用ひしに、藤吉郎は之を見て火中より薪の幾分を取出して残れる木を秩序よくし、少量にして大なる熱を發するやうにしたり。主人は此工夫を見て感じ入り、此僕が己の僕たるよりは尙他の大なる事に用ひられ得べきを知り、彼を釋放して金を給し、戰爭又は他の場合に於て好運を求めんことを勧めたり。

これより藤吉郎は自ら持するこゝ高く、都に赴きて一巨商に事へたる後、信長の寵臣たる或貴族の目に止りたり。該貴族は一日信長に従ひて鷹狩に行きしに、藤吉郎も鷹匠及他の僕隸中に在りしが、其時最良の一羽の鷹獲物に向ひて飛行ししに、高き樹の枝に絡まれて引掛りぬ。何人も之を救ふ爲に登り得るもの無かりしが、藤吉郎の主人彼に命ぜしに、彼は敏捷巧妙に之を果ししを以て人々皆之に感じ、殊に信長は彼を擢んでて臣とし、頗に地位を進めて之を重用せり。餘人は彼が主君の寵遇を受くるを妬み、之を滅さんことを圖れり。恰も此時金版を張りたる美しき刀、信長の宮中より紛失せしが、例の妬者等は藤吉郎之を賞美して注目し居たれば、彼之を盗みたるに相違なしと噂せしかば、彼の友人は彼をして其身を隠さしめたり。彼は此言に従ひて逃じせしが、彼の敵は之を好機に推察誤無きもの爲し了りたり。エムペロルも之を捕へて相當の刑に處せんこと、頗に搜索せり。藤吉郎は逮捕の上極刑に處せられんことを恐れながら、窃に金工の許を歴訪して紛失の金版に似たるものを買ふが如く粧ひてありし間に、偶然紛失の金版

を發見せり。彼は宮廷に仕へたるこゝにて、權力を以て之を購へる者を威嚇せしに、やがて實を得て終に賣人を知り、それより更に轉じて盜賊を探り當てたり。彼は此賊を宮中に伴ひ行きしかば、即時に晴天白日の人となり、且處刑者たるの名譽を與へられ、賊の首を金版をエムペロルの足下に獻じたれば、エムペロルは彼を寵するこゝ初に優して、愈々重く登用せしかば、前に彼を誣陥せし者は案外の思をなすに至れり。

藤吉郎は終に一奉行となりしが、彼の事務を處理するこゝ穩健にして細心、大に部下の敬愛賞賛を得たり。これより位地愈々上れり。

信長エムペロルとなりし後、或堅固なる一城ありて彼に抗したれども、久しく之を陥すこゝ能はざりしが、彼藤吉郎の材幹を思ひ、一隊の兵に將こして該城を圍ましめたり。藤吉郎は多く勞せずして之を陥れ、用兵の術に長じたるを示せり。

羽柴、山口侯を征服す 柴田を亡す

此成功に力を得たる信長は、彼を派遣して山口の王と戦はしめしに、大なる困難無く之を征服せり。斯くて彼は信長の主要なる部將たりしが、信長の都にて害に逢ふや、彼は年甫めて三歳なる其第三子を奉じて、保護者の權力を握れり。信長の長子は父と共に害せられ、第二子は出奔したるなり。

死せるエムペロルの妻の弟なる柴田殿(Kibutodono)は信長の遺族中最近の親縁なりしが、藤吉郎の所爲に快からず、力を極めて彼に抵抗したり。是に於て藤吉郎は柴田殿を滅さんとして居城を圍みしに、柴田殿は突然攻撃を受けて免るべからざるを知り、悉く將士を會して曰く「卿等は予の窮境を知らん。予は殘虐なる暴主に屈せんよりは、寧ろ自殺せんす。予の願ふ所は、予が死したる後卿等が予を火葬するに方り、不人情なる版亂者をして誇らしむべき何物をも

残さざるやうに爲しくるこゝなり。卿等は生命を保たんが爲に如何なる談合をなすも可なり」云。然れども満座の者柴田殿の決心を賛して、皆其例に倣はんこ決心せり。

柴田殿は彼等の忠義に感じ、此世の別として盛宴を張り、食卓上には種々の肴を具へ、有る限りの樂器を鳴らし、彼等の好める茶及酒を飲みかはし、かくて饗應も閑なる頃、彼等は起ちて各種の燃焼物を室に満たし、之に火を放ちたれば、焔烟屋を貫きたり。是に於て殘酷なる饗宴始り、柴田殿は先づ妻子、僕婢を刺殺し、或は重傷を負はしめしかば、彼の諸將も之に倣ひて同様に親族從者を殺せり。次に彼等は此等の死體を火中に投じ、其上に立ちながら切腹して果てたり。

時に藤吉郎は城中に火炎の起りたるを見て、偶然の失火ならんと思ひ、好機を逸せじと總攻撃を命ぜしに、門をひひ城壁をいひ何等の戦備も抵抗もなく、唯未だ焼け終らざる數個の死體を見たるのみ。

* * * * *

藤吉郎は柴田殿の城を陥れて都に歸るや、最初名の藤吉郎のみならず羽柴の名をも改めて、關白殿即ち日本の最上卿と稱し、一五九四年以後は太閤様と名乗れり。即ち大エムペロルの義なり。

太閤様の政略

彼は全島を絶對的服従の下に致したりしかぎ、尙將來不都合の生ぜざるやう警戒を怠らざりき。彼の配下に在る諸王の中、數人は以前のエムペロルの血統に屬するものにて、彼の如き出身の低きものには容易に服従を肯せず。若し一朝事を起して彼に抗せんか、之に響應するものを生じて、新に築ける基礎及政府組織の動搖を來し、之が爲に瓦解するに至らんも測り難し。之を防がんが爲に彼は周到なる用意をなせり。思へらく、諸王公をして外國にて時を費し、

且勇氣を示さしめ、以て彼等を忙殺せしむるこも最も萬全の策なり。而して此目的を果さんが爲に隣邦朝鮮は彼に適當なる機會を與へたり。

* * * * *

太閤様大軍を以て朝鮮を征す 戦争七年に亙る

一五九五年太閤様は新募の軍隊を朝鮮に派遣せり。此は有力なる諸王が合同して彼の高位を覬覦するの憂を除かんとするの意志なれども、揚言して曰く、日本は朝鮮を併合するによりて富むべく、斯くの如き重大なる事件も容易に行ひ得べし。朝鮮の如き國五國ありこも之を征服するに足る兵力を作るを得べければなり。是に於て彼の最も畏怖せる諸王はエムペロルに招集せられエムペロルは彼等に與ふるに種々の命令を以てし、六萬の兵共朝鮮に赴かしめたり。斯くて朝鮮に上陸するや、彼等は豫期以上の仕事なるを發見し、爲に戦争は長く繼續せり。其間太閤様は諸王に友誼的の書翰を贈り、又新鮮なる供給品を送りたれども、彼等の國及妻子も永く離れて敵地に在り、且何時歸るべき望も無き在外諸王の心を慰むる能はざりき。固より何人もエムペロルの允許無きに歸國せんも企つる者は無かりしなり。

フィリッピン島

太閤様は朝鮮ご事を構へたる間にも、眼を他の重大事件に轉じ居たり。彼は其治世の始に西班牙王の總督にしてマニラ市に政廳を有せるフィリッピンの太守に宛てて一書を贈れり。カスチル人は一五六四年此島を發見し、大なる困難も無く之を占領せり。元來支那に附屬したりし住民は其管轄を離れ、爾來何等の法律もなく、粗野の生活を送り居たればなり。但し支那は其支配力を失ひたれども、島の地味は豊饒なるを以て、支那人は尙此地に在り、年々戒克船二十隻又は以上を送りて、綿、絹、陶器、硫黄、鐵、銅、水銀、火藥、麻布等も水牛、鹿皮、麝香猫等この物々交換を行

ひ居たり。

フィ島太守に贈れる太閤様の書翰

太閤様の書翰の主旨は次の如し。日本は久しく戦亂の中に在りしが、神は彼をして十年の艱苦の後王位に即かしめ、茲に初めて平穩なれり。彼は今や閑暇あり、支那を襲はんごす。若し我を指揮者として承認し、恭敬本分を盡さば、日本軍より損害を受くるこも無かるべけれご、若し然らざるごきは、軍を派してフィリッピンを占領し、住民を殲滅すべしご。

フィリッピンの太守は此書を見て驚愕せり。彼は太閤様の勢力、誇負、野心を熟知し居たれば、若し生存せんごせば、之に對して敬意を以て答ふるの外無しご思ひ、ルボ・デ・リアノ (Lupo de Llano) を遣して答へしめて曰く、フィリッピンの太守は閣下の書に接手したれご、閣下手づからの署名無きを以て、彼の置かんご欲するが如き信任を置く能はず。殊に(彼ご相交通せる)在長崎のエスト教徒より何等の報告をも贈り來らざるが故に、一層然りご。

此書簡は日本のエムペロルに不快の念を與へたるのみならず、之を驚かすご少からざりき。何ごなればエスト派が日本に於ける公私の事件の報告に價あるものを海外の本部に通報し居るごごを知りたればなり。エムペロルの不興は薩摩に在るカスチルの背教者によりて愈々挑發せられたり。彼はエムペロルに暗示して曰く、エスト教徒は長くエムペロルの命に服従する者にあらず、彼等は宗教を日本に輸入し、先づ諸王侯を誘發して叛亂を起さしめ、終にはエムペロルを易置し、全國民を西班牙王の治下に屬せしめんごすご。

フィ島より太閤様への再度の遣使 フランシスカン派日本に教會を建つ

是に於て太閤様はフィリッピン太守に更に命令的の書簡を贈りしが、難船の爲に到着せざりき。然れども太守は之を聞きて一五九三年更に第二の使節を送れり。委任を受けたる者の長はペーテル・ゴンサルヴェス (Peter Gonsalves) にして、他に補助員としてフランシスカン派の僧四人 (バルトロメウ・ルイズ、フランシスコ・デ・サンクト・ミハエル、ペーテル・バプチスタ、ゴンザレス・ガルシア) あり。使節は太閤様に謁して高價なる獻品をなししかば、之が爲に太閤様も心解け、都の近傍に一の會堂を僧院を建つるの許可を與へたり。其條件としては宗教上の事につきて、公私とも一切日本の臣民に干渉し又は勸説すべからずの事なりき。彼等は之を守ることを約束し、一年にして會堂を建て、之をポルチウクラ (Portimula) のマリアに獻ぜり。然れども彼等は私に、時には公に、改宗者を作るに努力し、宗義は暫時にして日本人の間に弘通するに至り、人々熱心に群集し來りて、四人にては改宗及洗禮に關する儀式を行ふを得ざる程なり。之によりて彼等は補助員を送らんことをマニラに請求せしかば、直に四人 (アウグスチン、ロドリゴ、マルセロ・リバデネーラ、ヒエロニモ・デ・エーズ) のフランシスカン僧を送り來れり。同時に彼等はフィリッピンの太守よりの書簡及獻品を齎ししが、太閤様は獻品を喜びて受けたれども、書簡は快しませざりき。彼の書簡に答ふる所無かりしが故なり。

ペーテル・バプチスタ (Peter Baptista) は宗教を弘布するに最も力めしが、彼等は更に大阪に一の僧院を建て、之をベツレヘムと命名せり。

彼等は尙進みて都の奉行より長崎にも第三の僧院を建つるの許可を得たり。ペーテル・バプチスタ外一名に病ありて、大阪の氣候は身體に適せず、健康の爲に移轉するの必要ありきの理由なりき。二人は都の近傍、二箇の貧民院の間に在るラザルスの禮拜堂に住したり。此處に市より多くの人群集して、彼等が彌撒を修するを見、又彼等の議論を聴けり。

日本の一貴族聖母派を立つ

此人々の中にヂダクス・ゴンノイ (Didacus Gonnoi) と稱する貴族あり。直に羅馬教を信じてマカワ (Macawa) 市に近き領内に於て之を奨励したり。彼は同志に資金を給して一の大學を建て、之を聖母に獻ぜり。彼は又福音を聴く爲に不信者を招きたり。

太閤様が日本に外僧を在住せしめたる理由

太閤様はフィリッピンより日本に派遣せられたる僧の事業に關しては恰も見て見ざるが如くせしに似たり。何となれば此島よりは年々大なる歳入を收め、各種の珍品を獲たればなり。珍品の中にポイオニ (Poim) と稱せらるる壺あり。是れ同地に於ては廉價に得らるべけれど、日本に於ては黄金以上に重要視せらるるものなり。蓋し茶を混ぜられたる飲料を保存するは此壺に若くものなきを以てなり。貴族は此飲料を調するに、特に其目的の爲に作れる其家の一室に於て自己の手を以てす。

茶壺の買入

太閤様はフィリッピンに其部下二人を派遣して、此種の壺を凡て買入れしが、是れ之によりて大なる利益を得んが爲なり。されど此二人はマニラ市にて日本の基督教者數名が此種の容器を日本にて販賣する目的を以て買ひ居たるを見たり。太閤様は之を聞きて其人々を捕へ、其集めたる壺を盡く没收し、今後之を彼の領内に持來ることを禁止し、此禁を破らば死に處せんを申渡したり。彼等は漸く生命を助けられて放免せられぬ。

太閤様其諸甥を高官に陞らしむ

太閤様は朝鮮を戦ふに先ち、自身に子無かりしを以て、同胞の子を進めて顯職及名譽を與へたり。長子を彼の繼嗣とし、五國の王とし、第二子を都に近き三國の王とし、最少者を二國の王とし、而して自ら十五國を取りて之を領し居たり。他の國は宮内官、將軍及近親に分與し、年々の貢賦を奉らしめたり。他の動かされざりし諸王公は租税を以て壓迫せられ、之に反抗もなし得ず、何時生命其他を失はれんも知れず憂ひ居たり。

征韓の起志

此くの如きは彼の豫ての計畫なりき。朝鮮出兵の目的は、全く同地に赴く王をして自ら破滅せしむるか、少くも爲すべき仕事ありて、彼等が太閤様の領内を攪亂せざらんが爲なりしなり。若し彼等が朝鮮に勝たば、其征服の領土を彼等に分與して、彼自身は本國の上に絶對の支配者たらんこせり。

自己の權力を抛たんこ揚言す

彼は何人も此計畫を察知するこ無からしめんが爲に、自ら政務より退き、エムペロルの權力を二十五歳の甥に與へんこ揚言せり。是に於て彼は甥を關白殿に指名したり。此稱號は唯繼嗣たるべき人にのみ與へ得べきものなり。然れども是れ方便に過ぎずして彼を後嗣に指名はしたれども、實權を捨てんこせず又捨てざりき。

日本軍朝鮮に趣く 支那兵朝鮮人を援く 日本人を退く

然るに朝鮮に派遣せられたる諸王公中には、太閤様が彼等の破滅の目的の爲に此企をなせしこを覺る者無く、皆喜びて海外に出でたり。初は六萬人なりしが、更に十四萬人を増兵せり。彼等は上陸するや、破竹の勢を以て首府平壤及同島の大部分を奪ひしが、朝鮮兵は絶えず新加せる支那兵の援助を得て屢々日本兵を撃退し、六年間結果不明の戰爭を繼續したる後、日本兵は其上陸地に退くに至りたり。彼等は此上陸點に於て十二個の充員十分なる城砦より屢々攻撃し

來る敵兵の爲に痛く惱まされ、不面目なる媾和を結ぶの止むなきに至り、朝鮮に於ける凡ての攻略を放棄したり。戰爭は太閤様の財帑を涸渇せしめ、十萬の兵士を失ひ、其中には第二の甥もありき。最年少の甥は既に死せり。

關白殿日本にて暴虐の行をなす

關白殿となりたる最年長の甥は尙生存せしが、才智ありて敏捷なれども非常に残忍の性質なりき。彼の最大の娛樂は人の屠殺場に於て人を殺すこなり。彼は此屠殺場を宮殿附近の或地域に於て開きたる中庭の中央に作り、壁を以て圍み、白砂を敷き、一脚の卓子を置き、若し罪人無き時は、何人にもあれ彼の不興に觸れたるか、又は其死狀を見んこ欲する者を彼の出來心の儘に其上に置き、彼の唯一の快樂、主なる休養を初む。彼は巧妙なる裝置を以て一罪人を卓上に据ゑ、然る後腹を割くに速には生命を絶たず、血の流出によりて末期に近づくを見るや、彼の殘虐心を樂しましむる爲に其首を切落す。又は他の罪人を柱の上に縛して之を動かぬ様にし、次に弓矢及數挺の銃を執りて射撃するに、致死の傷を負はぬやうに彼處此處を狙ひ、其彈丸及箭の脚又は腿に入りて大に苦しむを見たる後、彼の愉快を加ふる爲に胸及腹を射、其死に近づくや、此悲劇を終極するが爲に彈丸を以て頭を射る。然るに男子にては残忍性を満足せしめ得ざる時あり。是に於て彼の快樂を新にせんが爲に妊婦を取り、生ながら之を解剖して胎内の嬰兒を見、人間の發成及生誕に關する自然の實驗室の觀察をなす。蓋し如何なる虐政者の行ひたる處刑といふこも、彼の所爲に過ぎたるは無し。以て残忍なる屠殺者の王と稱すべし。

關白殿太閤様間の不和

然れども此無道なる怪物は長くは其位に在るを得ざりき。伯父の太閤様は彼を世嗣と定めたれども、多くの場合に於て其愛は俄に憎惡に變じたり。關白殿は名はエムペロルなれども、實權は全く太閤様の手に在り。而して若きエムペ

ロルを圍繞せる寵臣及阿諛者は、虚器を擁する彼が人々の嘲を受けて「帝國を有たざるエムペロル」と呼ばれることを暗示し、或は曰く、太閤様が彼を二回までも朝鮮に赴かしめんことをせしは、其處にて殺さるるか、又は久しく外戦に従事せる間に本國に於ける彼の勢力を失はしめんの目的たりしことは、盲者も雖も之を見るを得と云ひ、又或者は此島（朝鮮）のみならず、支那をも征服し得べければ、其地のエムペロルもなれど勸むるもありき。然れども朝鮮事件は不成功に終り、凡ての計畫は水泡に歸したり。

太閤様老年に至りて一子を擧ぐ

關白殿の恐怖及疑念は日一日に増し來れり。殊に次の如きは最も烈しく之を刺衝するものなりき。太閤様は子無く、彼を以て繼嗣としたるに、今や一子生れ、國を擧げて之を祝せり。此子は父の死後帝國を支配することとなるべければ、關白殿は之が爲に痛く心を傷めたり。殊に彼の愛したる三子をして彼の下に帝國内に於ける主要なる指揮を行はしめんを豫定せるに、今や彼の希望は夢消せしかば、彼は目前の救済方法として、かの幼児が太閤様の胤にあらずこの説を流布せしめしに、太閤様は此風説が甥の所作なるを知るや、彼の憎惡は愈々強くなれり。

エムペロル退隱時の奇習 日本人の饗應法

此く兩者互に猜疑する間に、太閤様が日本の習慣に従ひて關白殿を訪問すべき時至れり。主權者が老を以て任意に權威を他人に譲りて退隱する時は、彼のみならず部下の諸王も新支配者を訪問すること、是れ古來の慣例なり。但し此訪問は巨大の費用を要し、頗る壯麗なる行事なれば、今之を記すべし。エムペロルは行列の準備をなし、甥は饗應の用意をなせり。獵夫を各地の林野に派して鳥獸を索め、漁者を湖海河沼に遣はして魚類を獵せしむること、數千人に及べり。

日本人は食事の時は前後に列び、兩脚を交叉して地上に座す。各人の卓子は一種特別のものにして方形をなし、高さ一呎半、生計の如何により多少の價を異にす。或は鏡の如く白き輝きたる木にて作り、或は美しき漆塗し、或は印度風の蠟塗し、或は金を象眼す。普通の正餐又は最初の配膳に於ては各人に三卓を具し、鍍金したる皿に諸種の食品を盛る。最後の膳には三卓を出し、酒杯の味をよくする爲に鹽肉を多くす。エムペロルの宴會にては盃(Sacansuchi)を稱せらるる大なる金の碗を持ち巡り、それにて王公に飲酒を勸む。

關白殿は此宴會に列する男女の爲に此等の卓三萬を準備せり。但し婦人は男子の見えぬ所の別室に着座する定なり。一方に於ては太閤様は先例に従へる關白訪問の準備に忙しかりき。

太閤様旅行を中止す

然るに一有力者あり、竊にエムペロルに告げて曰く、此豪華なる迎接準備にはエムペロルの破滅の爲にせる秘密の計畫ありき。此警告は太閤様を動かし、彼は當日の訪問を延期せしかば、關白殿は之を怨みたり。萬般の支度を整へ居りしに皆無効となり、費用を無益にせしのみならず、尙其陰には或秘密の宿することを疑ひたればなり。

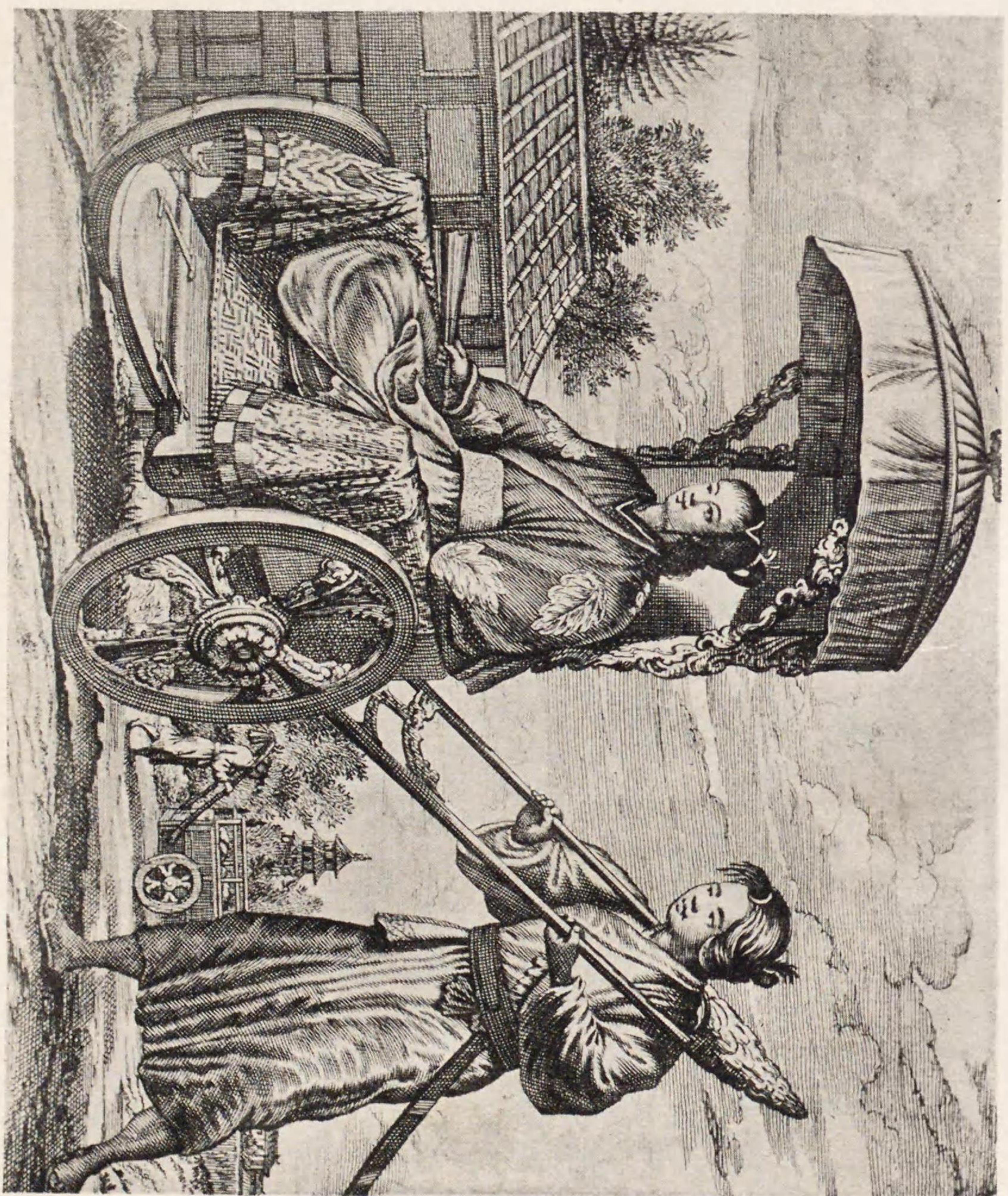
然れども彼は巧に其間に處し、猜疑又は不満の氣色を見さず、大に謙遜の態度を執りしを以て、太閤様の決心も變じ、初の指定の日より八日後れて往訪すべき沙汰あり。蓋し若し行かざれば、彼の意地悪しきことを表すべく、又該饗宴に集るべき諸王公との同席を蔑視するの誹あればなり。

關白殿を訪問す 政所様の大函簿

太閤様は先づ其妻政所様(Mandocorosama)を遣はせり。政所様は當時都を距る二三哩の伏見(Fushima)に住したり。其行列は豪華なるものなりき。その前には多數の貴族秩序を整へて進み、其行き過ぐるまでには一時間を要せり。此

等の貴族は其護衛たる數列の銃士を有し、彼等の前に徒歩せしめたり。武器は漆をかけたれば日に輝きて黄金の如し。貴族の後には大なる蠟塗の箱三個運ばれたり。是れ政所様の衣服を納むるものなり。之に次ぎて尙同様のもの五十個來れり。此には官女の衣服を納る。太き遅しき馬十六頭之に次けり。黄金を積み、眞珠の刺繡を施せる駄馬用の衣を以て蔽ひ、羽毛飾は頭上に搖ぎ、其美麗は觀者の目を驚かしたり。此黄金はエムペロル夫妻より若きエムペロルへの慣例的贈品なり。次には勇ましき騎馬隊進めり。宮廷に附屬せる上卿にして其數五十。各三十人の扈從を従へたり。次にキロソル (Chirosols) 卽ち輿八臺、各三十二人にて昇かれたり。内には上位の官女座せり。次で來りしは政所様の輿にて、身分ある人の肩にて昇けり。此輿、寧ろ移動する家は巧なる彫刻を施したり。此彫刻の爲に技術家は大なる名譽を得たるのみならず、其巧妙なるが爲に信じ難きほどの報酬を政所様より賜はりしものなり。此輿中に座せる政所様の姿は何人も見るを得ざれども、自身は見んご欲する何物をも見るを得べし。次に尙百臺の輿従へり。作り方は同様なれども、價値は下れり。此輿には多くの女王たち華美の粧して乘れり。之に隨へる百五十人の官女は皆絹の覆面を被りて馬に乗れり。各多數の從者、一人の馬丁、二頭の馬を伴へり。

最後に全體の行列の後殿として官女數人來り、小き二輪の車に乗れり。圖に示すが如く端は金銀板を以て飾り、杉の輻は彫刻して鍍金し、輪の輪縁亦銅を以て金具す。座席は後方に在りて儀式服を着けたる一人を座せしむべし。絨緞を廣げて其端は車輪との間に垂れたり。前の空處は卵形を成して開けり。乗れる人の上に立派なる天蓋ありて、日光又は雨を防ぐ。又風を防がんご思はば、絞り上げたる幕を引き下すごを得べし。二本の棒ありて、之を推進する車夫の肩に掛れり。此一行列を以て政所様は聚樂 (Uraxu) の筈に入り、關白殿に大なる金塊及他の貴重なる寶石を贈れり。之に對して關白殿も政所に對して貴重なる贈品を上れり。



貴婦人を運ぶ車

太閤様の大行列

翌日太閤様は其居城を出でたり。之に先つこみ少時、日本貴族の大部分は聚樂に赴けり。太閤様の宮殿に聚樂の間
の道路は兵士を以て兩側を護衛したり。兵士は二歩毎に配置せられ、抜刀を持てり。此等の兵士の指揮者はかの殺さ
れたるエムペロール信長の孫にして、其故に正當のエムペロール繼位者たる美濃侯なり。護衛兵の間を身分最も高き人三
百人通過せり。各紋章を附したる楯を前に運ばせ、扈從僕隸を後に打たせたり。之に次ぎて數人の諸侯來れり。或は
太閤様の劍、或は刀、其他の物を捧持せり。次に太閤様壯麗なる車に乗りて來る。其車は黄金數噸を要せしものなり。
四側及中央は名狀し難き圖樣及彫刻を以て飾り、四箇の座席は黄金を以て被へり。車軸、輻、及輪縁は凡て銀なり。
此車を牽くに二頭の牛を以てす。角は鍍金し、身體は寶石を以て刺繡せる紫の布片を以て覆へり。太閤様が牛を用ひ
たるは馬の無きが故にあらず、ダイロの定めたる古來の習慣に従ひたるのみ。ダイロ常に大饗宴に赴く時は、貴族に
護衛せられて牛車に乗りしなり。

此くの如き行列を以て太閤様は都に入れり。此處にて關白殿より派出せられたる紳播千人之を迎へたり。彼等はエム
ペロールの車に近づくと、馬を下れり。太閤様の前驅をなす者も亦然り。此等の人々兩側に分れて相接して立ち、車の
行逢ふべき通路を作る。間もなく關白殿は開放せる車にて現れしが、其車も亦太閤様の車に劣らぬものなり。ダイロ
に關係ある公卿を伴ひ、各公卿は附屬の臣從を隨へたり。

關白殿太閤様に會す

最高地の街上面にて彼等は相近づきて停止し、同時に關白殿は都の總督を派して太閤様の來訪に對し祝詞を述べしめ、
太閤様は丹後侯(Lord of Tango)を遣はして關白殿の使者に答禮せしめたり。兩人は車の間に相逢ひて、各自挨拶をな

し、丹後侯の車は歸れり。此時都の總督は彼の後より叫びて「關白御成、千秋萬歲」(Quabacon Vonari scenscu Banazi)と云へり。之に對して太閤様は車中より高聲に「先へ行かれい、行かれい」(Sachighe icarei icarei)と叫ぶ。

全部の行列聚樂に入る

此儀式終りて、街の一侧を護衛せし諸卿は馬に騎り、關白殿に従ひて聚樂に赴けり。太閤様は暫時停止し、其後秩序整然として進行せり。凡ての嚴肅なる式の終らぬ中に、太陽は一日の旅行を殆ど終へ居たり。

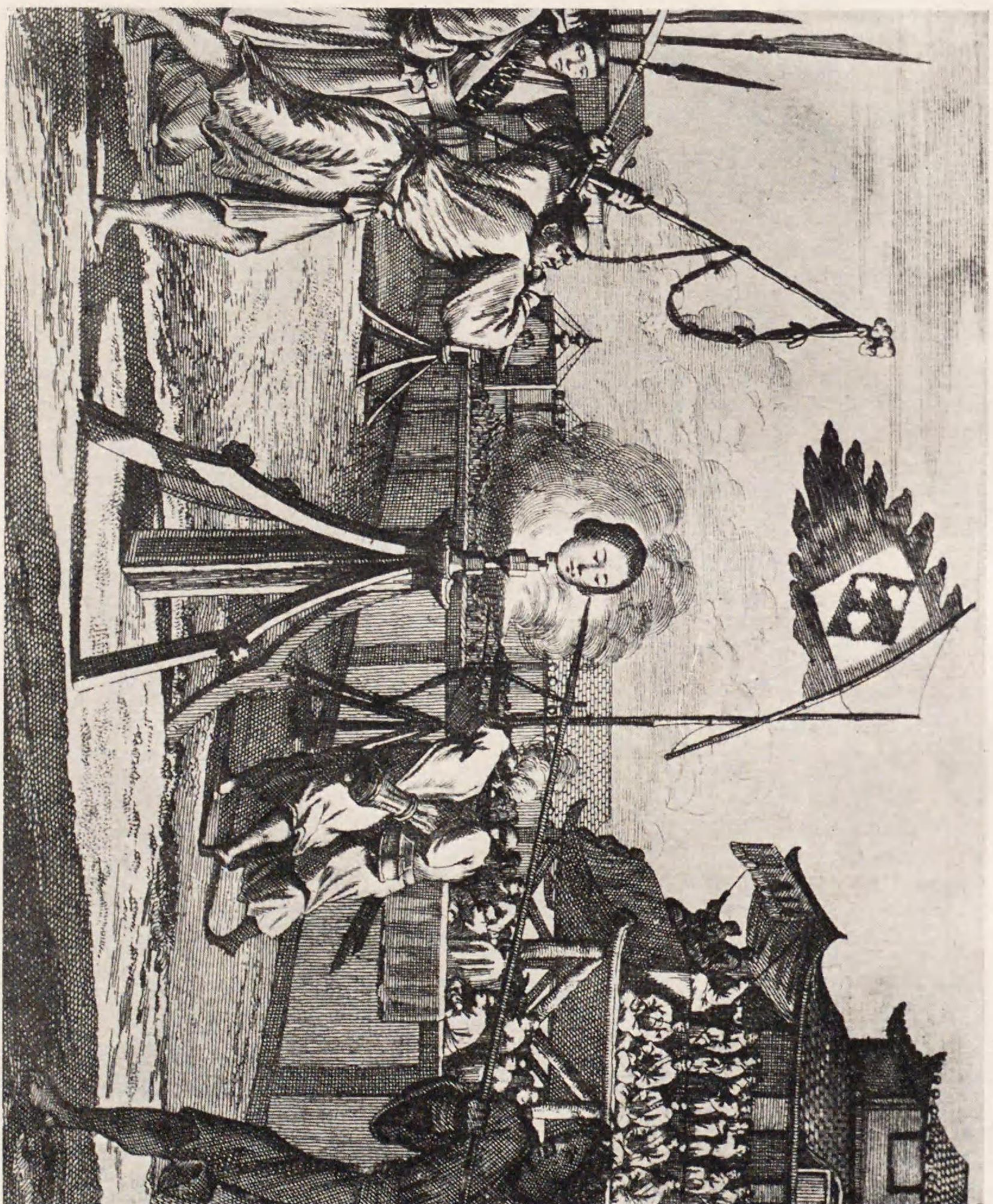
此式の司宰として饗宴につきて萬事を委任せられしは都の奉行玄法印 (Genetoin 前田德善院) なりき。

太閤様は聚樂城の前に至り、橋を渡りて中庭に乘入りし時、凡ての王公之を迎へたり。やがて彼の贈品は關白殿に呈せられしに、關白は其珍重高貴を言明し得ざるが如く見えたり。此恩を謝する爲に彼は許多の貴重品を伯父に獻ぜり。

盛大なる饗宴

此饗宴は三日間引續き、耳目口腹を喜ばすべきものは何物も缺くる所なかりき。海陸空中の供し得る各種の物をば庖丁の工夫し得る精巧を以て調理し、口に快く食慾を誘ひ得るが如くし、食卓は常に珍味を以て充ち滿ちたり。聲樂並に器樂何れの室にも奏せられ、舞臺には日々第一流の優人集りて喜劇を演ぜり。此等の劇は名ある詩人文豪の此場合に應じて作れるものなり。又彫造せる首を打つの遊戯あり、其場には皇帝及貴族も來れり。或は鎗を以てし、或は矛を以てし、或は弓矢又は銃を以て打つ。次の圖に示すが如し。

斯く宴樂の引續く中にも、太閤様は心甚だ樂まず、新なる恐怖と疑惑とに惱まされたり。中には眞實のものもあれど、多くは彼の想像の生みたる陰影に驚きたるものなれば、絶えず己の生命に危險を與ふる陰謀の現れ來らんことを恐れ、



擬人頭を刺撃する遊技

之を防がんが爲に腹心の者をして警戒せしめたり。然れども此老人陽には猜疑の氣色を露さず、隔意なく甥を愛撫し好意を注ぐことを禁じ得ざるが如し。彼の愛は從來の態度にて見るを得べきが、將來も亦渝ること無かるべしと云ひ、尙彼は甥が彼の愛情に厚意に報いんことを確めたり。彼の名譽を害し又は其身に對して危険なる企をなすは、不孝無道之より甚しきこと無ければなりと云へり。

若きエムペロルも伯父に對する表面の辭令及謝意に於て缺くる所無かりき。

二人は胸中の眞意に覆面して假想の首を打つの戲をなしし間に、宮廷及市中にては甥は伯父に對して機あれば覆滅の舉に出づべきことを疑はず、殊に第三夜に於ては隱謀の實行期に入りたりと信じたり。

聚樂に於ける變事

王室の劇場は狹隘にして、貴族、諸王侯すらも遅く來れるは入るを得ず、空しく歸らざるべからざる程なりき。既に入れる者は群集太甚しく、喜劇を樂しむよりは困苦を訴ふるに急なり。よりにて之を緩和する爲に翌日までに廣大なる新劇場を建つべきの命あり、夜間俄に工事に着手し、多數の職工は炬火を持ちて右往左往に奔走し、混雜喧囂を極めしかば、官廷も市中も之が爲に目ざめ、さてこそ事起りたれ、少くもエムペロルの凶事ならんを騒ぎしが、翌朝になりて其誤解消滅し、かの混雜は唯新舞臺の建築の爲なりしこと明瞭となりたり。

此くて此饗宴は無事に終了し、騒ぎこいへば第二夜の誤想の外無かりき。

飛驒殿の盛燕

それより兩エムペロルは其隨行全部と共に日本最大の諸侯たる飛驒殿(Fidurtono 蒲生氏)の宴に招かれしが、是も亦善美を盡したるものにて、皿を被ひたる金箔のみにても四千クラウンを要し、酒宴の費は之よりも遙に多額を要した

り。如何きなればエムペロールに對して飲む酒盃の数は九献にして、第一杯には獻品として一萬クラウンを要し、第二杯よりは漸次上りて、最後は第一杯の倍二萬クラウンとなる。故に饗宴費は殆ど計算すべからず。エムペロールの覺めでたからんせば此費用を惜む能はざるなり。翌日太閤様は亦八州の大守ギエタゾ (Giamo 徳川家康?) の邸に赴き、飛驒殿のそれにも劣らざる饗宴に臨みたり。

伏見に歸還

終に太閤様は伏見に歸りて、關白殿を宴會に招けり。關白殿は指定の日に來りぬ。此處に彼は舞踏及他の勇武なる技藝に於て賞賛を博せしかば、太閤様は愈々之を忌みたり。茲に宮中に信長の甥に當れるゲホニオ (Gehio) あり。太閤様は陰に彼の同じ技藝に於ける熟練を稱して、之を使唆し、關白殿の名譽及賞賛を奪はしめんさせしが、彼は小心にして將來エムペロールの位に上るべしと思へる關白殿の不興を蒙らんことを恐れ、平常よりも拙技を演じたり。太閤様は之を見てゲホニオを傍に召し、今の小心なる舉動を賞し、己は今既に享有せる尊貴の位地に在る父の子が甥の爲に軍隊指揮の口實下に邊陲に追放せらるることを心苦しく思へども、己は伯父信長の恩を思ふが故に、機會あれば卿を身近き職地に移して一國以上の主となすべし。今は好意の徴として米一萬俵を與ふべし云へり。

關白様快々として太閤様に別る 白井備後の派遣

さて關白殿は伏見にて盛なる饗宴を受けたれば、之に報いんが爲に伏見に莊麗なる宮殿を建て、高價なる宴會の準備をなして、太閤様を招けり。太閤様は之を御くるを憚り、病氣を披露して其期を遷延したるに、關白殿は其口實なることを見、快々として聚樂に歸れり。是が爲に彼は伯父に對する不信、自衛の計及伯父の滅亡の念を激成せしかき、之を秘して表にあらはさず、多くの時間を遊戯を觀るに費し、舞踏、擊劍、角力、弓術、練兵等に名あるものの限りを

招きて技を演せしめ、勝利者に恩賞を與へたり。同時に彼は自ら人を屠殺するを樂み、人體解剖の熟練を公に示したるこゝ既記の如し、又日本の諸王公に對しては、其機嫌を買ひ恩寵を加へて人心を收めんさせり。此目的の爲に彼の嬖臣白井備後 (Schibingo 範秀) を各地に遣し、諸王公をして忠義を誓はしめ、其誓書に自署して、關白殿の命あれば、直に時機に應じて兵を出すべしことを承諾せしめたり。第一に九國の王アチロマル (Achionar 毛利輝元?) を説きしが、彼は之を拒絶して「何故に誓ふべきか。予は謀叛の嫌疑を蒙りたるこゝ無し」云へり。然れども他には誓書を出しし者もありて、それらは關白殿の宮中なる老婦人其保管に任じたり。アチロマルは白井備後が關白殿の爲に申出でたるこゝを太閤様に密告せり。

關白殿太閤様の招喚を拒む

太閤様は此計畫を重大事とし、生命の危険迫れりことを考へしかば、それ無く關白殿に對して面談したき事ありて招きたれど、關白殿は危険を慮り、幽鬱症に罹りたりきて、言を卑うして之を辭したり。

五ヶ條の質問

太閤様は五人の寵臣を遣はして五箇條の質問を致さしめたり。第一、病ある者が格別に強健なる者のみの行ひ得べき劇しき運動を行ひ得るは何故ぞ。第二、無辜の臣民を公に殺すはエムペロールの面目に相應しきか。第三、多くの兵士を養ひ、帝國の人民をして何時大變動あらんことを恐れしめ、人心の動搖を來さしむるは何の故ぞ。第四、護衛として銃士千人を増ししは何故ぞ。第五、何故に日本の王侯に強ひて私に忠義を誓はしめたるか。以上の五箇條につきて抗辯の辭あらば之を知らんことを欲すといふ希望を添へたり。

同時に慧敏にして交渉に長ぜる一老女を關白殿の宮廷に遣はして事情を究め、現在の情狀につきて蒐集し得る限りの

調査資料を採訪せしめしが、殊に五箇條の間に關する關白方の申狀に注意すべきことを命じたり。

關白殿の答申

關白殿に質問書を致したる委員は直に回答を得たり。曰く、彼は幽鬱症に悩まされ、醫師の勸告によりて國事を抛ち、病氣恢復の爲に身體の運動に従事せり。罪人の處刑も亦健康の爲にして、彼の手を下したるは凡て重罪人なり。兵士及倍加せる衛兵は戰を爲さんが爲にあらず、帝國の平和を保持し、殊に不平ある人民より何時起らざるかを保し難き叛亂に際して、今老年になれる伯父を防衛せんが爲なり。又最後の諸侯に對して要求せる誓詞は彼等の間に一致を保ち、益々深くエムペロールに心服せしめんことをせらるなり。

委員は曰く、若し之を文書に作りて手署せらるれば、太閤様は此答を以て満足せらるるならん。關白殿は即ち之を作りて、急ぎ太閤様に致せり。太閤様は之を請取りて讀み、高聲に叫びて曰く、「我が親愛なる甥の無罪なる明證此くの如し。此惡しき世界は實に虚偽なり。誹謗、陰口を云ふ舌、常に喧しき惡言が予に常に予に忠實なる關白殿との間に斯くの如き誤解を生ぜしめんとは誰か信じ得んや」。

密に軍兵を徵集す

老猾なる偽善者の力を極めたる此言は眞實なるが如く信ぜられたり。關白殿の友人は此趣を記して報告せしかば、關白殿は全く賺されて眠り、伯父心中の不快を夢にも見ざりき。抑々太閤様が故に此言をなしたる目的は、甥に對抗すべき程の兵力無かりしを以て、之を増加する時間を得んが爲なりき。彼は日本の各地より陰に募りつつある民軍の伏見に集合するまでは、穩便なる手段に出づる外には何事も爲し得ざりしなり。而して太閤様は彼の企を行ふこと陰密にして、關白殿は毫も之を知らず、之に關して何等の疑ふ所も無く、又各地方より來れる諸王侯は彼に伯父との和解を祝賀

し、此かる上は太閤様が其實權を關白様に譲りて政府全部を彼に交付するの日近きに在らんことを示ふ者多かりき。

關白殿を脅威す

此の親しき文書の交換ある間に、太閤様は彼の命じたる諸侯が若狭より伏見に進軍しつつありこの報を得たり。今や彼の企を完成すべき機は至れり。彼は關白殿に伏見に來りて反問を分疏すべきことを嚴命せり。若し之を拒絶せば、彼は現在の世界が戰慄震駭するが如き方法を執るべしと云へり。そは先づ彼は聚樂城其他關白殿の建てたる邸第を悉く火を以て亡し、少しにても抵抗する者は劍光の下に容赦なく死すべく、若し成し得べくば世界より彼の記憶を拭拂し去らんことなり。

關白殿太閤様に屈服し高野山に幽閉せらる

關白殿は係蹄に陥りしを知れり。太閤様の軍は猛勢にして抵抗すべくもあらず。是に於て止むを得ず少許の從者と共に自身を伯父に引渡したり。途上は有力なる護衛を附せられ、正午頃伏見に來り、宮殿の傍を経て一民家に宿泊せり。夕に至り太閤様より高野の僧院に退くべき命令を受けたり。僧院は紀伊の王國の石多き山の上に建てられたるものなり。

高野は凡て謫せられたる王侯の住む處にして、江戸より東方海上十四リーグに在る不毛なる八丈島(Fairinchina)の前に在り。此目的の爲に作られたるものなり。

同夜關白殿は太閤様の親衛兵に伴はれて、此流謫の地に護送せられたり。

左近殿の忠烈

太閤様に屬せる貴族に十八歳の少年サコン殿(Saconono)あり、都の總督の子なり。彼は關白殿が高野に赴くを聞き、

直に馬に跨り、關白殿に奉仕を申出でんせしが、衛兵の中に来るや引止められ、閣下の不機嫌を買ふを欲せざらば直に歸るべしと告げられたり。然れども彼は勸告を却け、威嚇を恐れずして曰く、「今主君は何人にも見棄てられたりきて之を棄つべしや。予が敬愛、本分、忠義を理すべき時は來れり」云ひて馬を走らせ、夜半若きエムペロールに面謁せしに、エムペロールは其忠實を喜びたるものから、彼を破滅せしむるに忍びずして、都に歸らしめぬ。太閤様は直に此事を聞きたり。若し彼の父の功勞を以てせざりしならば、彼が花の盛りに死せしこと疑も無かるべし。

關白殿髪を削り名を改む

關白殿は出發後一夜玉水(Tanahata)に泊せしが、日本の習慣に従ひて髪鬚を削り、道意(Dōji)と名乗れり。理性によりて自身を清淨にすといふ意なり。終に高野の僧院に來りて有名なる木食上人(Mokushō 興山)に案内せられたり。途上彼は數名の臣下の乞食の様したるに逢へり。太閤様の衛兵に見咎められざらんが爲なり。皆涙を流して悲哀を表したれども、詞を以て衷心を吐露する者無かりき。

主なる寵臣十人僧院に従ひしが、關白殿は彼等に語りて曰く、「近き頃までは卿等に領地分國を與へ得べかりき。予の没落は多くの豫期を打破し了れり。今や予は以前の豪華に引換へて卿等及予の生活を支ふるだけをも有せず。さても轉變窮り無き運命かな。卿等は予を故に偉大及榮譽の頂點に上げたり。隨ひて予の墜落は愈々大にして、予の不幸甚しし。」

嚴しき幽禁

彼等は此種の愁嘆を高野の僧院にて語るばかりの自由を有したり。然れども是以上には何らの特許無く、何人に語ることも亦何事を記すことも禁止せられぬ。事態日に非にして今や放免を得べき望も無かりき。



豊臣秀次の最期

木食上人、關白殿の爲に祈禱す 關白主従割腹を命ぜらる

修道院の長木食上人は偶像の前に行きて特別の儀式を行ひ、呪法を修して、關白殿の今一たび復位せられんことを神に請へり。然れども此聾せる神ほご援を與ふるに緩慢なるもの無し。此事やがて太閤様の耳に入るや、彼は關白殿の死を決定せり。實に一五九五年八月十五日なり。

關白殿は是より先既に不幸に疲れて自裁せんことを決心したるこゝあり。然れども傍人は彼が不満なる容貌を示し、物狂ほしく室内を歩きまはり、或時は憂に沈み、常に獨語し吐息をつけるかと思へば、或時は荒々しくあらぬことを叫ぶを見て、百方心を盡して彼を慰撫し、漸く暴力を自身に加ふることを防ぎ得しが、終に太閤様の使者來りて、關白殿及其従者に割腹を命じたり。彼等は命令を受くるや、凡て死の用意をなせり。第一に切腹せしは關白殿の扈從にして、年齢正に十九歳の青年なり。死に争ひ居る中、關白殿は之を抱擁したる後、其首を切りて之を卓上の大盤の上に載せたり。彼は又他の二臣に對しても同様のことをせり。次に斯くの如き殘虐を自己に加へしはビウシルツス (Biscarius) 云ふ佛僧なり。其祖母は太閤様より關白殿の宮中に探偵として派遣せられし者なり。而して此老婦人は役目をよく遂げしが故に、ビウシルツスの命を助けよと太閤様よりの命令ありしが、彼はエムペロルの慈悲を拒み、命令を傳へ來れる人に向ひて、かの虎狼に等しき人より憐憫を受くるは予の屑しませざる所なり。彼が如き暴君の下に奴隸たるよりは關白殿と死を俱にしたしと云へり。斯く云ひ了へて自殺せしが、死に至らずして苦しむ所を、關白殿其首を斬りて、現下の安樂を彼に與へたり。次で關白殿は同じ武器を以て自盡し、最後に残りし一人は主君の刀を以て自決せり。處刑終るや、僧は死骸を一處に置きて火葬に附したり。

太閤様、關白殿の従類を悉く殺戮す

然れども太閤様は是にては休まず、關白殿に謀叛を煽動せし人々を悉く搜索して誅戮せり。先づ身分高き人にて僧院に身を脱し居たる三人を初とし、次は諸王をして誓詞に署名せしめし白井備後にして、此罪により慘刑に處するこゝを宣告せられぬ。此等の中、木村(Chimura 常陸介重茲)の死は最も悼むべし。彼は太閤様に仕へて戦時にも平時にも殊勳ありしが、關白殿に私に交通せし廉にて自殺を命ぜられぬ。

木村の子息は父の不幸を聞き、當時サイクウレ(Saikoume)に在りしが、書を父に與へて、賢者は死に對して恐るる所なし。殊に罪無くして死する者を然りさす。現在を捨てて永久に一層幸福なる生に入るは何の惱も無し。又彼はその地に父に伴ふべく、我が生を受けたる人の死後残存するを欲せず云へり。彼は悲しむべき報告に接するこゝを豫期する間、刀筥を出さしめ、其中より最良のものを選びて、之を帯びて待てり。其中父の死の報と共に太閤様よりの命あり。曰く汝は木村の子なるが故に、日本の法律に従へば父の罪によりて死すべきなれども、特に生命を助くべし。青年は太閤様の恩命を謝して曰く、己は良心に於ては父に加へられたる悼ましき死を復讐するの義務ありと思へども、この目的を遂ぐる可能の方法無きを見れば、父の死に對して満足を得る能はず。此くて生存せんよりは寧ろ死を欲す。此く言ひて直に宮廷を去り、都に至りて寺院に赴き、ホトケに祈念して割腹し、香案の前に生命を犠牲せり。其後久しからず太閤様は木村の妻を阿彌陀の殿堂に於て斬首すべきこゝを命じたり。

關白殿の妻子女を慘刑に處す

太閤様は關白殿の諸大臣若しくは彼に好意を表したる者に對して殘酷の處置をなせしのみならず、彼の妻子親族に對しても同様にして、彼等は凡て憐むべき最後を遂げたり。彼は都に於て三十一人の貴婦人を得たり。貴族の女もあり、關白殿の配偶に附屬の仕女もあり、又最後に聚樂城より捕へ來れる彼の妾婢もあり。此等を其子女と共に車に載せて處

刑の場に送り。其子女の罪無き涕泣は觀者の愁歎一つになりて、虎狼の心をも和ぐるばかりなりしが、同情の餘地にては無かりき。彼等の刑場に達するや、劍手は直に關白殿の首級を示したり。彼等は恭しく之を拜し、暫くして死刑は始れり。第一は小兒にして、一々之を斬首したる後、婦人に及び、地上に投出して殘虐に屠殺し、屍體は深き穴に投じ、暴君は其上に石を建てて畜生塚(The Temple of Beasts)と呼びたり。

白井備後妻子の處刑

次で彼は白井備後の妻子を死に處するこゝを宣告せり。然るに彼等を載せたる車の宮殿の前に達せし時、寡婦は暴君の無法なる侮蔑に不當の死の耻辱より免れんが爲に、三男一女を刺殺し、他の之を知る間も無き間に同じ劍を自己の胸に加へ、瞬間前に殺されたる子女の上に倒れて呼吸絶えたり。

此く蠻行を理性ある動物に加へたる後、更に無生物にも及し、聚樂城を破壊せる外に三百の宮殿を毀ち、其木材及石を伏見に輸送せり。

太閤様初めて羅馬教徒を處刑す

太閤様が基督教徒を迫害せしは此頃に初まりしにあらず。若し神父コルネリウス・ハザルト(Cornelius Harart)を信ぜば、一五八七年を初めせん。ドミンゴ・モンテロ(Domingo Montero)の葡萄牙より平戸に着したる時、住民は其船の大にして美なるを嘆賞せしが、太閤様は當時博多に在りて之を聞き、一見したければ直に廻航せよと命じ、エスイト派の長をして書柬を以て其意をモンテロに通ぜしめしに、モンテロは急ぎ博多に來り、平戸博多間の海中暗礁多くして航海困難の由を語りて辭したり。太閤様は此を以て遁辭なりとし、之に復讐せんとして翌日令を發し、凡てのエスイト派は二十日以内に日本を退去すべし。彼等は多年日本に確立せる宗教に反對なる宗教を傳へんことを努むればなり云へり。

彼は夙に之を爲すべかりしが、基督教の師父等の多く居住せる島津王國を征服するまでは控へ居りしなり。

フランシスカン派五人 エスイト派三人の磔殺

次で一五九六年には迫害一層残酷となり、長崎の奉行ギボノシオ (Gibonosio) に令して、宗派の如何に頓着せず、フランシスコ派五人、エスイト派三人を磔殺したり。

* * * * *

太閤様赤痢病に罹る

太閤様は今や殺人にも疲れしが、一五九八年七月の末赤痢病に罹れり。初は血と共に胆汁を吐き、後には便中に腸の表皮剥脱現れ、終には腐敗したる肉片出でて悪臭を放ち、疼痛甚しかりき。八月五日には死の徴候見え、絶えず冷汗を發したり。斯くの如く死は近づきたれども、少しも落膽せず、國事を裁斷せること健康の時の如し、彼の最も關心せる事項は秀頼にエムペロルの位地を與ふることなり。彼は深く考慮したる後、八州の王にして日本人の尊敬を受くる大御所を煩はすを以て最も可なりきし、彼を伏見に迎へしめ、彼が謁見したる時、衰へたる太閤様は彼に向ひて力無けに次の如き旨意を語れり。

大御所との談話

「死は予が唇に在り。然れども之を恐れず。凡ての人にあることなればなり。予の苦慮の最も大なるものは予の子息にして、年漸く六歳なれば、國土を領すべき現狀に在らず。彼の幼齡は後見人を要す。其人は忠實にして細心、彼が十五歳となりたる時一般の禮儀を具して彼を其位に上らしむる人たるべし。思ふに其人は卿を以て最適す。斯くの如き大事を引受くるに足るべき才智の人たるが故なり。予は予の國土に子息を卿に委ねん。彼十五歳になれば、卿國

土を彼に復さるべし。予が卿に加へたる寵遇は卿が感謝を以て承認すること疑はざる所なれど、それを以て此委託を忠實に實行するの義務を強ひんごするにあらず。予の子息が卿の息女と婚姻して、之によりて予等の子ごもが永く國土を支配し、予等の繼嗣者が日本の命令權を握る曉に於て卿の配慮の益々深厚ならんことを望む」

大御所の答

爰に太閤様の聲は絶えて、話は中絶せしが、稍元氣を恢復したるを見て大御所は答へたり。

「閣下よ、信長の殺されし時臣は僅に三河に王たりしが、神が閣下をエムペロルに上任せしめし以來、之に加ふるに王國を以てし給ひ、合せて八國を關東と總稱することなれり。此重恩につきては閣下に感謝するの外何人にも感謝すべきもの無く、其他多くの殊遇に對して(臣の不敏を顧みれば)唯閣下の異常なる恩恵を感謝する外なし、臣が働きの最大なるものも、臣が如何程閣下に負ふ所あるかを十分に示す能はず。臣は臣の能力を擧げて閣下及閣下の後裔の爲に用ひ、若し千の生命あらば其總てを喜びて犠牲とせんことを願ふ。臣は閣下の不例なりし以來、未だ閣下の意志の發表せられざる時に於て、秀頼卿の利益の爲に凡ての苦心と努力を用ひたり。今や臣に加ふるに更に二恩典を以てせらる。此恩典は以前のそれに過ぐる所大にして、臣の非常に驚く所なり。若し秀頼卿の爲に力を盡さざらば、臣は最も賤しむべきものならん」云々

秀頼と大御所息女との結婚式

大御所は此等の話を熱烈なる悲哀を以て語れり。彼の演説終るや、若君秀頼と大御所の息女とは死の床に在る太閤様の前に召されて、結婚の式を擧げたり。太閤様は死と争ひつつあるにも拘らず、結婚式は古來の習慣に従ひて行はれしが、唯之を一日に短縮せしのみ。

諸侯をして誓約せしむ 諸侯の協同平和を期して子女互に婚嫁せしむ

饗宴終るや、太閤様は凡ての王及副王をして秀頼に忠義を盡し、十五歳になりたるとき世を取らしめんこと、同時に大御所に對しては秀頼の成年まで其後見人として服従すべきことを誓はしめ、大御所は血を以て此誓詞に署名せり。太閤様よりは誓ひたる面々にそれぞれ身分に應じて多大の下賜品ありて、老僕までも大なる富を得る程なりき。大御所以外に四人の大臣を任命し、太閤様の信任甚だ厚き淺野彈正(Asonodangio 長政)を其首席せり。而して凡ての所司を各自の地に就かしめ、彼の生時に於ける法律秩序を破壊せざるべきことを命ぜり。

次に彼は閣員に對し、政府の存立を危うせざらんが爲に忠實誠意を以て互に相接せんことを勸告せり。而して斯くの如き協同及平和の爲に彼は死の床に於て數組の婚嫁を行はしめ、貴族をして結婚によりて相結ばしむる爲に數王の女子を取りて之を他の諸王の男子に與へたり。

大阪城擴張の理由

彼は又大阪城を大にし、内に多くの宮殿を建て、主なる諸侯をして家族と共に此處に住せしめんこと、土木を急ぎて、數千の工匠を用ひたり。彼は彼の望を達する爲に、彼の喪を一時秘すべきことを命ぜり。エムペロルの死は内亂を起す虞あるが故に、此城を十分完成せんことなり。又本國より遠く來れる國王にして兵士を従へざるものは、内閣の權威の確立するまで、獄に於けるが如くに城内に留まらしむることを命ぜり。

死後神として祀られんことを望む

是より先太閤様は自己の名の不朽ならんことに苦心し、此目的の爲に生時一箇の殿堂を建てしが、此は日本の最も

莊麗なる堂宇の一に數へられぬ。此内に自己の寫生の黄金像を大理石上に建てたり。彼の屍體は棺槨に收めて葬り、之を焼くことなきを命じ、死後には神となりて新八幡と稱せられんことを願へり。即ち新しき軍神なり。是れ彼が絹の夜具にはれて毛屑を入れたる床に横はり、病苦に疲れて枯槁殆ど骨と皮ばかりに成りし時の願望なりき。

伏見城中の上層に運はる

終に彼は閑靜なる伏見城中の上層の室に運ばれんことを欲したり。此處に何物にも擾さるること無く靜臥せんことなり。是に於て彼は凡ての王侯及秀頼と別れ、秀頼には爾後彼が選びたる後見職大御所を父と呼びて相當の敬意を表すべきことを吩咐せり。又少數の貴族のみ室内に伺候し、醫師は床側を離るること無く、而して成し得る限り彼の生命を延ぶべき藥を調査せよと命じたり。

全營の悲痛 訃報の喧傳 虚傳なりしを知る 大阪城の奇なる

造營

此訣別の辭に凡ての宮内官は悲嘆大方ならず、號泣の聲は堅固に作られたる城外にまで聞えたり。之を聞ける民衆は太閤様の死去を疑へり。

此噂は野火の如く全國に引まれり。賊は隠所を出でて到る處に竊盜剽掠を行へり。或地にては民衆が一揆の舉に出でんこと集團するもあり。主なる一揆は大阪、都、及伏見に起りしが、内閣の力微弱にして之を鎮壓するを得ざりき。大閤様の死したる報知が一般の民衆に一層信用せらるるに至りしは、閣員が伏見の城の守を嚴にする爲に、募集し得る限りの地方より新兵を徵發して同城に集めたるが故なり。

此報知の信ぜられたるは旬日に及べり。既にしてエムペロルの病勢稍衰へ、閣員二名を大阪に派して同地に建つべき

城を速に完成すべきことを命じ、又伏見より同地に赴くべき多くの王侯に金穀を與へたり。此城の外廓の周圍は三リー
グなるが、日々使役の工夫千人に及び、毎夜之に工賃を拂へり。内には一萬七千の商工者の家あり。之を三日の中に毀
ち、命に違ふ者には財産没收の刑を課し、命に應じたる者は自己の廢物を搬出し、之を清掃することを命ぜられぬ。かく
て均平せられたる土地には測量者杭を立てて新家屋の敷地割宛を標示したり。建築の後るものは其敷地を失ふべく、
又二階建より低き家を建つるを得ざりき。此命令の公布せらるるや、エムペロール逝去の風説はたゞ止みぬ。閣員の
料簡のみにて此くの如き大事業を執行し得ざることを知ればなり。

太閤様秀頼の爲に憂ふ 重態に陥る 終焉

さる程に九月三日四日には太閤様は次第に快方に進めるが如く見え、斯くて彼は確實に國土を秀頼に授くるの計に時
を費ししが、九月五日に至りて病再び重なりたり。是に於て凡ての城門は嚴重に警衛せられて、以て太閤の訃音の外間
に洩れざらんことを欲せり。それより病勢日一日に革り、十四日となりて其日は活ける者の外觀を失ふこと稍久しき
に互りしかば、左右の人々は死せるならんことを判断せしに、病者は深き吐息の後に我に復し、又數時間にして知覺を失
ひて讒語せり。然るに意義不明瞭なる語の中に秀頼繼襲の事尙彼の心を痛ましめたることを知らしめしが、それより
彼は最後の際まで同じことを言續けたり。其終焉は一五九八年九月十六日にして齡六十四なりき。信長の後を繼ぎて
此に至るまで十五年をす。

秘 喪

大御所及閣員はエムペロールの喪を秘し人をして之を知らしめず、既に知れるものは決して洩さざるべきを誓へり。或
饒舌の宮内官あり、誓約を忘れて偶然之を口走りしに、遂に磔殺せられたれば、其後は人々皆之に畏れて口を緘した

れども、實情は間もなく暴露せり。

大御所と閣員との不和

此短き間に閣員と大御所とは互に融和せざりき。彼等は太閤所の帝國を奪はんことを企畫を察知したればなり。是に
於て閣員は大御所に反抗の決議をなして曰く、彼は秀頼の後見人たるべからず、速に歸國し坂東八國を以て満足すべ
きものなりき。又閣員は自己の政務上責任の重きに過ぐるを見るや、更に四人の諸侯を選びて補助職させり。此援助
を得たる彼等は太閤所今は恐るるに足らずと思ひたり。

日本人改名の習慣

日本人の習慣として貴族は種々の出來事に遇ひて名を改む。大御所は家康(Yasunari)及ギシアス(Gichuan)と稱せられし
が、のち此等の三者を捨てて内府様(Daifusama)と改めたり。以下内府様を用ふ。

太閤様神とせらる

閣員は今や何等の恐怖も危険もなく太閤様を神とすに忙しかりき。此目的の爲には殿堂も立ち像も成り、彼の屍體
は嚴肅なる葬儀を以て納骨窖に葬られたり。彼の名は豫期せし如く新八幡(Min. Fuchima)と改められたり。

* * * * *

閣員尾張を略せんことを

内府様は關東に歸りしが、彼と閣員等との反目は愈々著しくなり、遂に兵力に訴ふるまでに至りて、兩派ともに軍隊
を編制せり。

閣員は都に達する道路を悉く塞がんとて、尾張に接する二王國伊勢、美濃に於て多數の兵士を徵募せり。此は尾張の王

國を内府様の手より奪はんとするが爲にして、既に美濃に於て堅固なる二箇城を奪ひたり。此處に岐阜の堅城あり、中納言殿 (Cimangodono 織田秀信) といへる二十二歳ばかりの若き人、内閣の名に於て之を指揮し居れり。

此人は治部少輔 (Cimunosio 石田三成) が閣員より援兵七千を得たるの情報に接し、此聯合軍を以て尾張に侵入し、内府様の軍隊に對せんせり。

内府様岐阜を取る

然れども内閣は集議すれども決定する所なく、曠しく時日を費す間に、内府様は二萬の兵を率ゐて岐阜に押寄せたり。城の前に高き山あり。其背後に豫備隊として大軍を控へ置けり。而して七百の兵は岐阜に近づきて守備地を攻撃せり。中納言殿は堅き決心をもて城中より出でて敵を襲へり。敵は多少の抵抗を試みしが、頓て退却せり。然るに暫時にして中納言殿は思ひがけ無く敵の豫備隊の中に陥り居たり。被攻圍軍は此大軍の中には衆寡敵せず見えて軍を返して城に入らんせり。然れども敵は追撃急にして、退却軍に續きて城に迫れり。此處に大殺傷ありて、中納言殿は部下と共に城中の塔に引揚げしかき、もはや抵抗するを得ず、降伏の止むなきに至れり。

勝者は捕虜となれる太守を尾張城に伴ひ、有力なる守備兵を岐阜に留め置き、治部少輔の方に兵を進めたり。途次内府様に投じたる兵士二千人あり、後に又千人あり。他は皆潰走して、敗報を治部少輔に傳ふる者すら無かりき。

九州の動亂

事情斯くの如きに際し、薩摩の王及アウグスチン・ツノカミ殿 (Augustine Tzunocaminidono 小西攝津守行長) は彼等の手兵を治部少輔の前に出せり。内府様は之を見るや、兵士を集中してヨカタ川 (Locatangaawa) の河岸に沿ひて下り、

其進出を妨げんせり。彼は對岸に二人の強き將軍の指揮下に在る新來の援軍あることを其軍旗によりて知りしかば、此方の河岸に止りたり。伏兵を恐れしを以てなり。

兩軍相對峙して機會を窺へる間に、全日本を通じて黨派は二分して互に戦ふに至れり。豊後の王國に於ては、クアムビオエンド (Quambioendo 黒田勘兵衛孝高) は其子甲斐守の海上より送りたる使者により、内府様の軍の勝報に接せり。之に氣を得て彼は八千の兵を以てフランシスコ (Francisco) を襲へり。フランシスコは故の豊後王の子にて、久しく太閤様の爲に都に止められしが、内閣員の命によりて放たれ、四千の兵を以て豊後に歸りしなり。閣員はフランシスコが正當なる王として此地の臣民を其手に附け、よりてカムビオエンドに抗し得んことを希望なりしなり。然るに豫想は全く反對に出で、フランシスコは國に歸るや直に敗績したり。之が爲に豊後の一國は全く内府様の確保する所となれり。此を初として内閣員は到る處に反抗に遭へり。

主計殿肥後を取る

肥後の王國は二君主の下に在り、主計殿 (Cazviedono 加藤主計頭清正) は一半を有し、アウグスチン・ツノカミ (小西攝津守行長) は他の一半を有せり。前者は内府様の黨にして、後者は閣員に與せり。而してツノカミ殿は方にヨカタ川を挾みて内府様と相對し居れり。其時主計殿は彼の國を襲ひて火と劍を以て劫掠し、重要な宇土城 (Utsu) を圍めり。

閣員間の不和

シモ (Simo) といふ一名を以て稱せらるる九王國の諸君主の間にも大なる不和を生じ、或は内府様に與するあり、或は閣員に黨するあり、又中立なるも多かりき。有馬殿、大村殿は初は閣員方なりしが、都に近く進軍すること命ぜられてより、背きて内府様に附きたり。

閣員兵力を集合す

閣員は各地より兵を集めて決戦し以て運命を試みんむ欲し、會戰の地を美濃の平原に定め、兵八萬を集中せり。而して内府様の軍は僅に三萬に過ぎざりき。閣員は衆議決せず、徒に此事に拘はりて時日を遷延し、此弱敵を撃つまでに三十日を消せり。敵は之を利して兵五萬を得、進みて閣員の軍に向ひて攻撃を加へたり。

閣員軍の大敗

戰鬪初まるや、太閤様の妻の甥なる中納言殿は岐阜城を明渡したる後一たび幽せられし尾張の獄より救出され居たるが、其聯隊を率ゐて叛し、内府様の黨に赴けり。之に續きて尙三君主に率ゐられたる三聯隊齊しく閣員の計畫に反對なりしが、此機を以て叛きて敵の手足たらんこせり。是に於て軍中には内應々々の聲瀾漫して混亂を生じ、また收拾すべからず。かかる間に前衛全く潰えて中堅に雪崩れ込みしかば、混亂更に甚しく、左翼に在りし毛利殿は一合をも試みずして退却したり。後陣も亦前衛が中堅を混亂せしめし勢を以て兩軍一時に雪崩れ來らんこを恐れ、武器を捨てて走りしかば、戰場は全く掃清せられぬ。然れども彼等は早く脱走せしにも拘らず、自己の武器又は敵手に死せしもの大多数に上りき。内府様の捕虜の中には治部少輔及アウグスチン・ツノカミ殿あり。前者は切腹の意志無し云ひ、後者は基督教なるを以て切腹を拒めり。其他何處に潜伏すべしこも定めず脱れし者は多くは自殺せり。

佐和山城内の慘狀

内府様は此勝により大に利する所ありて、彼の反對者の數萬人は戰場に斃れたり。此成功を得たる彼は軍を進めて美濃の諸城を收め、近江の王國に入りしに、彼が勝利の報は佐和山城に達しぬ。佐和山は治部少輔に屬し、其同胞此に主たりしが、事の爲すべからざるを見て、先づ財寶を分ちて臣下を散ぜしめ、妻子を殺したる後、火を城に放ちて自殺せり。

内府様、毛利殿を恐る 大阪の堅城

内府様の最も恐れたるは大阪城なり。日本無雙の堅城にして、大軍を以て圍むこも急に之を抜くべからず。殊に毛利殿は全王國の財を此城中に收め、又多くの人質の中には内府様の味方の人々の人質もあり、殊に秀頼も在り、糧食彈藥も數年を支へ得べし。

然れども毛利殿は不思議に怖氣付き、此堅城を捨てて大阪附近の宮殿に入り、機あらば本國に歸りて敵より遠ざからんこせり。

内府様大阪城を得 次で日本全土に覇たり 薩摩侯の機敏

此大阪の堅城が容易に手に入らんこは内府様自身も殆ど信じ得ざりし程なり。若し城にして抵抗せば、彼の勝利の路は全く塞がれ、目的も破れしならん、然るに之を獲たるが爲に、今や彼のエムペロルに上任するこに反對する者無し。唯一の障碍物たりし秀頼の死したる上は、最早他に何等の妨害無かりき。關東の東隣に景勝(Cangueiro)あり、閣員の爲に今も干戈を執れり。然れども内府様は之を輕視せり。薩摩の王は最近の戰爭に其勇氣を現ししが、今や軍を收拾して敵に當らんこするの望なく、僅に六十名を従へて大阪に至り、其處にて五百人を合せ、海路百五十リーグの本國に歸り、兵を集めて再戰の準備をなせり。

内府様、毛利殿を救す

内府様は臆病なる毛利殿を迎へて危険なる敵は看す、彼の生命を救ししが、九箇國の所領ミ七箇處の銀鑛ミは之を没

收せり。彼は關東の八國に毛利殿よりの九國を加へ、更に曩に太閤様の所有せし地をも併合したり。中納言殿は最近の戰爭に於て款を内府様に通じたるが爲に、勝利は後者に歸したれども、内府様は之に親切なる報償をなさず、筑前(Cicagen)を奪ひ、貴族の牢獄たる高野の僧院に幽屏したり。

宇土城の固守

内府様は此くの如く到る處に優勢となりし間に、主計殿は津守殿に屬する宇土の城を圍みてありしが、守備軍は頑強に固守し、攻圍軍に損害を生ずるこゝ多し、爲に後者は勇氣を殞喪せり。主計殿は種々手を盡して、防禦軍をして閣員軍敗れて大阪城の奪はれたるこゝ、内府様は到る處に戦功を收め、彼等の主君アウグスチン・ツノカミ殿は處刑に遭ひしこゝを知らしめんせり。然れども城中の兵士は誓ひて敵の文書を請取らず、贈られたる矢文は之を讀まずして火中に投じたり。

宇土城陥落の爲にエスイト派の力を借る

主計殿は敵の頑強なるに驚き、又百計既に盡きたれば、長崎なるエスイト派に書を送れり。其文意は次の如し。内府様の反對者の没落及ツノカミ殿の死したるこゝは天下周知のこゝなれども、宇土の被攻圍軍に之を知らしむべき方法無し。之を知らざるが故に、閣員等の身方は敗れず、主君死せざるが如くに思ひて、彼等は頑固の抵抗をなすなり。故に予は希望す、足下より一人のエスイト信徒を予が陣に派し、現狀を守備兵に知らしむる様になしたきこゝを。守備軍中に五人の牧師あり。若し彼等にして従順ならば、之に對して彼等が恩を記せざるこゝ決して無からん。若し然らざる時は彼等は内府様の不興を招くべし。

エスイト派の謝絶

然るにエスイト派にては此命令に驚き、殊に政府の變動あるこゝに驚きたり。(日本には屢々政府の變更あり。)彼等は穩和なる語を以て辭して曰く、彼等は靈界の人にして、天に至る路を教ふる者なり。現世のこゝは彼等の關係する所に非らず。況や戰爭に於てをや云々。

主計殿は此陳辯を承諾せず、宇土の五牧師を死に處し、又他のエスイト派を内府様の敵として放逐せんを威嚇せり。かくして守備兵は漸くエムペロルミ閣員との間の事情を知るを得、外助無き孤軍を以て無謀の抵抗をなさんよりは媾和するを得策なりと判断せり、主計殿は十分に心勞の後漸く望を達せり。次で八代(Cianuscio)及山鹿(Cinnava)の二城も降り、主計殿は肥後全國を領有するこゝこなれり。

内府様日本の主權を握る 戦勝後の暴虐を行はず

内府様は日本全國の君主なるに至りしが、他の君主の如く勝利の後に暴虐を行ふこゝ無かりき。彼は捕虜となれる敵に對して穩和の手段を執りしが、唯三人のみは赦さざりき。閣員の軍を率ゐて彼に抗せし近江の王治部少輔、肥後半國の王津守殿、毛利殿が顧問せし安國寺(Ancougis 惠瓊)是なり。彼等は甲斐守(Cainecanis)に捕へられ、初は其身分に應じたる待遇を受けたれども、程無く大阪に幽せられて死刑を宣告せられたり。彼等は大阪に於て瘠馬に乗せられ、市内を引廻されたる後、荷車を以て都に押送せられたり。彼等の周圍には庶民群集して、貴人の不幸を憐むもあり、又之を嘲るもあり。治部少輔は第一の車に在り、安國寺之に次ぎ、津守殿は最後に在り。喇叭手各人の前に行き、彼等は謀叛人なるを以て耻づべき死刑に處せらるるこゝを高聲に叫べり。

津守殿の勇氣 聖像を捧げて斬らる

津守殿は毫も勇氣を失はざりしが、他の二人は無罪を陳じて當局者の處置に對し愁訴せり。彼等の刑場に近づくや、

近傍の佛僧數人來りて彼等に説諭し、尙凡ての罪惡を淨むる爲に多くの笑ふべき儀式を行ひしが、此は不潔なる精神を有せずして阿彌陀の前に出で得んが爲なり。之によりて所刑者は稍慰安を得、永久の生に確信を得たるが如くなりき。然れども津守殿は頑として僧の説諭を拒み、厭くまで基督教徒たる態度を示せり。

刑臺に上る時僧長來り。彼は常に外出せず、唯高貴なる人が惱む時に於て顔を出すのみなり。彼は多數の日本僧を伴ひ、手には釋迦の聖典を携へたり。

種々の咒文を唱へ又作法をなせし後、治部少輔ミ安國寺ミが死せんミする時、彼は聖典を出して接吻せしめたり。津守殿は此高僧を罵りて、己の基督教徒たることを公言せり。而して帶の間より耶蘇ミマリアの小さき畫を取出したり。是れ皇帝チャールス五世の同胞葡國の女王カザリンがエスイト教徒の手を経て彼に贈りたるものなり。

彼は此畫を兩手に捧げ、之を熟視して祈禱をなし、首を差延べて劊手の刀を待てり。劊手は三度にして之を刎首せり。他の三人も同様に處刑せられ、其死屍は焼かれぬ。津守殿の屍はエスイト教徒の手に渡り、都に於て長き屍衣を以て被はれ、羅馬教會の儀式によりて埋葬せられたり。

津守殿子息の惨死

彼は十二歳の一子を殘ししが、毛利殿は其家士ミ共に之を廣島に住せしめ居たり。津守殿の刑後暫くして當時大阪に在りし毛利殿は幼兒を同地に迎へたり。彼を伴ひ來れる兵士は毛利殿の殘酷なる考を察知したり。小兒は死の宣告を恐れたれども父の死したる上は世に依頼すべきものなきを以て生存の意志なく、基督の死によりて死者の天國に行くべき路の開けたれば、己が身體を捨てたる後父を見出すべきことを信じたり。彼の大阪に來るや、毛利殿は竊に之を殺害せしめ、首を内府様に獻じ以て其歡心を得んミせり。然れども内府様は此行爲を喜ばず、却て彼を罰せんミせしに、之を聞きたる毛利殿は小兒は自殺せるなりミ報告して、僅に處罰を免れたり。

内府様敵人を宥す

内府様は此他の人に對しては寛大にして、よりて衆望を得たり。尋常ならば誅戮せらるべかりし津守殿の妻其他の寡婦、孤兒は凡て之を赦せり。

明石掃部の驍勇 戰陣中の奇事

内府様の軍勢を荒しし者は明石掃部(Acasicannon)ミ薩摩ミの如く甚しきは無かりき。就中明石掃部は退却せずして敵中に突入し、自ら死せんよりも敵手にかからんことを望み、次第に追迫せられて逃るべき途無きを見るや、甲斐守の軍隊に亂入して最後の血戦を試みんミせり。甲斐守は其舉止及軍装によりて掃部なるを知り、高聲に下知を傳へて、「方方、彼を助けよ殺すまじきぞ。余は彼を生捕にせん」ミ叫びたれば、一同は靜止したる時、甲斐守は自ら明石の方に進み、其頸に手をかけて抱擁し、涙を流して「吾友、我等互に敵ミなりて此に見參するこの苦しさよ。勝誇れる我軍にて突入りたる爲に破られたりこはいへき、名譽は天晴隠れ無し」ミ云へば、掃部は「御邊まこの友ならば、直に其刀にて吾を斬り給へ」ミ云ふ。然るに甲斐守は其詞に従はず、己の馬を與へて騎らしめ、敵の命を救ひたり。

内府様己の爲に戦ひし諸人を賞す

内府様は恩賞を分配するを便なりミ考へたり、閣員に反對して彼の爲に戦ひし者には小國に代へて大國を與へ、其他の者にも大小の領地を頒ちたり。之が爲に日本は混雜を來したり。ナゴヨカ(Nanjooka 長岡)は丹後の小城の代に豊後の王國を受け、福島殿は廣島及之に附屬の國を受けたり。門閥家より出でたる基督信者等にして、彼の爲に武器を執りて勇戦せし者に、ミマサカ(Mimasaca 美作)の王國に於て生活費を給せり。彼は又宇土城の陥りし時、主計殿に幽せら

れし五人のエスト教徒を賠償金無くして放免し、長崎に於て自由行動を執らしめぬ。甲斐守(勳兵衛殿の子)には筑前の王國を與へたり。

内府様閑生活に入る スペックス、セゲルソーン内府様に厚遇せらる

これより後内府様は休息ミ平穩ミを得、秀頼の後見役ミしてエムペロルの権力を以て日本を支配せり。彼は伏見より駿河に移り、内府様の名を御所様(Goyssio Samma)ニ改めたり。一六一一年彼は歐洲及其他の地より使節の訪問を受けしが、葡、西人は舉動宜しからざる爲に御所様の機嫌を損じたり。ヤコブ・スペックス及ペーテル・セゲルソーンはエムペロルに引見せられ、獻品も快く納受せられたり。其國書の一通は日本語を以て書かれ、出納官コセキ殿に委托せられたり。彼等が江戸より歸る時速に出發し得んが爲なり。

ス、セ兩人の江戸行

前記の年八月十八日彼等は江戸に向ひて出發せり。コセキ殿は途中彼等に取りて必要な物品供給の準備をなせり。使節は拂曉駿河を出でて正午迄には江尻村に着し、同夜は此地に止れり。世界の終かと思ふばかりの大雷雨ありて、之が爲に翌日も留まりたり。三十年の後に至り其宿の主人の語りしが如く、フリシウスミブロークホルストの二使節は同じ家に泊りしなり。翌日彼等は天氣悪しきにも拘らず同地を發して三島に着し、それより藤澤(Tovisauwa)及戸塚(Tosko)を経て江戸に着せり。

彼等の江戸に於ける行動

彼等はウィリアム・アダムスに由りてエムペロルの子の閣員の首班佐渡殿(Oatadono 本多正信)に到着を報知し、二年間若きエムペロルに敬意を表することを怠りたる旨を陳謝せり。是れ一部は方法を知らざりしが爲ミ、一部は歸還を急ぎ

たるが爲ミにしてそは蘭船の安全に關係ありしなり云へり。佐渡殿は満足したり見えていはく、「エムペロルの子は二年前途なる國の船の平戸港に到着したるを聞き、戦争の業績に於て又國事の合理的處理に於て印度全國(東洋ミ云ふ程の意)に知られたる國民を見んミ希へり。故に歓迎せらるるミ疑無し」云へり。尙彼等の時間を徒費せざらんが爲に謁見を許さるべき準備も出來居れり云ひ、蘭人が必要を感じるミあらば之に應ずる供給をもなすべしこの厚意を表せられたり。

翌日使節は佐渡殿の宅を訪問し、緋羅紗五エル、黒き「リウト・ストリング」Intestine 二片、黒鍛子一片、白緋子五片、硝子罐三個、騎兵用短銃一挺、角製の彈藥入一個を獻ぜしに、習慣には反すれども、勞力ミ費用ミを費して遠路を持參せられたる珍品なればミ受納せられたり。尙昨夜到着の趣をエムペロルの子息に上達したるに、機嫌麗しかりき云へり。

スペックス佐渡殿の交話

彼等の會談は約半時に及び、佐渡殿よりは和蘭の國情を問はれたり。此談話の間此國にて得らるる限りの美味を以て饗せられ、退出に際しては佐渡殿は老年にして且痛風を病み居たれども、門まで案内せられ、午後には城中にて謁見あるやう取計ふべし云へり。果して午後二時には使節は新エムペロルの前に出で、精巧なるスタムメル(Stammels)二片、同色のカーシイ(Carsy)一片、緑色の花模様あるグログリン(Grogain)十五エル、緋色に黒き花模様のもの九エル、鍛子一片、金糸の織物一片、ノレンブルグ絨緞五枚、花模様緋子一片、リウト・ストリング(Lute-Strings)一片、象牙三本、銅鐵棒百本、銃一挺、騎兵用短銃ミ彈藥二組、硝子罐五個、彈丸五百ポンドを其足下に獻じたり。エムペロルの子は獻品を謝し、使節は受納せられしを喜びたり。厚意を受けんミは蘭人の長く努力し來りたる所な

ればなり。エムペロルはやがて點頭して退き、スベックス及セゲルソーンを佐渡殿の従者して城外に案内すべきことを命じたり。驛馬の命令書、旅行券、衛兵、日本服二着、其他の賜品を兩人に下され、又何處に行くにも保護を與へらるべしとなり。

蘭使款待せらる 江戸を去り駿府に赴く

後使節は平戸の太守の同胞の宴に招かれたり。而してオルムガウ(Wormgou 浦賀?)の港まで船にて行かんことを決定したるに、佐渡殿は彼等の爲に船一隻、荷物の爲に小舟一隻を準備せり。如何なる歐人も彼等の如く江戸に於て厚意を受けたる者無し。西班牙の大使は少し以前に江戸に來りたれども、謁見を許さるるまでには多くの日を費し、又冷遇せられたり。八月二十五日彼等は準備せられたる船に乗り、夕方オルムガウの港に入り、ウィリアム・アダムの家に宿せり。此處にて彼等は海岸に沿ひて航行する船を見たり。此船には少し以前にロドリゴ・デ・リヂューレ(Rodrigo de Riquere)と共に新西班牙に赴きて大に歓迎せられ、今歸國の途に在る日本人を載せ居たり。

* * * * *

使節はそれより大磯、吉原(Jiyouan)を経て駿河(府中の意)に達せり。時に八月二十九日なり。彼等は到着の由をウィリアム・アダムスしてコセキ殿に報知せしめたり。コセキ殿は使を以て旅行中の成功を問ひしに、彼等は答へて、コセキ殿の彼等に對する厚意を十分に感謝するの詞を知らず、彼によりて江戸にては萬事望の如くに進行したりと言へり。尙アダムスがコセキ殿より領知する所によれば、エムペロルは蘭船の平戸に運び來りし船荷に關して問ひたりこの事なり。使節は直に商品目録を調製して、之をアダムスしてコセキ殿に致さしめ、而して蘭船が日本に於て自由に貿易し得る爲に出願中の免許狀を速に交付あらんことを請ひたり。彼は之に答へて、免許狀は準備成り、唯エムペロルの

調印を得るばかりに進み居れば、當日か遅くも明日は之を交付すべし云々云へり。八月末日エムペロルの印ある二通の免許狀下付せられしかば、使節は之を蘭語に翻譯せしめたり。其注意下の如し。

日本免許狀の内容

日本に來航する和蘭の船舶は如何なる港に投錨すとも、予が指揮の下に在る者は何人も之を妨害すること無く、敬意を表して各種の援助を與ふべし。

サヒ殿日本に於ける蘭人の貿易を抑制す

使節は此免許狀の用語につきて困難を感じたり。彼等の望む所を十分に示さざるが故なり。即ち主要の條件たる彼等の貨物の引渡、積込及賣買に際して船舶検査官及税關吏の爲に妨礙されざることを缺きたればなり。是れ如何なる商人をも悩ますものなるが、殊に蘭人の經驗する所によれば、最も主要なるものはサヒ殿(Saphidonne)にして、彼は貪婪飽くこと無くして、何人よりも多くの手數料、入關税を強要せり。此は若しエムペロルにして之を知らば、若し彼の姉妹がエムペロルの側室の一人ならざりせば、彼の生命を失ふべき程の罪惡なりしなり。

然れども此有力なるサヒ殿を退轉せしむる計畫は困難なりき。蘭使は免許狀の力により、其貨物がエムペロルの税關吏に阻止せられ又差押へらるること無からんことを何故に然か主張するかにつきてエムペロルの質問あるべきことは明白にして、又彼等がエムペロルの殊恩によりて授けられたる免許狀の修正又は増補を要求するは、亦同じ程の危険を冒すものなることも確なりき。

然れども彼等は之を試みんことを決定し、是によりて九月一日スベックス及アダムスはコセキ殿に面會し、免許狀の早速に下付せられたる謝禮を述べしが、コセキ殿は十分に條件の記入なきや否やを問ひしを以て、彼等は如何にも十分なら

す、即ち蘭船が監督官の妨害無くして凡ての貨物を引渡し賣渡すことに關する皇帝の許無きことは是なりと答へたり。是に關してコセキ殿は聊も妨害あるべからざる旨を明言し、サヒ殿に書簡を以て蘭人の貨物の引渡、賣渡に關し蘭人を妨害すべからざることを命令せり。蓋し彼はサヒ殿が自己の好む所に從ひて、又彼の正當に爲すべき方法によらずして、蘭人の貨物を差押へ賣渡を妨けたれども、彼等が之を訴へざりしには大なる理由の存せしことについて、既に確なる報告を得たりしなり。スペックスはコセキ殿の自筆を得て、今後尙サヒ殿の爲に妨害せらるることあらば之を用ひたしと請ひ、又若し事件が重大ならば妨害無くして引渡し賣渡すべきエムペロルの免許狀を得たしと請へり。然れどもコセキ殿はウイリアム・アダムスが駿河に居る間は其必要無しと判断せり。彼はアダムスに對して税關吏の不正行爲に關し書翰を以て通ずることを得て、之を差止むる命令をも速に執るべければなり。

スペックスの智計

然れどもスペックスは命令の宮廷より來るまでには時日を経過すべきを憂ひたり。若し彼等が九箇月間に十分の積荷をなして出帆せざる時は、パナマに五箇月滞在するを要し、彼等に大なる損害あるを以てなり。コセキ殿も事態の重大なるを憂ひ、若し使節の旅行が急を要すれば、アダムスは止りて彼等の希望するが如き自由に引渡し貿易し得る免許狀をエムペロルより得べきことを約せり。スペックスはコセキ殿に此特殊の厚意を謝し、直に請求書を日本語にて認めたり。同夜ウイリアム・アダムスは之をコセキ殿に提出せり。彼は之を讀みたる後、翌朝アダムスに宮廷に出頭し自身之をエムペロルに捧呈すべきことを命じたり。

蘭人エムペロルより要求の件を聽許せらる

恰も好し、翌日シクサブロ殿(SicusabronTonne)にて殊に蘭人に好意を有する人事務に當れり。此二人エムペロル御所様

の都合を伺ひしに、上機嫌なりければ、例の請願書を呈せしに、即時に許可せられ、署名押印ありしを以て、ウイリアム・アダムスは直に之を使節に交付せり。而して之と共に蘭國使節は妨害なく旅行すべく、翌年新貨物を持ちて來るべき由の命令もありき。シクサブロ殿及コセキ殿も各上官を差向けられ、如何なる外國民も未だ得ざりし特別の使命を傳へ、使節は一刻も長く滞在せずして、翌年蘭國の新貨物と共に來るべく、然らざればエムペロルの不機嫌を來すべしとのことを訓示せり。

旅行の自由

ウイリアム・アダムスは彼等を案内し、且エムペロルの爲に彼等の旅行につきて諸般の注意をなすべきことを命ぜられたり。使節は此恩遇に對して恭しく謝し、彼等は決して忘恩ならざるべく、エムペロルの意に背くこと無かるべしと云へり。かくて別を告げて馬に乗り、カシングム(Casingam)を経て夜半城壘もて守られたる新居(Aei)に着せり。

熱田の宮

二哩を隔てて綺麗なる市熱田の宮(Astanomia)あり。木材の賣買盛なり。凡ての街路には木材充ち、家屋は皆其背後に建てられたり。路傍に仲買人住して商人の爲に取引をなす。

蘭使の宮以西旅行

宮(mia)シ桑名(Xuano)との間に海は入江をなせり。廣さ七リーグ。其上を航海し、上陸後桑名(Ouano)にて食事をなせり。堅城を以て守られたる美しき市なり。夕方には龜山(Camtianni)に達し、翌日拂曉馬に乗りて旅行を續け、正午比土山(Zitizanna)の近傍に於て雷雨の爲に驚かされしが、天候悪しきにも拘らず進行を繼げ、夕方石部(Vizibe)に達せり。

使節は大津に於て分れ、スペックス及アダムスは都に行き、コセキ殿の書簡を板倉ホイメン殿 (Iacura Fovimendome) に渡し、彼に緋羅紗四エル、黒リウト・ストリング二片、縞絹一片、及鉛數ポンドを獻じたり。彼は多くの陳謝の後に之を受納せり。彼等は伏見に行きてセゲルソーンに會し、小船にて大阪の郊外に着せり。風激しかりしによりて中途にて上陸せしなり。

堺市の商業視察

既にして彼等は商業視察の爲に堺に赴けり。大阪を距るこ三リーグなり。恰も好し、メルヒオル・ザントフォールト (Melchior Zantfort) に逢へり。彼は海岸に難船して此市に留り、凡ての習慣を細に觀察したれば、スペックスは其報告を聞きて満足し、此地に來りしここの無益ならざりしを喜べり。

平戸に着す

それより大阪の郊外クシマ (Cushima) より發途して、一六一一年九月十九日平戸に着せり。平戸にて老いたるホエ様 (Foyesamma) 及若き奉行ドネスミ (Donnesumi) に饗應せられ、駿河及江戸の内閣にて書かれたる書翰殊にエムペロルの書翰を讀みたる後、當時恰も港に在りし蘭船ブレイク (Blake) より二人の監督官の引揚げ來るこを命じたり。

平戸の奉行日本に於ける蘭人の貿易を庇護す

ホエ様は東印度會社には厚意を致されし人なり。彼はスペックス及セゲルソーンの東上に際しては、貴紳を附して宮廷に紹介する任に當らしめたり。又一六〇三年には自費を以てジャンクを準備してカッケルナーク (Quackernaek) 及 (日本海岸にて船を失ひし) メルセオル・ザントフォールトをパタネ (Parane) に送還したるこあり。此費用は稍多額に上りたり。

後又一六〇九年にはレッドライオン (Red Lyon) 及グリッフィン (Griffin) の二船がバタヴィアより平戸に來りし最初の船として自由貿易を求めし時、五十六本權のガレー船を供給せしこあり。此船は二箇月航海したる後、風雨に暴されて歸港せしが、間もなく破壊せられたり。

同時に右の船は平戸に多量の胡椒を残したるに、ホエ様は高價を以て之を買入れたり。長崎の奉行サヒ殿をして胡椒の貿易を獨占せしめざらんが爲なり。然れどもホエ様は其中千二百ポンドを失ひ、大なる損害を蒙りたり。此損害は前年十艘のジャンクより四千封度以上の寄贈を得たれども、之のみにては到底償ひ得られざるものなりき。

平戸の奉行への獻品

平戸の蘭人會議は此事につきて商議したるが、ホエ様の大なる恩恵及貴き計畫に對して謝意を表せざるべからず、何か貴重なる獻品をなして報償するこに決せしかども、此少量の船貨の中にては之を爲すに十分ならざりしかば、成し得る限りの獻品を奉行及其叔父に捧呈して受納せられぬ。是れ和蘭が日本のエムペロール内府様に送りたる第二回の使節なり。

内府様が外國貿易を獎勵せし所以

初め大御所に稱せられ、後に御所様に稱せらるる内府様は、斯くの如き外國の禮儀を嘉せられしなり。彼は外國貿易によりて臣民を富まささんご努めたり。故に凡ての外人はエムペロールに保護せられ、凡ての暴戾より安全の地に移されたり。然れども久しからずして基督教徒に對する殘忍なる迫害彼の國土に生まれり。

羅馬教徒の處刑につきてハザルトの談

以下エスイト教徒コルネリウス・ハザルトの記載に據りて殉教者のこを語らん。

有馬を距るこ約半哩溪間に一屋建てり。柱八本を以て支へ、藁を屋根とし、木材を壁とせり。一六一三年十月十七日基督教徒等は市外に引出されたり。當時基督教徒たるこは即座の死なりき。然れども二千の信徒は來り會し、數隊に分れて、點火せる炬を持ち、赤き帽子を被り、六人を一列として、羅馬及アントワープに於て見るこ同様に道路には聖徒の爲に珊瑚及月桂を散らしつつ、殉教者は其隊中より前記の家に赴けり。此處にて各人は其柱を抱けり。然るに處刑者が彼等を一々其柱に縛しつある間に、如何にして上りたりしかレオ、カンエモン(Leo Canyemon)は家の頂に上りて高聲に呼べり、「兄弟よ、今日我等は喜びて火焰を忍ぶ時、耶穌基督を信する方現る。火は我が身體を焚くこ雖も、我等の魂魄は直に灰燼中より揚げられて保存せられ、審判の日に永久の火を出でて幸福なる生涯に入るなり。兄弟よ、神の法律を固持せよ。神をば汝の生命財産より重んぜよ」此演説終るや、彼は屋上より下りて第八の柱に縛せられたり。悉く縛せられたるや、エスイト信者の長ガスベル(Gasper)は耶穌の畫像(猶太教の會堂にて柱に縛せられて鞭たるる圖)を彼等に示して云く、「見よ、諸君は救世主がボンチウス・ピラッスの下に苦しめるこ甚だ相似たり。諸君が死せんこするは此人を愛するが爲なり。彼が諸君の爲に死せし時、死より甦りたる彼の中に生きんこする諸君に對して既に彼の愛情を表明せり。彼は天上に於て光榮ある冠を諸君に戴かしむべし」處刑者はガスベルの演説の終るを待ちて、藁屋の周圍の柱に火をかけ、之を距るこ約三尺の處に在る殉教者は漸次焦爛する如く仕掛けたり。此時ハヤシンダ(Fayaxinda)の女マグダレンを縛しありし繩焼けたりしに彼女は身を脱れたり。然れども火より脱れたるにあらず、燃えつつある多くの炭火を取りて之を冠の如くに頭上に置きしなり。ヤコブの幼兒の繩も切れたり。彼は母マルタの方に行きしに、母はエズス・マリアミ呼ばしめたり。(以上ハザルトの記事の節録にかかる。)

内府様が基督教徒を苛酷に迫害せしこ、又嚴命を下して配下の諸王をして法律に従ひ彼等を處罰せしめしこは、人の熟知せる所にして、該教徒は豊後の王國に於ては火刑に處せられ、筑前(Nagasaki)の國に於ては足を空に逆に吊られたり。

茲にオルベ殿(Orbedon)ミ云ふ人、國王を代表して博多市に在り。殿堂の一の入口に基督を呑みし人名録ミ題せる大帳簿を控へて四人の裁判官ミ共に座せり。此帳簿には従前の信仰に復歸せし人は凡て其名を記入すべく、若し之を肯ぜざるものは堪ふべからざる罰ミ死を受けざるべからず、多數の中にてトマス及ヨアヒムは背教者たるを肯ぜざりき。之が爲に二人は足を以て樹木の兩枝の間に吊され、上なる者の頭は下なる者の足に觸れたり。かくして二日一夜吊り置かれ、路を行く者をして外國の宗教の爲にかかる殘虐なる死を受くるの愚を笑はしめたり。彼等は間もなく斬首せられぬ。

志岐、有馬に於ける基督教徒の慘刑

志岐(Shiki)島に於ては基督教徒は裸體になして運搬の後十字架に釘付にして斬首せられ、其他種々の苦痛を受けて死に處せられたり。

就中有馬の背教王は基督教徒に苦痛を與ふるこ他に越え、二本の鋭き木を以て脚を狭み、之を打ちて密接せしめれば、苦痛に堪へずして羅馬教の信仰を捨つる者多かりき。

内府様をして此殘虐を行はしめ、而も主として一六一三年以降に行はしめし理由は四ありき、エスイト派のハザルトは説けり。

エムペロルが基督教徒を處刑せし第一の理由

第一は内府様が西班牙の勢力を疑へるこなり。其勢力は日々印度に於て張り、大なる島及廣き州は既に之に屈伏せ

り。西方にては彼等は亞米利加を稱する新世界を悉く征服したれど、此を以て満足せず、未知の南洋を經來りて東洋に於て七個の屬領を得たり。モラッカ島、マラッカ城、フィリッピン群島等皆其版圖に入り、此地よりは日本に何時にても兵も差向くるを得べし。フィリッピンは、ハザルトの云へるが如く、日本より望見し得る程に近くはあらず、最も近き海角も雖も少くも二百餘哩は相距れり。然れども日本には對抗的の外人あり、又基督教徒も多し。彼等は忽ち一致して日本を基督教の君主に渡さずは保し難し。

第二の理由

ハザルトの擧ぐる第二の理由は次の如し。日本の紳士ヤモン殿 (Yamondono) といふあり。日本の港に外國船の投錨せし時之を見ん其舩に赴きしに、船長は世界地圖を見て居たり。ヤモン殿は地圖につきて國土、山川、都市、港灣を指摘教示せんことを乞ひ、西班牙人が歐米及亞細亞に於て大版圖を有することを知れり。船長は尙質問を受けしままに更に説きて曰く、西班牙は全世界を通商せるが、彼等の爲に損害を蒙れる國は無し。然れども苟も彼等に對して不正の所行あれば、武力に訴へて曲直を決し、之によりて多くの王國を服従せしめたり。ヤモン殿は彼等が先づ宣教師を派遣して基督教の教義を説きて人心を得、彼等を煽動して異教徒の君主に對する叛亂を起さしめ、不平なる人民を協力して容易に勝利を得んことを目的にあらずやと問ひしに、船長は是れ僧侶等の目的なりと承認せり。ヤモン殿は之を記憶してエムペロールに上申せり。エムペロールは斯くの如き重大事件を看過するものにあらず、俄然太閤様が一五八七年に行ひたるが如く法王廳の宣教師を排除せんとして、二十日以内に彼等の日本を退去せんことを命令せり。

此ヤモン殿の報知は恰も偶然内府様の手許に達せる他の報告によりて裏書せられたり。其は西班牙の水先案内が日本の數港につきて水深を測りしことにて、乃ち西班牙は東西洋に於て行ひたるが如く此等港灣の二三に上陸して日本を

征服せんことを企を有するもの疑はれしなり。

第三の理由 第四の理由

第三の理由としてはハザルトは罪を英、蘭兩國人に歸し、彼等の報告中に西班牙が歐洲のみならず世界の西部を支配せんことを欲すること、此目的の爲には久しからざる以前に於て秘露、墨西其、佛蘭西、和蘭、其他の諸國にて殺戮を行ひ、其數多いひ、其殘虐多いひ、前代未聞なりしこと、又西人は路を準備せんが爲に先づ僧を送り、宗教の上衣の下に民心を彼等に傾けしめ、其國土より大なる富を奪ひ、又人々をして法王には其意の儘に王國を廢置し得る無限の權力あることにて、何れの國の臣民も異教徒の君主に服従するの義務無く、便宜の機會を見て離叛し得ることを信ぜしむること、又エスイト教徒は種々の陰謀を以て到る處に多くの虐殺紛擾を生ぜしめ以て君主廢黜の動機せんことを欲すること、之が爲に多くの基督教國の君主も彼等の宮延及國より僧徒を追放すること頻々たる由を述べたりと云へり。ハザルトは自身エスイト教徒たるが故に、第三の理由を以て最も主なるものとせり。但し彼は此最後の理由を日本の貴族ポルタシウス (Portanus) の上に置きけり。彼は有馬の王にして、彼の子息は内府様の姪と結婚したるを以てエムペロールの寵を得たりと廣言せり。是に於て彼は肥前の國の大部分を相續權によりて獲得せんことを要求し、此の慾望を遂げんが爲、彼はパウルス・ダイハチ (Paulus Daifachi) といへる宮内官にしてエムペロールに愛せられたる者を送り、豊富なる獻上品を携へて之を内府様に呈せしめたり。内府様は之を拒絶したるを以て、獻上品は私消せられぬ。ポルタシウスは此通知を得、彼の願の延期せられたるより内府様の處置に快からず、又此に横はれる危険を憂ひたり。之を防遏する最上の策として、又彼の願の如何なる程度にて止まれるかを探らんが爲、彼は自らエムペロールに謁せんことを決心せり。此目的の爲に彼は子息ミハエル夫妻を伴へり。然るに此二人はポルタシウスを殺さんことを惡計を有したり。そは日本

の習慣に逆ひて、老年に達しながら未だ國事を後繼者に引渡さぬを怒みてなり。既にしてポルタシウスは願を拒絶せられ、其身は追放せられたり。又ダイハチは妻と共に駿河の市街を瘠馬に乗せて引廻され、一六二二年四月二十日彼は三尺隔りたる火を以て圍まれたる柱に縛せられ、時を経て焦死せり。妻は忍耐して夫の悲しむべき最後を見たる後、恩典を以て助命を得たり。

此ポルタシウスは有馬にける羅馬教の主なる獎勵者なりしが、此事は内府様の意に違ひ、殊に彼は老年となりても日本の習慣に従ひて子息に世を譲ることをせず自ら權力を握り居たるを憎まれたり。

第五の理由 日本の基督教徒と他教徒との劇戰 基督教徒の敗滅

ハザルトの擧げたるものの外に予は第五の理由としてフリシウス及ブロークホルストの使節日記中に記したる日本の迫害の例を擧げん。即ち日本人の云へるが如く、葡國の僧は以前には特權を與へられ、之が爲に彼等は其宗教が日本固有のものなるが如く、其信仰は日本の民性に根柢を有するが如くに布教し、又教會、僧院、學校を建築し、宗教上の結社を作れり。フランシスカン派及ドミニカン派もエスイト派の如く日本到處に布教したり。而して彼等は彌撒、懺悔、淨罪、其他を以て貧民より信じ難きほど多額の金錢を集め、年々黄金一噸弱を此より得たり。故に彼等の來る處は必ず凡ての人民に害毒を及せり。然れども彼等の詞は人民間に取りて法律なるかの如く聞ゆる程に巧に之を籠絡せり。彼等は長崎に於て一人の監督を得、異教のエムペロルを廢して基督教の君主を即位せしめ、彼等の宗義を自由に弘めんとの計畫をなせり。然るに葡王自ら日本の君主たらんことを意見を記せる一通の書簡の發見せらるるに及びて、エムペロルは甚しく憤怒し、凡ての葡人を滅絶せんことを決心せり。日本の基督教徒は此報知を聞くと、久しからずして自衛の爲に團結し、七八萬の大軍を編製せり。エムペロルの軍は之と戦ひしかるに敗北せしが、間もなく援軍を給せられ、彼等は最後の一人まで戦ひて、基督教徒を無慈悲に墮殺することを命ぜられたり。是に於て第二次の戰爭となり、互に死か勝利かの決心を以て闘ひたり。勝利の孰れに落つるかは良久しく危まれしが、終に基督教徒は大敗せり。

之に次で直に暴虐と殘殺とは行はれ、葡國及日本の基督教徒は其厄に逢へり。然れども異教徒は第五第六代までも復讐を誓ひ、彼等の敵意は若し一人の基督教徒あれば其街全部を處刑せんとする程に深刻なりき。内府様は冷酷にも前記の如き例に従ひて基督教徒を斬首せしが、是にては未だ以て人を恐れしむるに十分なる死にあらずと思ひ、更に磔殺の極刑を命令したり。

* * * * *

西班牙の勢力日本に於ける基督教徒處刑の動機となる

内府様が基督教徒を迫害するに至りし五箇條の主因中には、西班牙の勢力に對する疑惑もあり云へり。就中フィリッピン群島に於ける勢力は最も思ふに及ばず、是れ其地の近きが爲にはならず、西班牙人は同地に根據を占めてより未だ幾許ならざるに、絶えず其領土を擴張するに努めたるによる。……此他マラッカ、媽港等も皆日本に近く、日本をして西班牙の勢力を感じしめたるものなり。加ふるに日本には國內に基督教の結社無數にありて、國內に宗教を宣傳するに努め、其君主の主要なる者にして既に其宗教を信するものあり。是れ内府様が基督教撲滅をなさんとするに至りし主要なる原因なり。

内府様自己の血統に覇業を傳へんことを

彼は此殘忍なる計畫を實行しつつある間にも、年既に老いたるを以て、繼承者のことに憂慮を抱けり。彼は内閣様に

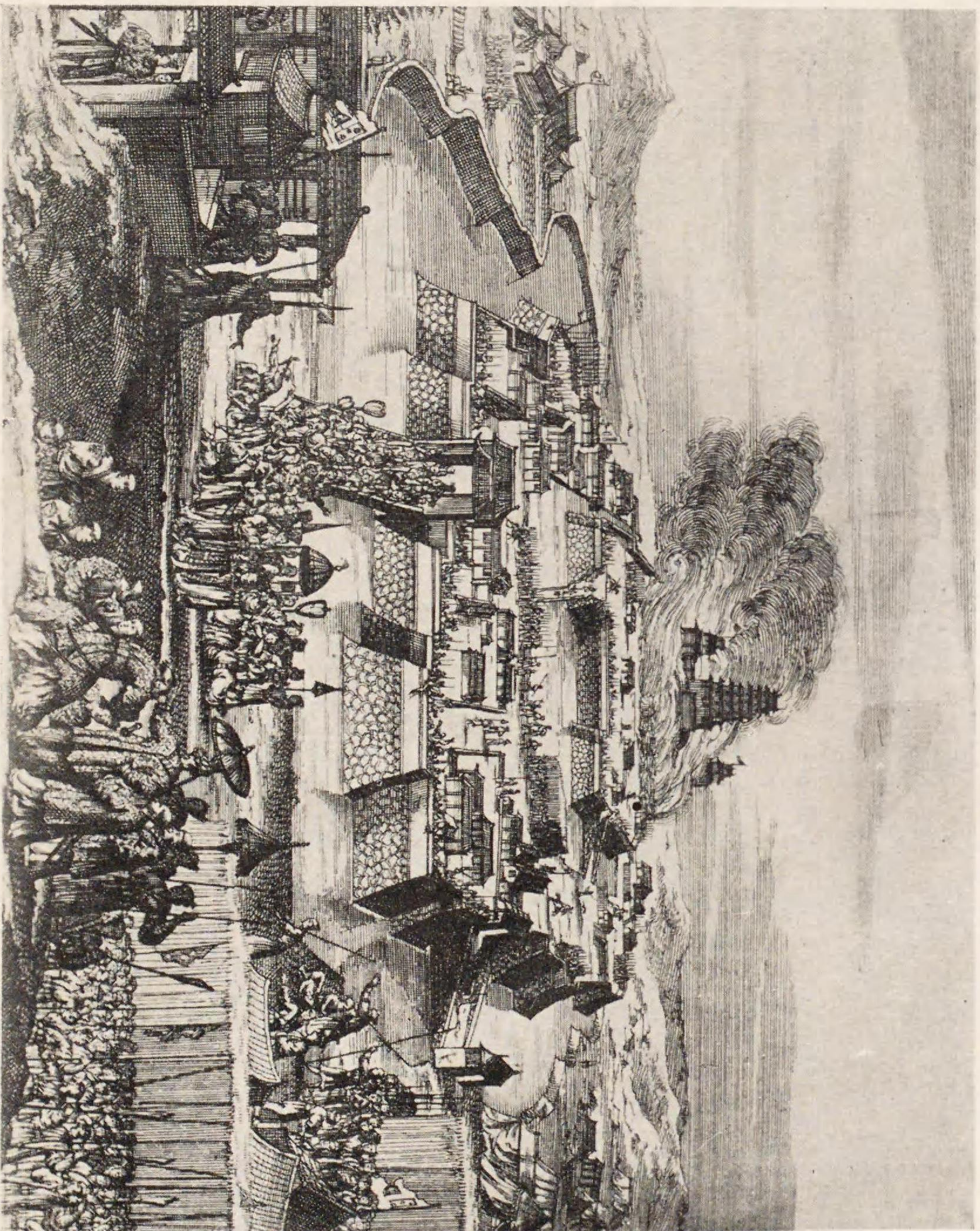
對して秀頼十五歳ならば先人の職地に就かしむべきことを誓約したれども、彼は誓詞其他の義務を忘却して彼を除かんぞ決心せり。然らざれば公方様に位を譲り、自己の血統として王冠を戴かしむることを得ざればなり。然れどもそれには何か恰好の口實無かるべからず。是に於て彼は熟慮を運らしたる末、秀頼に對して罪狀を擧げたり。曰く秀頼は最近の内亂に於て反對派に與し、私に政府を掌握せんぞせり。彼はエムペロルならざるに先ちてエムペロルの權力を握り。又彼の岳父の生命を奪はんぞせり。

大軍を以て秀頼の居城を圍む 秀頼の請斥けらる

彼は先づ此等の問責を送り、一方駿河の王國に於て大軍を召集するに努めたり。秀頼の宮廷は大阪に在りしかば、内府様は兵を率ゐて同地に向ひ、之を攻圍せり。秀頼は三箇月間奮闘して烈しき攻撃に抵抗したれども、力竭きて相當の條件の下に開城せんぞ申出でしが、エムペロルは之を聽かず、彼は秀頼の生命以外には得んぞ欲するもの無かりしなり。秀頼は其殘忍なる眞意を領解して謂へり、岳父が情愛を忘れて自身の女の寡婦となり、孫兒の孤兒となるを欲するこゝは有り得べきこゝなりや。無辜の者の叫は無情なる金石にも同情を起さしむ。若し内府様の判斷にして、假令己が父太閤の遺志もあり且エムペロルの正統なる相續者たりとも、エムペロルたるの器にあらずならば、己は權利を捨てて日本の王國の最小なるものを得て満足すべく、尋常の低位なる貴族にても可なり。何故に内府様は血に渴するか。何故に自家の親族を苦むるか。若し内府様が叛亂を恐るるならば、秀頼を低き地位に下して、敢て日本の國土を支配せんこの考を起さしめざるが如くするこゝも容易なり。

内府様秀頼を殺さんと決す

此等の溫和にして謙遜なる請願を内府様は顧みざりき。蓋し是れ秀頼を生存せしむれば、今十五歳ならざるを以てエ



大阪落城

ムペロルの位は彼に落つべく、加之秀頼は衆民に愛せられ、凡ての人は彼を以て故太閤様の眞の合法的繼續者なりと承認し居るを見てなり。是に於て内府様は必ず之を除かんことを決心せり。然らざれば彼の家族は永久に日本の支配權を失ふべければなり。秀頼は妻（即ち内府様の息女）を父の許に至らしめて、直に臣下に列すべければ彼の生命を助けんことを懇願せしめんとしたれども、内府様は面調を許さざりき。

大阪城を攻陥す

内府様は此時までに大阪城の外廓を毀ちて之を濠中に投じ、其濠は幅百九十尺深さ三十三尺なりしが、其中に高臺を作りありたり。上方の胸壁は粘土を以て堅固に作り、外方には白堊を塗りしが、他の胸壁は數ロッドを隔てたり。次で彼が曩に掘覆したる城壁は地上に委し、且強襲によりて作られたる間隙ありしかば、彼は此處より城中に侵入せり。然れども多數の宮殿の建てられたる中の丸に於て多少の抵抗に逢ひしが、反對者は力屈して終に降伏せり。

此の如くして内府様は外城を手に入れしが、第二濠に至りて止められたり。深き外濠と同じけれども幅は二百五十呎なり。此内濠に架したる主要なる橋の柵は黄金を以て作り、門も亦黄金の板を張れり。内府様は此橋を越えて道を開かんせしに、被攻圍軍は抵抗せんともせざりしを以て彼は大なる困難も無く之を成就せり。破開せられたる門は内府軍を導き、若し秀頼にして急に内部の山に隠れざりしならば、敵は彼を獲たりしならん。山は壁を以て圍まれ、黄金の瓦を用ひたる宮殿ありて、美觀を呈せる處なるが、彼は此宮殿内に母、妻、其他第一流の貴族と共に脱れり。

内府様の殘虐

内府様は凡て此等をして遺孽なからしめんが爲に、宮殿の周圍に木を高く積上げ之に火を點せしを以て、宮殿は此火

を受け、秀頼以下と共に焼落ちたり。其後秀頼に親交ありしものは皆苦痛に逢へり。此忌むべき悲劇の演ぜられしは實に一六一六年なり。(一六一五年の誤。)

内府様の死 其子嗣ぐ

内府様は此殘虐の利益を長く享受し得ず、十箇月ならざるに死して、エムペロルの職位を公方様に傳へたり。其治世の初に忘れがたき著明の事件二あり。

日本の暴風雨及洪水

第一は大暴風にして、刻々其勢を増し、港灣の船は錨綱を絶たれ、岸に吹きつけられて破碎せり。陸上に於ては大木を根こぎにし、壁を倒し、家を撼して之を頽壊せしめ、市街の家々は將棋倒しとなりて、其下に在りし人を壓殺せるもあり。田舎には遠くまで吹飛ばされし家もあり。海上には激浪起りて河川を塞ぎ、水は流出づる處なく、氾濫堤上を越して原野を浸し、堤防を破壊せり。海岸の村落は流失し、潮水の侵入數哩の内地に及べり。

基督教徒の迫害

此風水害の後には殘虐なる宗教迫害起れり。エムペロルがサヒョーエ(Sahioe)と稱する閣員の意見を納れて行ひたるものなり。

アントニウス・モタ(Antonius Mota)、フランシスクス・ザイモート(Francisus Zeimot)、アントニウス・バクソット(Antonius Paxot)はドドラ(Dodra)より支那に航せんとして、天候の爲に日本海岸に吹流され、偶然日本を發見せし後、葡人は一層大なる足場を此地に得たり。牧師ツルセリヌス(Turcellinus)の言によれば、前に記したる日本少年アングルが宣告せられたる死刑より脱して外國に伴はれしは、葡國の商人ゲオルギウス・アルヴァレシウス(Georgius Alva-

resius)といふ者の船にて臥亞に赴きしなり。サヴェリウス、ツレンシス、フェルナンデズの三人はアングルの勧誘によりて日本に來り、サヴェリウスは止るこゝ二年半なりき。葡王ジョン三世は此航海に千「デユカット」以上を支出せり。

* * * * *

基督教の遅々たる發展 鹿兒島侯基督教に不快

エスイト派の日本に於ける行動

基督教の發展は甚だ徐々たりき。ツルセリヌスの言によれば、是れアングルが基督教の信仰を日本語に十分に譯し得ず、該國語の困難なる爲にサヴェリウスも之を學習し得ざりしによる。初め鹿兒島に於て多少弘布の望あるが如くなりしかも、此希望は消滅せり。此國の王は久しくサヴェリウスを留め、其基督教義を説き、且之を信する者の受洗するを許したれども、是れ國王が基督教に多少の信念を有せしが爲にあらず、葡人が貴重なる貨物を歐洲及臥亞より輸入するを聞き、若し彼等が鹿兒島に來らば多少の利益あらんと思ひしによるものにして、葡國商人の絶えず平戸にのみ來るを聞いて快みせざりし際、恰も好しサヴェリウスは葡人の尊敬を受くるこゝ至大なるを以て、容易に商店を鹿兒島に移すこゝを勸告し得ざりし誤認したればなり。佛僧は此機會を利用して國王の反感を煽りたり。是れサヴェリウスが佛僧の教義を攻撃し、彼等の生活を嫌忌すべき惡業なりと誹りたればなり。是に於て同地の基督教宣傳は阻止せられ、一方には何人も古來の宗教を捨つべからずこの命令發せられたり。

サヴェリウスは何事を爲すも益無しと思ひ、此地を去りて平戸に赴き、同處にて百人の改歸者を得たり。其布教の法にして彼は先づ基督教の三位一體、救世主基督、及救済に關する根本教義を讀聞かせ、アングル之を葡語より日本語に反譯せしが、其反譯には誤謬無きにあらざりき。後サヴェリウスは後事をコスムス・ツレンシスに托し、フェルナンデズ

共に山口 (Amunguium) に赴けり。此地に於ては貴族平民中に多くの研究好の人ありしかき、結果は思はしからざりき。彼等は日本語を操るを得ざりしかば、最上の方法として一日二回街上に立ちて基督教の教義を説き、アンガル之を反譯したるを朗讀するの外無かりき。其教義の奇異なるを以て之を嘲笑する者あり。小兒等は其後を追廻し、彼等が日本語を明瞭に發音し得ざるを嘲りたり。然れども稀には彼等を家に迎へて更に深く教を請ふ者もありき。

山口に於けるエスイト派の業績 サヴェリウス都へ旅行す

サヴェリウス及フェルナンデスは山口に説教する中、國王の前に召出されて種々の下問を受けしが、彼の説ける宗教の基礎を問はれし時、サヴェリウスはアンガルの反譯を讀みて答へしに、王は笑ひて外客を退出せしめたり。サヴェリウス等は暫くは引續き同じ方法を以て説教せしが、勞力の無効なるを見て、都に行かんことを決心せり。途中賊に逢ひ、寒氣を戦ひ、二箇月餘を費して漸く同地に着せり。都にては新歸依者ベルナルドを伴へるを以て、布教上多少容易ならんと思ひたれども、彼等の豫期は全く外れ、長く説教し又成し得る限りの方法を講じたれども、公方に謁する機を得ず、又市民も戦亂の爲に新宗教に耳を傾くるの違あらざりき。

是に於て彼等は再び山口に歸り、時計其他の珍品を國王に獻じぬ。此は東印度の副王及臥亞の監督より都の公方に獻ぜしむる爲に送來りしものなれども、公方に謁見叶はざりしを以て、外國の珍品を此上なく欲求せる山口王に獻せしなり。王は之が返禮として金銀の袋を與へたれども、エスイト教師は之を拒み、唯山口にて布教の許可を得んことを願ひて之を允されたり。

サヴェリウスが美服を着けし所以

サヴェリウスは日本人が衣服の良否によりて人の價值を定むることを觀察したるより、從來の粗服にては顧られざることを曉り、美服を着けて人の敬意を購ひ、又好奇心によりて人の注目を惹かんさせしが、此考は當りたり。爾後街上に於ても群集する者以前に増し、此宗教に關して人民の論議するこも多くなり、殊に僧侶の間には大に議論の種々なりき。

日本人が基督教に改歸せし奇なる事例

山口にて最初の改宗者の生ぜしは偶然の出來事によれり。ワルセリヌスの語る所によれば、ヨハンネス・フェルナンデス一日街上に於て多數の人に圍まれてアンガルの反譯文を讀み居りしに、衆中の一日本人進み出でて彼の面に唾せり。彼は徐に之を拭ひ、些も慣りたる氣色無く讀み續けたるに、之を見居りし一人は其忍耐に感じ、斯くの如き溫和なる人の説けるは眞實の宗教に相違無しと思惟し、是より進みてサヴェリウスに就きて教を受け、終に洗禮を受けたり。之を山口に於ける最初の受洗す。爾後他にも此例に従ふ者を生じ、ベルナルド・エーノグ (Bernard Eenoog) は後はサヴェリウスの手にてエスイト派に歸したり。

豊後侯基督教徒に好意を表す

基督教は山口にて隆盛となりしが、既にしてサヴェリウスは豊後の王ヤコトンドノ (Jacotondono 館殿) に迎へられたり。同國の港には葡船の寄港したることあり。王は財を好み、葡人を懇に待遇し、使節を臥亞に遣し、山口に於ける布教を奨励せり。

此保護ありしに拘らず、サヴェリウスは佛僧の大反對に遭へり。彼は豊後にては一人の受洗者をも出す能はず、唯教義を教ふるに止まるのみ。王も亦基督教に傾きたれども、外教に歸依せば領内に反亂の生ぜんことを恐れたり。然れども彼はサヴェリウスの後に來りしエスイト僧に學校を供給し、バルタザル・ガゴ (Balthazar Gago) 及ヨハンネス・フェ

ルナンデズ (Johannes Fernandez) には布教の認可を與へたり。

豊後の民基督教徒に對して暴起す

豊後王の此處置は臣民を怒らしめ、後者は彼に對して干戈を執れり。然れども館殿は直に之を討平し、叛者の妻子眷屬と共に處刑せり。其後再び一撥起りしが、王は六萬の兵を出して勝利を得、博多、日向、山口及タソ島 (Taso) を領するに至れり。一五五四年王は豊後よりアントニウス・フェレイラ (Antonius Ferreira) と稱する葡人を臥亞に派遣し、同國の親交を求め、再びサヴェリウスの派遣を乞ひしが、サヴェリウスは是に先だつこ二年支那に布教中廣東より程遠からぬ處にて殺害に逢ひたりき。

臥亞より豊後侯への遣使

然れども臥亞の太守は豊後國王の言を捨てず、メルヒオル・メネズ (Melchior Nizigue)、フェルヂナンド・メンデズ・ピンター (Ferdinand Mendez Pinto) を館殿に急派せり。彼等は盛装せる四十人の葡人の行列と共に王の前に出でたり。王は基督教徒を領内に入れしより困難を生じて、之が爲に多數の人を殺すに至り、若し從來の如くせば到底流血の止む期無からん云へり。メネズは人生の無常及不信者の永久の苦患を説きて説法したれども、其效無かりき。

豊後侯僧となる 妻を離別す 洗禮を受く 領土より引退す

メネズは館殿の改宗の見込無きを見て臥亞に歸れり。其後王は愈基督教徒に遠かり、佛僧の爲に莊麗なる僧院を臼杵市に建て、大なる歳入を之に給し、高僧を迎へて得度し、深く佛道を究めて其堂奥に入りたり。然れども之が爲に基督教徒を苦しむること無く、却て其妻は火を以て彼等を迫害せり。

此残酷なる行爲は王をして不快ならしめ、彼は妻を離別し、穩和なる婦人を妻に迎へしが、其出の女子はセバスタアンと稱する基督教の君主に嫁したり。王は此結婚後、妻と女とより其信仰せる基督教を説かれ、今や之に耳を傾くるに至り、終にカプリアレス (Capriales) の洗禮を受け、サヴェリウスの記念としてフランシスクスの名を得たり。彼は名を改めしのみならず、生活の方法をも一變せり。彼は年齢未だ五十歳ならざれども、王國を辭して日向に退隱せしが、此地に一新市街を作り、基督教徒のみを住ましめんとせり。

新市街を作らんとて出發す

彼は一五七八年十月四日兵船を率ゐて出發せり。其船艦に白緞子の旗の赤十字を刺繡したるを橋上に掲げたり。カプリアレス等多數の新市街に移住すべき教徒之に乗れり。出發に臨みて彼が繼嗣と定めたる長子に命じて、基督教徒を苦しめず之を援助すべしと云へり。

嗣子は基督教徒に好む

新王は父の命を忠實に守りしのみならず、彼は神佛の殿堂を毀ち、エスイト教に資を給し、臼杵に莊麗の教會堂を建築し、佛僧の活動を壓抑し、萬事を基督教風に行へり。豊後の諸君主はシモ・Ximo の王龍造寺 (Riogozes) の後援を得て王に反抗せり。王は屢敗れて都市領土を取られ、終に館殿の子息は支配權を奪はれたり。

前侯の復位 叛徒を降す フランシスクスの死及葬儀

忠實なる従臣は館殿再び以前の權力を握るべしと決議し、豊後の王權の全く失はれんとするに先だちて之を恢復せんことを欲したり。

館殿即ち今の名フランシスクスは日向の基督教市より出でざるべからざるを悟り、兵を率ゐて反軍の將チカクロ (Chikuro) と相對して未だ交戦せざるに、叛軍の兵は大部分フランシスクスの陣に走り、餘す所僅に八百になれり。是に

於てフランシスクスは一撃之を殺し、よりに豊後の王國は平穩に復歸せり。

勝利者は新市クチモチ (Cuchimochi) に歸りしが、後久しからずしてエムペロルに參觀の歸途流行病に罹り、クチモチに達するに先ちスクマ (Sucuma) にて一五八七年に歿せり。其葬儀は基督教式にて莊麗を極めたり。

九州に於ける他の基督教信者

豊後以外にも基督教を信仰せる國あり。初めサヴェリウスが一五五一年十一月日本を去りて臥亞に行きし時、二人の日本人を携へたり。マテウス及ベルナルドにして、彼等は法王に調する爲に派遣せられしなり。マテウスは臥亞にて歿したれども、ベルナルドは獨り旅行して終に羅馬に達し、法王の足に接吻せし日本人中の第一人となれり。彼は歸國せんとして西班牙のコニムブリカ (Combrica) にて歿せり。サヴェリウスは支那に旅行せり。日本人常に日本の宗教の出でたる支那の人民は未だ基督教信者ならず云ひしが故なり。

日本に残りしはツリアヌス及フェルナンデズなりき。日本の改宗者には尙バウル・オフ・ザ・ホーリー・ピリーフ (Paul of the Holy Belief) 及ローランス一眼 (Lawrence One-Eye) ありて、其勳により基督教は鹿兒島、平戸、山口、豊後に於て平民の間に弘布せられたり。(エスイトの教へしは十戒、救世主耶穌の福音、及三位一體なり。) サヴェリウスは死するに先ち臥亞よりバルタザル・ガゴ (Gago) 外二人を送りしが、後にはカスベル・ヴィレラ等多數日本に渡るものありて、數年間に大なる効果を奏せり。信者の數も増加し、市邑、僧院、教會堂も多く建てられ、彼等も各地に於て尊敬を受くるに至れり。中にも山口に於て京都の佛僧二人を改宗せしめたることあり、又同地に於てツリアヌスは大なる教會堂を建て、此堂に於て公然禮拜式を行ひたり。宮廷の中にも信者なる者ありて、王の會計方アムプロシウス (Ambrosius Fumadus Faisumis) の死せし時はエスイト派のエドワード・シルヴィウス (Edward Sylvius) 等二百名許りの

信者其葬式に連り、大なる十字架を捧げて棺前を行く者ありて、其周圍には炬火畫の如く衆人の目を惹きたり。寡婦ハスミウス (Fasumis) は貧民を饗すること四日、衣服家財を頒與せり。ツリアヌスは又救貧院をフナコ (Funaco) 市に建て、一部は癩病者を收容し、一部は他の患者を收容し、日本人の基督教醫師を其院長とせり。癩病患者は日本に多數なるを以て、各地より此に集るもの多かりき。

日本に於ける基督教徒の祭事

山口領は他處に比して基督教徒の數多かりしが、是れ王が、該教を信じて之を獎勵したるが故なり、人々は祭の日に會堂に群集し、エスイト僧は磔刑の人形を置いて耶穌の苦痛を演出したる後、凡ての燈火を消して、會衆悉く鞭を持ち、上半身は衣服を脱して、詩篇第五十章の讀誦するまで身體の鍛練をなせり。又バーム日曜日には信者は神聖にせられたる樹枝を持ち、行列を作る。其前には十字架を運び、教會堂の戸を閉し、外には一人のエスイト僧立ちて、手に十字架を持ち、「開けよ永久の門を」高聲に叫べば、内に在る者は之に應じて「名譽の王は誰なるか」云ふ。終に二列となりて堂内に入り、香案の方に進むに、一人の教徒ありて彌撒を誦す。

或時は彼等は炬火を携へて教會堂の周圍を歩す。其時人を墳墓に隠し置き、二人の武装したる葡人及兜を被れる二青年を其番人とし、此くして此人は墓中より出づ。是れ基督の再生に擬せるなり。會堂の中央には香案あり、其兩側には數箇の禮拜所を作り、ゴルゴタ山の磔殺、再生、オリヴェト山よりの昇天を書きたる刺繡を懸く。壁の周圍には多數の蠟燭を排置し、香案の前、禮拜所の隅には黒き布をかけ、其後には教僧の装したるエスイト一人立てり。

彼等は九度キリーレイソン (Kyriedeyson) を歌ひ、之を終ふれば右の布を急に除く。香案上には十字架及其他諸の裝飾せられたる像現れ、次で又教徒も現る。是に於て鈴を鳴し、唱歌隊は頭に花環を戴き、手に炬火を持ち、聖體に隨行す。

聖體は華麗なる天蓋の下に會堂内を運ばる。

山口市の罹災 エスイト派教會堂を建つ

此禮拜の方法は日本人に感動を興へて、基督教の盛行を見たり。殊に山口に於ては西班牙及伊太利の内地に於けるに減ぜざりき。然れども山口は之が爲に五箇年に二回破壊せられ、漸く再建せんせしに、一五五七年にはドロサールト・モーリ殿(Drossart Moridono)亦全市を灰燼みなせり。王は基督教の貴族、兵士と共に山口を距る五リーグなる一城内に走り、其處にて臣下と共に殺されたり。

他の地に於てはエスイト教徒は平穩に生活し、其地方の君主より布教の爲に年々の歳入を受けたり。王國の市博多にては莊麗なる教會堂を建て、平戸にては聖母に捧けたる教會堂を建て、都にては大なる家屋を購ひ、後に之を教會堂みなせり。鹿兒島にては初めて集會所を作れり。

ヴォコアユラ(Vocajura)王は周圍二十哩の地を彼等に提供し、其中には基督教の日本人のみを住居せしめたり。堺市に於てはヴィレラは莊麗の教會堂を建てたり。立派にはあらざれども、島原にも教會堂建ちたり。長崎に建てられしものは莊大に於て他に勝れたり。

大村侯の受洗改名 大村侯に對する内亂

日本の王にして最初に受洗せしものの中に大村の王純忠(Xumitanda)あり。名を改めてバルトロメウ(Bartholomew)云へり。此く改名する風習はエスイト派の歐洲より日本に輸入したるもの如し。

純忠の改宗には大なる反對者あり。佛僧等は其張本となりて故王の子息五島殿(Corondono)を勸めて純忠に反對せしめたり。其理由としては純忠改宗前には常に香を以て薫らせし祖先の木像を破壊したり云ふに在り。此表面上熱烈

なる口實によりて五島殿は大なる援助を得たり。何人も舊宗教の大村より追はれ、新宗教の葡人によりて輸入せらるることを甚しく怒りたればなり。是に於て謀叛者は一團となり、大村に火を放ちて宮殿を襲へり。王は耶穌の名を刺繡せる白絹の衣服の上に虎の皮を肩に打かけ、駒には大なる金の十字架、頸には薔薇の花環をかけ、敵火の中を海岸に近き城に脱れたり。五島殿は之を追ひ、五島及平戸より船を得て、海陸より其城を圍めり。

大村侯危急を脱す 戦勝つ エスイト派を厚遇す

若し純忠の父センガン殿(Xengandono)が巧妙なる政略を用ひて攻圍軍の間に不和を生ぜしめざりしならば、彼は脱するを得ざりしならん。何みなれば純忠の父が有馬王の娘を叛軍の主魁に婚嫁せしめんを申入れしに、巨魁は直に純忠に黨したればなり。斯くして純忠は城を出でて敵の大部分を屠るを得たり。爾來純忠は久しく平穩に國を治めしが、彼の義弟諫早(Satsuma)平戸侯と竊に連絡を通じ、平戸侯は艦隊を海上より送り、諫早は大村市を焚きて灰させり、純忠は當時少數の臣下を以て海邊の城に在りしに、諫早は速に此城に向ひて行進し、若し純忠に援軍の到達せざりしならば殺されしこと疑なかりしが、幸に援軍を得たるを以て、彼は之を率ゐて敵に對し、激戦の後之を敗りたり。平戸侯に屬する船は天候の爲に四散せり。純忠に抵抗せし最後の人はシモの王龍造寺(Riogoses)なりしが、王も亦其叛亂の爲には高價を拂ひたり。純忠はエスイト派の爲に教會堂及禮拜堂を建つること四十、其領内より異教を排斥し、其歿したる比には一人の非基督教者無きに至れり。大村王は一五八七年に歿せり。豊後、大村二王の外に有馬王も亦基督教を信仰せしが、困難に逢ふことは遙に少かりき。

此三王が一五八二年に使節マンチョ・イトー(Mancio Ito)等を羅馬に派遣したることは、既に詳記せしが如し。

羅馬派遣の日本使節エスイト派に有利なりき

此等の日本人の歸國に關してリンスコット(Linschout)は曰く、日本人はリスボン港よりセントフィリップ號(此船は歸途英國の海軍提督ドレークに捕拿せられ、東印度遠征に於て失はれたる最初の船なり)に乗りて出帆せり。予が臥亞に在りし時、彼等は金銀の服を着け、盛装して伊太利風をなし、同地に來りて大目的を遂けたるエスイト派より盛なる歓迎を受けたり。彼等は此目的の爲に西班牙語を以て書を公刊し、日本人の海陸の旅行及歐洲諸王公の歓迎を記せり。さて日本人は臥亞より日本に着し、少からざる稱嘆を得しが、エスイト派は之に關して二の理由を挙げ、第一には日本人をして愈々深く基督教の信仰を懐かんご欲せしめ、第二には彼等をして何人も口舌にては信ぜしむる能はざる美麗なる諸都市を目撃せしめんごするに在りご稱し居れごも、實際には彼等の教派を有名ならしめ、之によりて財を集めんごするに外ならず。彼の教徒等は日本人に與へられたる贈遺品は大抵之を横領し、又法王及西班牙王よりは葡萄牙人又は他派の僧は彼等の許可を得ざれば日本に定住すべからずごの命令を受け居たり。故に彼等エスイト教徒は他派の教徒を逐ひて、彼等の缺く能はざる少數の僧及葡國工匠を残し居たり。他の者に對しては身分の如何に拘らず此國に入らんごする者は用事の終り次第に退去すべしごいふ條件を附し、若し長く滞在せんごせば、金錢を以てエスイト派より其免許狀を買ふごを要求せり。彼等は基督教義の説かれたる地に於ては何處にても優勢にして、日本人をして其意見に聽從せしめ、神の如く尊敬せしめたり。彼等は又法王に乞ひて、宗派の規則には反したれごも、日本支配の監督を選擧するの許可を得たり、其職に就くべき人は葡萄牙より來りしかご、航海の途上にて死せしを以て、新に選舉せられたり。要するにエスイト教徒は日本に於て萬事を其支配下に置かんご努力せしなり。(以上リンスコットの言なり。)

日本に於けるエスイト派布教の様

茲にエスイト布教の方法を一言せん。サヴェリウスは先づ世界の創造神の萬物を作りしご、神の子が人間になりて十字架に死し、葬後甦りて昇天せしご、彼は天より來りて生ける者竝に死せる者を審判するごを説き、此を日本語に譯して日本人に讀聞かせたり。其文は葡萄牙文字を以て書かれ、容易に讀み得るやうにせられたり。

コスムス・ツリアヌス及ヨハネス・フェルナンデズは多く基督教の行ひし奇蹟を説けり。右の手を以て十字を切るご、先づ頭に於ては父の名を以てし、次には下りて胸に於て子の名を以てし、次には左肩より右肩に向ひて聖靈の名を以てするごを教へたり。亦薔薇の花環を以て祈禱するごをも教へたり。

日本人改歸の様

神聖信仰のパウルはマリア及其膝に在る小兒基督の畫を鹿兒島の君主の前に捧けて、異教の偶像崇拜を厭はしめんごせり。又他のエスイト教徒は天使ミカエルが日本の保護神たるごを示し、雷電、虹、暴風、雹雪、彗星等の自然の現像を以て其活動に出づるものごせり。

日本に布教せし者はエスイト派を最ごす

伊太利人ヨアンネス・バプチスタ・モンタヌス(Joannes Baptista Montanus)が一五六四年豊後よりの書信中に曰く、彼はコスムス・ツリアヌス(Cosmus Turianus)によりて豊後王の許に派遣せられ、初めて日本に來りしが、豊後にては一年半以上に亙り一人の僧を得たしご要望してありしごご、可憐なる待遇を受けしが、王は猶佛教を信じて靈魂の不滅を否定するご佛僧ご等しかりしかご、基督教徒には敬意を表せりご。モンタヌスは尙豊後に於て日本人を改宗せしめし手段を説きて曰く、先づ彼は強き論法を以て日本の宗教を斥破し、此によりて救濟せらるるごは難しご云ひ、之を了解したる後に、神は皆無より世界を創造し、其像に似せて人を作り、以て萬物を支配せしむるやうにしたれごも、惡魔

に走るものは之に與かるを得ずといふこと、罪は我等の上に死を齎らしめしこと、三位一體の第二人格が處女マリアに於て人間の形として生れ、我等の罪の爲に死し、以て我等が永久の幸福に入るの道を作りたること等を語れり。次に律法、習慣、洗禮の神祕を説明し、最後には佛僧の提出せる基督教に對する質疑に應答せり云へり。

トロユス奇法を以て日本人を改宗せしむ

トロユス (Trojus) は受洗せし人の頸に十字架をかけ、各人に念珠及神聖にせられたる蠟牌を與へたり。蠟牌は一面に荆棘の冠をつけたる基督を印刻し、一面には三本の釘を印刻せるものなり (羅馬にては之をアグヌスミ稱す)。トロユスは此蠟牌を多數に容れたる大箱を臥亞より日本に持來りたり。其價は法王の加持を經へたるものにて莫大のものなりき。タカタ (Takata) の或老婦人懇請して此一牌をトロユスより得たるが、逢ふ人毎に之を示せり。これよりして風説を生じ、大なる聖物羅馬より到着して、タカタに於て見らるべしとの訛傳遠近に弘まり、成るべくは同じ牌を得んことを欲し、少くも之を見んことを欲する人々平戸及近傍の地より滿載の船にて集りたり。トロユスは之を見て大度量を示し、人々の中に一千五百牌を頒ち、其神祕を十分に説明せり。

エスイト派日本の歌謡を作る

エスイト僧には舊約聖書の歴史を題して日本の歌を作りし者あり。降誕祭又は復活節には豫言者が救世主の誕生及苦惱に關して豫言せるものを歌ひて、次で練り歩き、其前には天蓋の下に安んぜる基督の像を運び行けり。亦其前にはエスイト教徒僧服を着け、頭には薔薇の總をつけ、日本の調子にて日本の歌を歌ひ、

マリアよ、汝が行きし時

汝が思寄りしこころ見たるものを語り給へや。

云へば、一人の老いたる日本人は水瓶を打ちて歌を以て答ふるやう、

彼等は我が主を奪ひ去れり。

故に我は悲に堪へず、失神して臥せり。

こ。

演劇を催す

時にはエスイトは禮拜堂内に舞臺を作りて、舊約の劇を演ぜしことあり。イスラエル人が埃及を出でしこと、ファラオが紅海にて滅びしこと等なり。又ヨナを演じて巧に海、波、船を見せしこともあり、又アダムの墮落、アブラハムの犠牲、ヨゼフの逃走、サムソンの死、其他舊約の歴史をも演ぜり。

ヴィレラは十月、十一月に一基の墓石の上に黒き布片を蔽ひて、其上にて説教し、審判の日、地獄の苛責、神の子の幸福などを説きたり。

一五六五年には都其他に在るエスイト教徒は法王ピウス四世の命によりて、トレント會議の好結果を得んが爲に記念祭を行ひしこともあり。各地より信徒多く集りて之に参加せり。

エスイト派の奇なる布宣法

又エスイトは安息日に於て聖水を頒てり。而して臥亞より聖穀ミヴェロニカの手巾を受領したることを到る處に報告せり。之が爲に多くの人は都に至らんとして船を雇へり。七十リグ以上の遠地よりも都をさして行きしが、殊に山口及博多よりせる者多數に上れり。當時兩市ともに兵燹の爲に焼けて再建中なりしかども、之をも顧ずして推寄せたり。聖穀を得んことを豫め斷食祈禱をなしたる後、之を直接エスイト教徒に申込まずして、一葡人の仲介により

て得たり。

此中に大村の王バルトロメウもあり、彼も聖穀を得んとして來りしに、ツリアヌスより之を得たり。ツリアヌスは彼の爲に之を黄金の中に入れしめ、尙海馬の骨を以て作れる「アヴェマリア」を添へて共に獻せり。王は兩品を受けて頸に懸けしが、之が爲に其身の神聖となりしやう思はざるにも非ざりき。然れども人々の最も大なる注意は耶穌の面影の印せられあるヴェロニカの手巾を見んごするに在りき。

基督教につきての日本人の反對説

エスイト派が一般の大反對ありしにも拘らず、其計畫を日本に於て實行せんとして來りしは驚嘆すべし。日本人は觀察に敏くして議論に長ぜり。其證據はエスイト派の接せる許多の反對説に見るべし。サヴェリウスが初め鹿兒島に説法せし時、地獄の苛責の恐るべきことを説きたるに對して日本人は云へり、「サヴェリウスよ。汝は我が父母、祖先又は子孫を其滅すべからざる業火の中に置くか。我等を生みし人々は其處に燃ゆるか。彼等にして永久其處に生くる爲に死に、又其處に常に死ぬる爲に生くるものごすれば、我等一千の生命を有せりごも、何人の爲にさやうに屢々死なんご欲すべきか。神は世界に生れ出でて間斷無く苦楚を受くる人々を助け得ざるか。彼を全能ごいふべきか。如何にして之を慈悲深しごいふか。父母、兒孫、親屬が堪へ難き苦痛に悲鳴を擧げつつあるに、我等天に伴はるごも何の樂のあるべきか。慈悲ある創造主が憐むべきものを永久に罰するを以て快ごするは何の故ぞやご。」

サヴェリウスは此議論に答へ、彼等をして悟せしめたりご云ひしが、如何なる議論を以て満足せしめしかを語らず。唯彼は死せる日本人の罪深き状態を語りたるには、皆涙を流せりごのみ云へり。

サヴェリウスは又彼等に告げて、凡てのものには初ありご云ひしに、彼等は直に答へて曰く、其の初は善又は惡ならざるべからず。神は善ご惡ごを一時に作りしか。如何にして彼は神にてあり得て、凡ての善を自己に限り得るか。彼若し善ならば此等の惡魔は何れより來れるか。神は惡魔を惡に作りしか。然らば彼の多くの善は何處に在るか。或は彼は惡魔を惡に陥れしめざるを得るに拘らず、之を惡に陥るに任せたるか。人は清く神に仕ふるが爲に創造せられしか。何故に彼は惡に誘惑するごを惡魔に許ししか。人は神の靈なしには生存し能はざるに、何故に自己のなすがままに放任するか。神は人を自己の弱點を脱する能はざるものごして創造し、之が爲に人は罪惡を犯して永久に罰せらるるが如きは、神の善ご矛盾せずや。又地球上の如何なる被造物も行ひ能はざる律法を作りて、之を聊たりごも破れば永久の刑罰を受くるは何の故ぞ。日本の宗教は外教に比すれば、神の慈悲の一層善き基礎の上に立てられたるものなるは、永久の地獄を立てざるにて明なり。阿彌陀、釋迦、觀音を拜し、之に仕ふる者は死すれば彼等の一時的の生命より永久の濟度に入るを得。若し死後現在の罪の爲に罰せられ、爲に苛責に逢ふごもあるも、罪の大小に隨ひて唯或時聞だけ續くものなりご。

日本人の反對説に關するフェルナンデズの書翰

尙日本人の日々の反對及難問を領解する爲に、ヨハンネス、フェルナンデズが山口よりサヴェリウスに送りたる一五五年の書簡を引用せん。曰く、サヴェリウスの出發後、日本人はエスイト教徒の家に集り、種々の質問を發して彼等を惱ませり。神は如何なる物質を以て靈魂を作りしか。身體は地水火風より成るを知れごも、靈魂は如何。靈魂の形及色は如何。惡魔は如何なる動物なりや。何故に人を罪に誘惑し、主ごして人を破滅せしめんごするか。神は凡てのものを善に作りたりごせば、惡魔は如何にして惡ごなりしか。神は如何なるものにして何處に在るか。神は見るを得ずや。善

のみの存する天に達すべき路を神はさほぎの障碍困難を以て塞ぎしは何の故ぞや。

佛僧エスイト派を罵る 山口の大火

佛僧等は絶えず、殿堂、僧院に於てエスイトを悪罵せり。彼等は公に説法して曰く、基督教徒は食人者なり。惡魔は黄銅の像より語りて、山口は基督教を奉ずる惡の爲に近き中に全く破壊せらるべきことを豫言せり。幾許も無くして彼等の云ふやう、彼等は一夜火が天より山口の宮殿の上に降りたるを見たりと云ひしに、其豫言は不思議に的中し、宮殿は燄ちにして焼け、火は八日間消えず、其上殺戮し殘虐は老幼を宥さず、母の乳を吮へる嬰兒にも及びり。身を脱せんこそざりし者は別して憐むべき慘死をなせり。是に於て佛僧は一齊に叫びて曰く、基督教の未知の神は最も恐るべき怪物なり。若し其宗教にして日本に足場を得ば、國は全く破壊せらるべし。

羅馬教が日本に流行せし所以 其第一因はエスイト派が貧民を懷柔せし爲 救貧院の建設 佛僧は貧民に對して暴虐なり

然れども斯くの如き反對ありしにも拘らず、基督教徒は日本に於て成功せり。其事歴を擧ぐれば下の如し。エスイト教徒の日本に入りし以來、彼等は人口の多數を占むる貧民の訪問を受けたり。此國には人口甚だ多くして、爲に彼等は互に他を害せんとするもの如く見えき。貴族は臣下の利益によりて生活し、臣下は之に對して多額の年貢を收むるが爲に、貴族は収入の幾何をも知らざるほぎ富めるに反して、貧民は又極端に貧なり。而も同情は此國に於ては見るべからずして、貧民に對する慈善なき殆ど形迹だもあらず。エスイト教徒は此無情を攻撃し、基督教が貧人に對する慈悲を旨とするこゝ、人は他人の艱難に同情すべきこゝ、隣人の不平を見て動かざる人は自家の難儀を嘗むるを當然とするこゝ等を説けり。此くの如く貧民に訴ふる所深きが故に、貧しき日本人は基督教義を深く喜びしが、其

教義の現實に行はるるや、一層感銘する所ありき。即ちエスイト教徒が王公をして改宗せしむるや、隨ひて多額の收入を得るこゝなるが、之を得れば彼等は直に救貧院を建て、之を二部に分ちて、一部には癩病者を容れ、一部には他の病人を容れしを以て、多數の人は集りて此に入り、入院と同時に洗禮を受けたり。此くて改宗者の數は日々増したるが、之が爲に要する所の費用も大なる額なりき云々。日本の基督教徒が多くは病人、老衰者及貧民にして、唯扶養を受けんが爲に改宗せりとは、多くの書簡中に見ゆる所の不平なり。且彼等の歸依するこゝ愈々多きを致せるは、佛僧が貧民を顧みず、慈善を行はず、葬儀を行はず、死後宗教の要求する所のものを彼等に與へず、阿彌陀、釋迦に共に幸福に生活し得るこゝのみを目的とするが故なり。されど佛僧の私慾に耽るより考ふれば、貧者に薄く富者に阿る所以も怪しむに足らず。エスイトが天に入る路は貧民に取りては富者の如くに困難ならず、現世に富なき者は來世に於て一層享樂し得べしと説けるも、亦貧しき日本人には快く受取られしなり。

第二因は侯伯の貪慾

此くの如く貧民の歡心を得し外に、海洋に濱せる國々の君主の貪慾を利用せしも、亦基督教流行の一因たりき。葡人は臥亞、菲律賓、媽港、其他より貨物を滿載せる船を日本に送り來りしが、此等の碇泊する地は皆利益を得たり。豊後、有馬、鹿兒島、山口、平戸等は便宜なる港を有せしが、皆其貿易を自國にのみ獨占せんせり。是れエスイト教徒無くてはなし得ざる所なり。船長はエスイト教徒の指揮によらざれば船荷を卸すこゝを敢てし得ず、且エスイト教徒は自國の船の着する時には之を出迎へて、加持力教の弘布を獎勵せんとする君主の港灣に案内する風なりき。

ロドヴィック・フロスは平戸に於て、其王が改宗せんとする多少の傾向あるに拘らず、説法の禁止を受けしこゝあり其時の書簡を引用して上記の一證すべし。曰く、「此頃予は葡船二隻の航行し來るを見たるが、其船長は予の許可無

くては平戸に入るを得ざるなり。王は之を見て利益の望に刺戟せられ、彼は從來未だ予に挨拶せざりしことを謝したる後、熱心に予に依頼するに葡船の平戸に碇泊するを禁ぜざらんことを以てし、其の厚意に對しては數日内に以前の如く説法すべき特權を與ふべき命令を發すべしと云へり。是に於て船は予が許可によりて平戸に入れり。而して王に對しては曩の約束を履行し、彼の命令によりて毀れたる會堂をば彼等の費用を以て再建することを許さるるや否やを問へり。然れども王は之を遷延して、終に予等を欺きたり。此時「聖十字」といふ船、海岸に現れしが、予は先づ之を見付けたければ、其船に赴きて、船長ペーテル・アルメイダ (Peter Alameda) に平戸より一リーグ半を隔てたる地に停船すべきことを勧め、王に對しては約束を履行せざれば船を他港に赴かしむべしと威嚇せり。王は數日間熟考すべしと云ひしが、遷延せばアルメイダの拔錨せんことを恐れ、然らんには大なる損害なるべしと思ひ、親ら平戸に來りて教會を再建することを許可したりと。

此他、エスイト教徒が葡船との貿易を行はしむるを條件として、君主より布教の自由を得たる處多し。

鹿兒島に於て一旦布教を許しながら、葡船が平戸の港に荷卸せりと聞き、認可を取消したるは、前に記したるが如し。

當局者はエスイト教師が葡船を思ふがままに荷卸せしむる命令權を握れるを以て、之をば全く教師の處置に歸し、非難を加へしなり。

第三の原因 エスイト派理學を教示す 日本人の知識欲

此二理由の外に第三として擧ぐべきは、日本人が自然科学に知識乏しきことなり。エスイト僧は天候、其他流星に關すること、空中或は土地の缺罅に於て燃ゆる火の恐るべき徵候たること、月夜空中に飛ぶ火花、發光する炬火、燃ゆる燈火、落つる星を生ずること、又土地が寒氣の爲に凍らず又熱によりて乾かぬ收穫期に、蒸發氣夥しく發して燐火を生ず

ること語り。彼等は又彗星の發現及意味を語りて、其長尾を曳きて或は血紅に見え、或は暗く、或は輝きて見ゆる時は、早魃、劇暑、暴風雨、地震、饑饉、或は洪水を意味すこと云へり。又雷雨の起りにつきては、或は雲中に包まれて唯音のみを發し、或は落雷して之に遭ふものを破壊し、又は發火せしむること、及晝間よりも夜間に多く、主に夏季に多きことを語り。彼等は虹の見ゆるは太陽又は月よりすること語り、其は大抵雨後に見ゆれど、再び一般的洪水を起して全世界を滅することなしといふ神の告として見るべきものなりと語り。又彼等は天空の開くること及月の周圍の圓環の道理を示せり。夕方の白き又は赤き雲は好晴の兆にして、朝方のそれは暴風又は多量の雨を豫報すること、雷鳴を藏する雲は雨を生ずること、又水の外に乳、血、蛙、石、其他を降らし、人をして嘆異せしむることあるを教へたり。彼等は又雪は薄き雲にして、落つる際に凍りて形を變ずること、霞は多少の溫度を保ちながら急に寒氣に逢ひたるものなること、高處に在りて凍れるものほご小にして低きほご大なること、主として夏季に於ては寒溫の差違の大なることを教へたり。彼等は又露、霧、霧、水の起ること、時を得たる融解及小雨は大なる利益を與ふること、冬は熱が地中に残りて各種草木の根を保存すること、夏季に於ける露は土地を濕し植物を養ふこと、之に反して日光は草其他のものを燥し、不時の霜は早萌の芽を害すること知らしめたり。又泉及河は其根本は海に在り、地中を経て鹹味を失ひたるものなることを示し、又水の深淺の祕密、大洋の潮の満干を示せり。殊に彼等が日本に多き地震に關して語りたるは、地震は時には巨浪の船を揺がすが如く、時には上下動をなし、村落、都市、或は大なる地面を陥没せしめて、測られざる凹地を残せることありて、日本人の心に不可思議なる効果を及せるものなればなり。然れども日月蝕の月日時分を豫報し、日蝕は月が太陽の前を通過すること、月蝕は地球が日月の間に來れること起ることを示し、こときは、聽く者をして嗟嘆一層ならしめたり。

日本人は雷、電、雲、雨、霞、洪水、其他の自然的運動及流星等に關する談話を喜べり。彼等は神祕に關する知識を得んご欲するの念強きが故なり。ヨハンネス・フェルナンデスは日本人が彼の家に來りて神及其事業に關して各種の問を發して時間を費したるごを語り居れり。

第四の理由佛僧より出づ 佛僧の暴戾 其無法なる生活

加特力教成功の第四の理由は佛僧より出づるものなり。彼等は惡き教義を教ふるのみならず、其生活も腐敗し、身持惡し。ロドヴィック・フロユスの書翰を引用して一例を取らん。一老婦人九十歳にして多くの殿堂に參拜し、其三者には多額の金員を喜捨せり。然るに佛僧は之に報ゆるに一着の紙衣を以てせり。此紙衣は彼等の尊重するものにして、阿彌陀の傳起それに書かれたり。而して重價を以て斯くの如き衣を買ふごは特典ご見做され居たり。之を着て死せる婦人は直に阿彌陀の住處に送られて、以前の罪惡を洗ふが故に、苦痛を受くるご無しといふ。然るにフェルナンデスは前記の婦人の親戚に當る或病人の許に招かれし時、此紙衣の無益なるごを明示し、之につきて多くの議論をせしかば、婦人は終に此を破棄したり。

日本人の宗教に關する他の害惡は、阿彌陀、釋迦、及觀音の爲に自殺するごごなり。

之にも増して忌むべきは佛僧の生活なり。放蕩、飲酒、姦通、殺人、其他の暴行は多くの人に知れ渡れり。彼等は大道に於て剽掠し、水上にて海賊をなし、屢々之を全市全村に於て行ふを以て罪ごなさず。家を焼き、住民を殺し、嬰兒すらも容赦せず。此暴虐の爲にエムペロル信長は僧堂を焼き、且多くの僧侶を磔木に釘附して苦死せしめたり。

是れ基督教徒の爲に路を清めたるものにして、彼等が六千リーグの海を遙々來りしは、唯救済に達する正しき路を教ふるの外に目的を有せずと言ひし詞も重みを加へたり。

第五因は日本の宗教ご加特力教ごの差異少かりごご

最後に日本の宗教ご羅馬教ごの間には差違少かりしが故に、エスイトの布教を容易ならしめたり。サヴェリウスも佛僧等の語れる所なりごして、兩宗教は差違少ければ一般の人に西教を説くご容易ならんご云へりご記せり。然れごも此時に説きしは唯三位一體説のみなりき。其後次第に大なる立脚地を得るや、教會の儀式を悉く執行せしに、日本人は贊嘆せしかば、愈々羅馬教の教義を一層深く説くに至れり。

確に日本の宗教ご羅馬教ごの間には大に類似の點あり。都に在るダイロ(内裏)は羅馬に在る法王に似ざるにもあらず。又日本には多數の僧院ありて多數の僧尼を收容し、彼等は罪の爲に身體を罰し、或宗派に於ては結婚を違法なりごせり。彼等は僧院に對して慈善を示せば示すご速に阿彌陀の住處に行き得べしご教へらる。故に此事に關して彼等の物惜せぬごは、彼等をして未來の幸福を平等に享けしむ。何ごなれば死者の繼嗣は僧に贈遺をなして彼等の苦痛を救はんごを乞へばなり。彼等は祈禱するに念珠を用ふ。宗教上の事を判斷するは内裏ご僧院ごなり。彼等は日本の聖師の墳墓に詣つるごを信神ご考ふ。

羅馬教の日本に成功せし主なる理由此くの如し。然れごも前に擧げたる種々の原因より反抗を生じて、今日にては日本には一人の基督教徒も生存せざるに至れり。信長、太閤様、内府様は既述の如く皆信徒を迫害せり。されご内亂の爲に多事にして十分に行届かず、往々殘虐の執行に間斷ありき。

基督教の最初の迫害

然るに公方様(Comosama)が職位に上りてよりは、秀頼は既に亡び、恐るるに足る者は一もあらず。是に於て彼は一六一七年新に迫害を始め、凡そ工夫し得べき最大の苛責法を以て基督教を全滅根絶せんごせり。人を磔木に釘附し、左

右より槍を送りて之を殺すことも、餘りに容易なる死の如く思はれ、さりて斬首は愈々單純なり。是に於て久しく苦痛を與へて殺すの方法に想到して、焙殺を行ふことなれり。先づ大なる材木を立て、其周圍に木を積み、風の吹來る方角のみに口を開け、此口を通過して被責者を入れ、杖中に進ましめて、長さ十二呎の長繩を以て之を縛す。而して杖の周圍に口の開きたる處だけを除きて殆ど同一距離に材木を置く。そは風が煙を吹きて爲に殉教者は窒息し、よりにて此酷刑が願ふよりも早く容易に死なんことを妨げんが爲なり。此くの如くして彼等を徐々に死なしめ、成し得べくは一千の人を一回に死なせ、而も想像し得らるる限りの苦痛を味はしめんことはするなり。焚刑は夙に世界に行はれたれども、日本に於けるが如く残酷なる方法を以てするは、未だ曾て有らざる所也。

伏見に於ける虐殺

公方様父の歿後に於て王位に上るや、亦殘虐を行ひ始めたり。彼は伏見を通過せし時、奉行伊賀殿 (Inagadono) 板倉勝重に命じて、凡ての基督敎信者を男女小兒の別無く凡て焚殺すべし云へり。

内亂の間にダイロは無限の權力を失ひしより、王は各其領土を自由に支配したるが、彼等は他を排して葡船の利益を占めんが爲に、エスイト教徒と聯絡を通じて自國の港灣に停船せしめ、彼等に與ふるに布教の自由を以てせり。此は既に言へるが如し。

然るに内府様の日本を平定するに及びて、諸王の權力は著しく制限せられ、惡意ある目的の爲に布教を許すことを禁止せり。此命令を受けたる彼等は服従を餘儀無くせられ、羅馬敎の僧を求めて四名 (ペーテル・アブ・アスセンシオネ以下) を獲、之を大村に於て斬首せり。

基督教徒を焚殺せし所以 處刑前の布宣法

然れども斯くの如きは餘りに溫和なる方法なりて、火刑を行はんにせり。處刑の前日に二頭の牛もて牽ける車の前部に曲けたる銅桿を立て、下端を車に定着し、此棒の上にゴム (Gum) と稱する大なる銅鉢を吊り、其近くに一人の僕ありて鐵の鉗矛を持ち、各街の端に達すれば鉢を打つ。其音により凡ての人は家より走り出でて見る。其集るを待ちて靜肅を保たしめ、牛の前に進める騎馬の布令使公文を讀上ぐ。處刑場に近き家にては、焚かるる人の數に應じて若干の薪を給せざるべからず。之を終ふれば番人長に萬事を委任す。鉢を打つ者の背後にはエムペロルの臣一人及商人車上に擴けられたる緞通の上に座せり。前者は扇形の飾を附せる旗の頂に二個の總を附せるを把り、後者は長き杖の其端には眞鍮製の葡萄を附し之に節の多き糸を結べるを持つ。車の左右には槍兵及銃兵の列ありて警固す。同様の列は車の前後にもあり。此行列は各街の端にて停止し、布令者は各戸に何を爲すべきかを告ぐ。其後處刑場に於ては死すべき人の數に應じて杖を打ち、大なる木の堆積を其周圍に置く。終に指定の時になれば囚人を輸送し、火を點じて徐々に焙り、具に苦痛を嘗めしめて殺すこと既記の如し。

焚死基督教徒の灰を海に投ぜし所以

ペーテル・デ・ズニガ (Peter de Zuniga) 及ロドヴィック・フロレス (Lodowick Flores) が十二人の同輩と共に長崎にて殺されし時には、夜間數人の葡人來り、神聖なる記念物として保存する爲に、前記二人の身體より半燒の肉を剪取りて去り、翌日になれば其屍體は殆ど何物も残らざりき。長崎奉行は之を好まず、翌月 (一六二二年八月) にカロルス・スピノラ (Carlos Spinola) 外三人の刑せられし時には、屍體を深き穴に投じて灰となるまで燒き、其灰を遠き海岸に持行きて風の飛散せしむるに任せたり。

其時犠牲者中の二人は風の吹かぬ處に縛せられしが、火は強く柱の上を打ちて縛の繩を焚切りたれば、彼等は燃ゆる木の堆積の中を逃れ、背教者たるを甘んぜんせり。然るにスケンダイノ (Xaquendaino) は綺麗なる氈の上に日本の貴族に圍まれて座し、長崎奉行ゴネオク (Goneou) によりて行はるる處刑を見居たりしが、かの二人の者を遮止し、槍及棒を以て火の方に追ひやりたり。日本の宗教を信ぜんとする熱心よりせしものには非ず、苦痛を忍びかねての爲なりと判断したればなり。彼等は此時より以前に考慮すべきことを今になりて晩く考附きしなり。

江戸に於ける慘刑

又一六二三年江戸に於て行はれし迫害は多くの中にも恐るべき一例なりき。ムチウス・ヴェレシウス (Marius Verelshius) が日本より羅馬の本部に宛てたる書翰によれば、内府様は原主水 (Fara Mondono) に云へる貴族を基督教信奉の科により、手足の指を切り、額に烙印せしめしが、後年公方様の代に至りて親戚なるの故を以て再び原地位に復し居りしが、竊に同じ宗教を信奉する由家臣より江戸の奉行に告發せられ、エムペロルの命によりて火刑に處せられたり。其後間もなく基督教徒拷問の手段により、ヒエロニムス・アブ・アングリス (Hieronymus ab Angelis) 及其弟フランシスクス・ガルヴェス (Franciscus Galves) の兩エスイト教徒發見せられたり。

アブ・アングリスの傳

アブ・アングリスはカロルス・スピノラ (Carolus Spinola) と共に東印度に航せしが、船過りてブラジルに着したり。直に葡國に歸らんせしかぎ、英國船に捕へられたり。然れども脱走してリスボンに歸り、印度に再航を企て、終に支那に行きて此に止るこゝ久しく、後日本に渡れり。伏見に滞在するこゝ數年なりしが、駿河に赴きて殿堂を建て、私に羅馬教を布宣し居たり。次で彼は更に江戸に至り、殿堂を作らんとして家屋を買はんせし時發見せられ、駿河に脱れ、

更に長崎に赴けり。一六一四年多數の基督教徒都及大阪より日本最北部の寒國スングール (Sungai津輕) に放逐せられし時、彼も内府様の命により同地に旅行せしが、終に江戸に歸り、再び以前の計畫を實行せんせり。然るに彼は此計畫に熱心奔走する中、江戸の奉行エノキチ・カンビョーエ (Enokichi Gambioe) の護身兵に探偵せられぬ。彼は之を知りしを以て潜に脱走せしが、兵士等は復讐の意を以て彼の宿泊せし家の人々に對して暴行をなせり。アブ・アングリスは宿主に不便を來さしめしこゝを聞きて心を惱まし、シモン・エムボ (Simon Jempo) と稱する日本人と共にカンビョーエの許に赴けり。シモンは元佛僧の間に在りて青年時代を送りし者なるが、のち基督教に入りてアブ・アングリスの爲に書記を勤め居たるなり。

ガルヴェス逸出して再び捉へらる 原主水焚刑に處せらる

四十七人江戸附近にて焚殺せらる

弟フランシスクス・ガルヴェスは兄の發見せられしを聞き、江戸を距る一哩鎌倉に亡命せしかぎ、やがて捕へられぬ。同時江戸に於て四十七人の基督教徒捕へられて、凡て公方様より火刑を申渡され、一六二九年十二月四日執行せられたり。處刑者は強き繩を罪人の頸に捲き、手を後に廻して縛したり。アブ・アングリスは馬に乗せられ、胸には大字を以て名を書きたる文書をつけたり。彼の後にはエムボ及十五人の同類徒歩せり。フランシスクス・ガルヴェス及原主水も亦馬に縛りつけられ、兩人の後には殉教者の一隊従へり。原主水の前には布令使あり、銅鉢の音止むと共に次の如き詞の公文を讀む。曰く、エムペロル公方様は基督教を嫌ふこゝ甚しく、彼の甥すらも之を信せしが爲に火刑に處せらる。萬民明に此事を知れよ。江戸よりカミ (Cami) に向ひて遠かちる處に杖十五本を建つ。その中三本は他のものよりは稍々市に近し。凡て木の堆積を以て圍まる。杖を離るるこゝ約一尋半なり。兵士は無數の群集を遮止せんこゝ處刑

場を圍みたり。然るに杖は平原に打たれありしにより、群集は附近の山上に集りたれば見物を妨ぐべきにあらず、又貴族等は山腹に棧敷を作りて處刑を明に見んこせり。四十七人の罪人は手足を各一本の杖に緊縛せられぬ。既にして火は周圍に燃え擴り、殉教者は恐るべき悲鳴を擧ぐ。此間原主水、アブ・アングリス、及ガルヴェスは尙馬上に在り。苦惱者の慘狀を見せしめんが爲なり。次で第一に原主水、次にアブ・アングリス、最後にガルヴェスの順序にて杖に緊縛せられたり。此時前の被刑者中尙生死の境に在る者ありき。

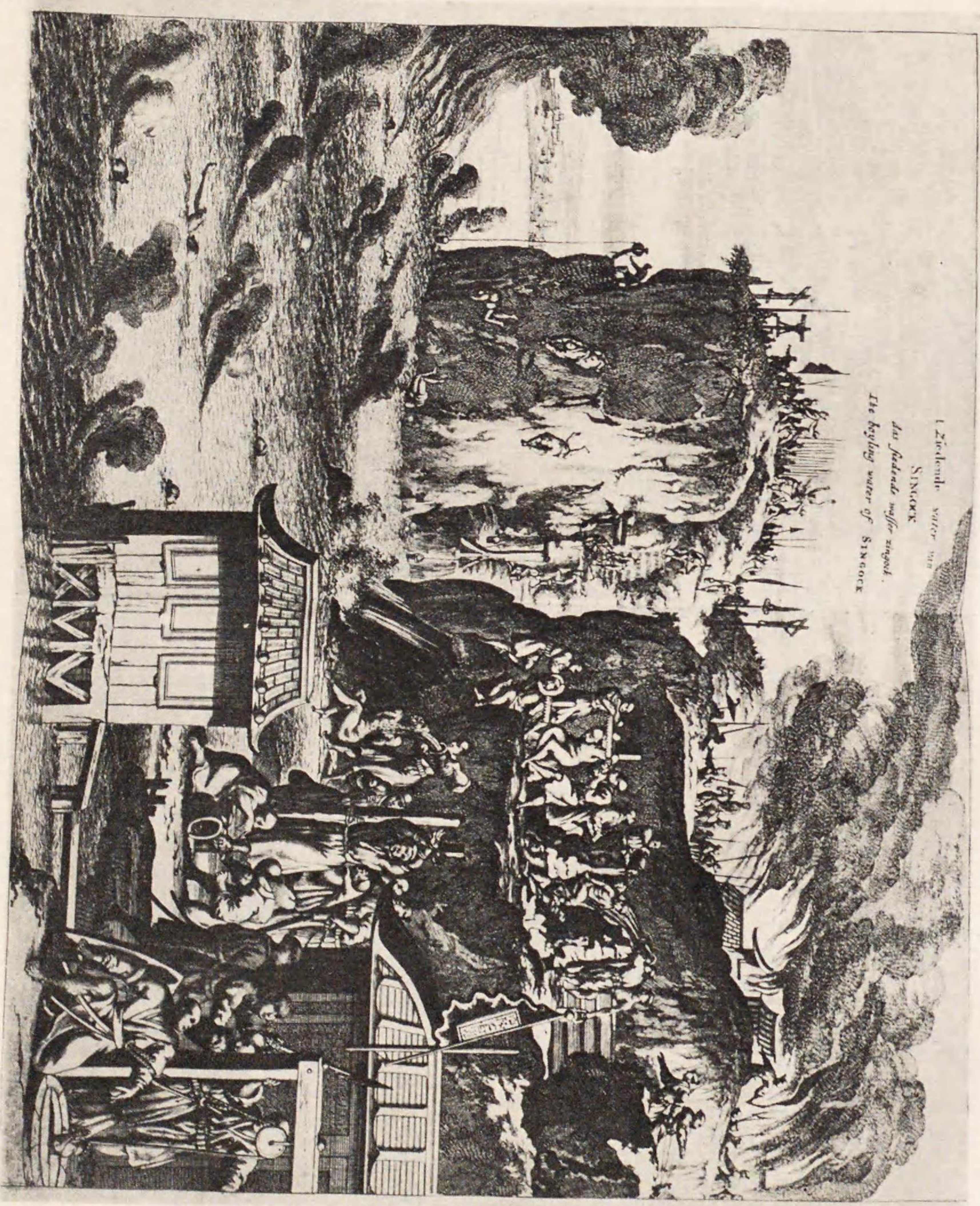
ハザルトの語る所にては、當時二貴族あり、馬より下りて此光景を見居りしが、一人はガルヴェスに、一人はアブ・アングリスに走りて共に焦死せりこいへども、予は之に關して證據を見ず。唯二人の婦人あり、四十七人の慘狀を見て公に基督教信者なるこゝを裁判官に申出で、直に處刑場に送られたりこ、前記日本書簡に記されたり。

江戸に於ける其他の慘虐 小兒に及ぶ

殘虐は之に止まらず。マリア・ヤゲーアといふ婦人はアブ・アングリスを宿せしめしにより、其他の基督教信奉者、或は家を貸したるもの、或は借家の保證人たりしものなき、三十六人と共に火刑に處せられたり。小兒に對しても前代未聞の蠻刑行はれ、彼等は處刑場に牽出され、兩親の眼前に於て或は斬首せられ、或に胴切にせられ、或は寸斷せられたり。

羅馬教徒に對する布告

引續き江戸其他近國に於て、基督教徒は勿論、或は之を厚遇し、或は家を貸與したる者を告發したるものには、家を貸したる者の邸宅及千五百クラウンの價值ある黄金三十片を賞與すこの令を發したり。之が爲に虐殺は野火の如く擴大せり。



地獄の沸湯 (基督教徒の迫害)

仙臺に於ける虐殺 大村にて 有馬にて 播磨にて 肥後にて
廣島にて 長崎にて

仙臺(Xenzai)市にてはデダクス・セルヴァリオ(Didacus Cervilio)といへるエズイト教徒、六十人の信者と共に鐵夫の服装せるを發見せられ、仙臺(Soundai)に於て嚴冬の夜水中に於て凍死せしめられたり。

大村にてはドミニカン派ペーテル・ヴァスケス(Peter Vasquez)外一名同様に凍死せしめられたり。

有馬にては一朝鮮人官憲に捕へられ、鐵の鉗子を以て指を碎き、胴まで冷水に漬け、終に火刑に附せられたり。

播磨にては基督教徒は唯追放に處せられたり。肥後に於てはミカエル・マキシマ(Michael Maxima)を刑するに、先づ笞を以て打ち、高き柱に吊上げたる後急に之を地上に落し、然る後血を混じたる水を飲ませ、腹を踏みて之を吐かせ、日光に曝し、終には沸騰せる硫黄湯に運び、之を注ぎて以て死に至らしめたり。

廣島(Trioxima)にては磔殺又は斬殺に逢ひし者にヨヤマ(Yoama)等數人ありき。

肥前にては基督教の大迫害者は鍋島カミ(Zabexina Cami)にして、彼は公方様が五十人の教徒を火刑に處したる時の見物人の一人なりき。

長崎にては宗教の爲に葡人一名、日本人一名を火刑に處せしこゝあれども、奉行ゴンロク(Comrook)は他の支配者が虐殺の多きを競ふが如くには殘暴を好まざるやうなりき。蓋し彼は病氣の爲に晝夜不眠に陥り、又上司に請ひて權力の地を辭せんませしによりて、基督教徒を顧ること少かりしなり。

河内殿長崎奉行となる

ゴンロクの辭意は聽届けられて、終に更迭は行はれたり。河内殿(Kawayado)エムペロルより派遣せられしが、此人

は長崎市に困難及驚愕を生ぜしめたり。殊に基督教徒に對して甚しき事。河内殿は嚴格にして大膽なる人なり。從來長崎を治したる人は大抵普通の商人にして、エムペロルの命令によりて此地に住し、エムペロルの宮中にて要する物品を買ふの目的に過ぎざりしなり。由來日本の貴族は傲慢にして、凡ての商人を狗の如くに見たり。是が爲に凡ての人は新奉行河内殿を恐れたり。

直に基督教徒の虐殺を開始す

一六二六年六月河内殿長崎に着任せり。到着後二日五十三本の杖を打たしめ、周圍に例の如く薪材を堆積せしめたり。翌日一年間家の床下の穴に隠れ居りし日本の監督フランシスクス・バルケロ (Franciscus Parquiero) 及バルタザル・デ・トリス (Balthazar de Torres)、有馬のエスイト僧會の監督バプチスタ・ソラ (Baptista Sola) 其他僧を宿せしめし日本人五名、其他の葡人を此處に引出したり。葡人は背教を肯せしが、他は節を變ぜざりき。尙其他にも男女の被刑者ありたり。

背信者を作らんとする奇計の發明

河内殿は虐殺の事務の豫期以上に多きに驚きぬ。彼は長崎の基督教を根絶せんせば、少くも千名を屠戮せざるべからざるを見たり。是に於て彼は他の方法を按じぬ。先づ基督教徒をして其所有財産を申誓せしめて之を沒收し、又羅馬教の信仰を持続すれば耐へ難き拷問を恐るべき死を與へんを威嚇し、若し背教者となれば大なる利益を與へんを云へり。實際背教者は大なる利益を得たり。河内殿は彼等に火刑者の家屋、土地を與へ、又年々六十隻以上長崎に來れる支那人をして其家に宿泊せしめ、而して宿泊者をして其宿泊せる家に對して賣上高の百分の一を拂はしめたり。此方法により多くの貧民は俄分限みなれるものありき。又葡人の基督教徒の家に宿泊するこも及之を貿易を行ふこも禁止せり。

基督教を棄つる者多し

十月河内殿は基督教を捨てたる者をして彼の面前に出でしめたり。彼等は盛裝して出でしが、其人員千五百以上に及びり。彼は町疇に彼等に應對して、益々恩恵を與ふべきことを約せり。

茂木に於ける慘刑

同時に迫害熱は各地に増せり。長崎より一哩を隔つる茂木 (Moggy) と稱する村は有馬の君主ボンゲメンド (Bongemend) に屬せしが、男七人及女五人此地にて死刑に處せられたり。彼等の處刑者の前に召喚せらるるや、直に額に烙印を受け、基督教を捨つるかを問はれたり。彼等は之を拒絶したるを以て兩頬を焼かれたり。然れども尙志を變ぜざりしかば、衣服を剥がれ、手足を延させられて大なる笞を以て打たれ、久しく呼吸を絶ちたる後、更に改宗するかを問はれしかば、尙之を拒絶せり。是に於て處刑者は更に拷問を始め、陰部其他身體の柔き部分を熱鐵を以て焼き、手足の指を切斷せり。最も驚くべきは此十二人の中に六歳の小兒ありしが、名狀し難き勇氣を以て前記の拷問に堪へしことなり。斯くの如き處罰を受けしもの彼等は獄に投ぜられぬ。此間に發見せられたる基督教徒の数は四十一人に上り、皆凡て前記の拷問に堪へしが、處刑者は被責者よりも疲れたるかと思はれたり。其中十七人は腰に重き石を括り附けて、遠く沖まで運ばれ、海中に投ぜられたり。此中には夫婦及其子三人あり。子もは十七歳、十三歳、及最幼者六歳なり。此幼兒は處刑者が之を捕へて腰に石を括りし時に泣き初めたり。此時處刑者は兩親に對し此小兒の生存を欲するかを問ひしに、否を答へしを以て、爾餘の人と共に之を水に投じたり。

日本の小兒頑強にして苦痛に堪ふ

日本にては兩親の罪の爲に小兒を死に處するは普通の事なり。兩親は小兒の上に生死ともに無限の力を有す。兩親は小

兒をして生存せしむるも、亦自己と共に苦しましむるも、彼等の好む儘なり。然るに死に赴くを嫌ひ且非常の勇氣を以て拷問を忍ばざりし日本の小兒は一人も無かりき。

ウサカ (Usaka) 市に於ては二人の幼年、一人は十歳、一人は五歳なりしが、進みて父と共に死せり。生後四日なりし彼等の妹は刎首せられぬ。ネカイ (Nekai) 島に於ては豪家の一家族凡て慘殺せられしが、中に數人の小兒ありき。

日本人は基督教を領解するに少し

此等の例が示す如く、日本人は品性高貴なるのみならず、又確固たる操守ありて、幼年期の者にして宗教の初歩さへも知らざるすら、言表し難き勇氣を以て最大なる拷問に堪へしなり。彼等は「バテル・ノステル」「アヴェ・マリア」(Pater Noster, Ave Maria) その他聖師に對する祈禱の外、新舊約全一の知識は殆ど無し。故に日本の殉教者は甚だ熱心にして操守固きもの多し判断し得べし。

小兒にして若し基督教信仰の根本を理解し得たらんには、一層神聖なるものなりしならん。

* * * * *

小兒の信仰心を硬からしむる日本人の奇法

抑々日本人は小兒をして殘虐なる死に對せしむるが爲に其心を硬固にす。是れ異常なる殘酷事により其心中に恐怖を懐かしめて爲すものにして、福音の何たるを教へて爲すには非ざるなり。ハザルトの語る所によれば、出羽の一貴族ヨハンネス・カツネメ (Johannes Catoune) に七歳の子ありしが、彼は之をして操守を固からしめんが爲に、日々之を教育せり。ハザルトの語をそのまま引用せんに、此カツネメ四人なる少し以前に子に語りて曰く、若し處刑者の來るを見たる時、汝は生きながら焼かるべきか、又は信仰を捨つべきか。小兒の曰く父上は如何。父曰く、予は焼かれん

こ。是に於て小兒は亦答へて曰く、吾も其如く爲さん。其時父の曰く、來れ、予は汝が其言の如く思想堅固なりや否やを試みん。此火を汝の手に握り、吾が命するまで放つ勿れ。小兒は直に手を開き、父は其中に活火の炭をおけり。少年は平然として之を握み、手は骨まで焼けたれども、父が命するまでは之を放さざりき。其後或人此兒に對ひ、火の爲に傷かざりしかを問ひしに、彼は答へて曰く、吾は生きながら焼殺さるる覺悟なりき。短時間手の裡に炭を持つは些事に過ぎず。エスイト教徒等の觀察によれば、年寄れる日本人が處刑者の手に在る時の言行を見るに、十字架及マリアの像を持ち、尋常にエスス、マリアを唱へて祈禱する外には何事をもせざる精神、此幼年者のそれに等しと謂ふべし。

地獄の熱湯にての處刑

然るに日本の迫害者は罪人を徐々に焦殺する以外に地獄の熱湯を用ひたり。其湯は硫黄を含みて熱度高し。峻しき山の麓に湧き出で、其力さいひ音さいひ、觀者をして震駭せしむ。岩の間より流れ出で、轟々として音高く、窒息するが如き水蒸氣を天に向けて迸發す。

此處に基督教徒は有馬より送られ、此沸騰する湯の中に裸體にして洗はる。此苦患にも拘らず宗教を棄つることを拒絶する者は、更に山の頂に送られて、其處より熱湯の渦流中に投下せらる。

長崎にては奉行河内殿が江戸より歸りし後、無慈悲に迫害を進めしが、殊に僧侶に對して酷烈なりき。火刑者の中に日本の僧にしてトマス・ソイセ (Thomas Soyse) といふ者あり。其宅に於て基督教信徒の名簿を發見せしに、其數一千に及び、長崎、大村、有馬に潜伏せる者もなりしが、後皆慘刑に遇へり。

河内殿は虐殺の終局する期なきに驚き、此くてはエムペロルの委任以外に及ぶと思ひて、一策を案出せり。

ソイセの名簿によりて多数は刑せられしが、其中に二人の老人あり。前エムペロルの時に長崎の奉行として宮廷にても格別に尊敬せられし人なり。河内殿は之に近親、義兄弟等を附して江戸に行かしたり。残れる者は長崎に近き山中に追入れ、衛兵を附して食物を求むるが爲に出づる無からしめ、又家屋を建てて雨を防ぐことも禁せり。之が爲に彼等は大概斃死せり。

門戸を釘附にす 他人に雇使せらるるを得ず

長崎に留まれる彼等の寡婦は戸を釘附にせられたれば、隣人私に壁に孔を穿ちて食物を與ふるにあらざれば餓死するの外無かりき。何人も基督教徒を雇入るる者は無く、新宗教を捨て舊信仰に歸るに非ざれば、海上に送りくる人も無かりしなり。

貴族等三十二人を謫す

其後程無く河内殿は羅馬教を信ぜし五人の身分ある人を捕へて、其妻子と共に（是れ秀頼の燒死せし時に不思議に残りたるものなり）媽港に向ひて出帆せんとする葡船を以て出發せしめたり。其條件としては直に臥亞に赴くべしこの事なりき。若し葡人此命令を奉ぜず、又は若し日本に来るべきあらば、生命も船貨も失はるべかりき。追放せられたる日本人は妻子以下從者を合せて三十二人なりしが、其中數週を経ざるに一老婦人の外は凡て生存せざりき。葡人の之を毒殺せしこゝは容易に判断し得べし。蓋し之によりて葡人は煩はしき道連を除去するを得、而も門閥等の關係より處刑するに忍びざる前記の人々を除去することによりて當局者の感謝を得べきを見込みてなり。かかる中にも河内殿は例によりて江戸に行くべき時になれり。其不在中には山中に追はれたる者どもも多少の自由を得、竊に長崎に來りて友人に逢ひ、藁屋に宿泊すること許されたり。

河内殿歸航後の虐刑

河内殿の長崎に還るや、追放者の志を變ぜざるもの三百八十四人は皆有馬に送られ、此地に於て無慈悲の待遇を受けたり。身體は熱湯を浴せられ、赤熱の鐵を以て烙印せられ、鋭き竹を以て打たれ、晝は日光下に裸體にて曝され、夜は冷氣寒風に曝され、又蛇の入れる鹽に入れられたり。小兒は恐るべき方法を以て兩親の眼前に於て殺されしが、其殆ど死なんとするや、醫をして之を復活せしめ、更に殘虐を感じせしめたり。

彼等が背教を肯んずるまでには、此くの如き苦痛を三四十日より六十日までも忍びたり。就中五人の者は命ありながら其肉腐敗し、終に新なる苛責に疲れて處刑者の手に死せり。

公方様(秀忠)の死

以上の流血は公方様の治世に始りしが、其一六三一年に死し、(譯者云く、二代將軍秀忠の死は一六三二年なるを、誤りて此年とせり。)子の當將軍様(oxogun-sama)之に繼ぐや、直に迫害は更始せられたり。

長崎奉行采女殿の殘暴

彼は長崎奉行の更迭を行ひ、采女殿(Omenetonne)を新に奉行に任命せり。此は公方様が久しく日本帝國の判事及監視官として用ひたる人なるが、此新任は暴動の起らざらんやうに警戒せしめんが爲なり。采女殿は猛烈、苛酷、殘虐の人にして、之に比すれば前任河内殿は溫和にして、一時に基督教徒を撲滅するには不相當なる程なりき。此撲滅事業を采女殿は容易なりとせり。名簿を引繼がれて、其中には信徒の姓名のみならず、住處も明なればなり。

采女殿は兵士七百人を伴ひ來るこの噂なりしが、實は四百人にして、中に數名の高官ありき。彼等は夜間は長崎市外に宿泊し、晝間來りて登聽せり。